
この果てのない大地の上で

縁の下

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この果てのない大地の上で

【Nコード】

N8753P

【作者名】

縁の下

【あらすじ】

槍殻都市グレンダンで有名な家系の出身であったが、とある理由で家から縁を切られ学園都市へと向かったルシエ。学生として生活する中で、本当の自分を見つけられるのか。*鋼殻のレギオスのオリ主ものです。原作の一年前からが始まりとなっています。現在、狼面衆などは出す予定はありません。途中で原作設定とずれていく可能性を内包しております。その点に注意していただければ幸いです*

第一話 始まりは

結果は最初からわかっていたのかもしれない。

そこが自分の限界だと突きつけられていても、どこかそのことに安堵してしまっている自分がいることに気づかされる。

まだまだ高みにはほど遠く、遙か頂からこちらを見下ろすその視線。

レイフォン・アルセイフ。

自分とたかだか一つしか歳の違わぬ少年。

藍色の瞳は勝利に酔うこともなく、ただ無機質な能面のような表情のままにこちらを見つめている。

わかっている、わかっていた。

諦念とも、無念とも取れる感情を抱きながら、しかしこの戦いの熱は冷めてはくれない。

剄脈が疼き、身体の痺れを火照りを闘いにぶつけると吠え狂うのを感じる。

しかし、一向に身体は動く気配を見せない。身体は十全十分な稼働をしてくれるであろうに指の一本すら仰向けに倒された地面から動こうとしない。

心が折れた、そう気づくのに時間はかからなかった。

天劍授受者 槍殻都市グレンダンにおいて、最強と謳われる強さを誇る十二人に与えられる選ばれし称号。

その天剣授受者に与えられる至高の錬金鋼^{タイト}、天剣。
この称号と天剣を掛けた戦いに、自身は敗れた。

敗れた。

それは一人の武芸者として？

それとも、『ルシエ』という個人として？

そのどれも違うとわかりながら、薄れゆく意識の中で悟る。

自分はラグナイト家として、敗北したのだと。

十十十

遠い、すでにそれは手の届かない夢のような最果て。
過去の自身の姿を投影し、そして現在の自身の状況を把握してい
く。

「なぜ……お前があのようなことをしたんだ」

深いため息とともに吐き出された言葉が、静寂の中に沈んでいく。白髪が混じり始めた初老の男は、瞑想するように目をつむりはっきりとした失望を滲ませながら言った。

「本当にする必要があったのか？ 答えよ、なぜだ？」

板張りの屋内、風情や伝統を感じさせる道場にその声は大気をわずかに震わせて吸い込まれていく。語気に荒々しいものが混じっていた。声の端々から男の怒りが伝わってくる。

問いかけられたものはまだ年若い少年。癖の残る黒髪にどこか憮然とした表情。すらりとした体格は、道着に隠れてわからないがしなやかな筋肉で覆われている。

武芸者、少年を端的に表すならその一言で十分であろう。

少年は答えなかった。それに対する答えは自身の中ではっきりとした形を持っていない。故にその問いに対する答えを持ち合わせていない。

だから少年は沈黙したままだった。吸い込まれるような蒼い瞳はただ真つ直ぐに相対する男に向けられている。

やがて、止まっていた時間が動き出した。

「語る必要すらないというのか。ならば良いだろう貴様は破門だ！ この、ラグナイト家の面汚しめが！」

唾をまき散らし、額に青筋を浮かべながら怒鳴り声があがる。鍛え抜かれた熟練の武芸者、そう言うにふさわしい身体と雰囲気を持った男の咆哮。それは普段の男からは考えられないほどに意外な行動だった。常に冷静で、効率を求める男とは到底思えなかった。

そんな内心の動揺の中、背筋をすつと伸ばし礼儀に則る形で正座をし頭を下げる。

「今までお世話になりました」

はたして、この言葉にどれほどの感情が込められていたのかはわからない。

ただはつきりと理解できることは、この瞬間から一つの関係が終わって少年の中の生きる理由が変わったということだけ。

この日、少年　ルシエにとって家族だった者との縁は断ち切られた。

十一

「本当に行くのかい？」

都市間を移動する唯一の放浪バスを待つ停留所で、その声を掛けられる。都市の外縁部に位置するこの場所では、都市の巨大な足が大地を踏みしめる音が耳に痛いくらいに聞こえてきて少々聞き取りづらい。

振り返るとそこにはルシエと同じ癖のある黒髪に、ルシエと同じような面影がある顔立ちの青年が立っていた。眼鏡を掛けているのが、どこかルシエと雰囲気異にしている。知的で内向的な印象を受けるが、しかしその身体はやはり武芸者の体つきであることに変わりない。

「そういう風に手配してくれたのはそっちだろう？　もちろん、感謝してるよ」

「それはそうなんだけど……。でもいざ都市外に弟を行かせるとなるとやはり不安でね、もし汚染獣に襲われても大丈夫なように汚染物質遮断スーツ、持っていったほうがいいんじゃないか？」

心配そうに尋ねてくる兄の言葉を聞きながらルシエは苦笑をこぼす。都市外での汚染獣との戦闘において、人体に被害を及ぼす汚染物質を防ぐために確かに専用のスーツを着用する。だが、もしも放浪バスを襲われ汚染獣から逃げ切ったとして、そのあとどうやって都市を見つけてたどり着けばいいのか。

「冗談だろ。　荒野で餓死するか、汚染獣に喰われて死ぬか選べるだけの違いしかないってのに」

「またそんな恐ろしいことを言う、やはり放浪バスにもそれなりの武装として剽羅砲などの設備を取り付けるべきだと私は常々思っていたのだが……。　一番いいのは、私なら汚染獣の一体や二体どうということはないのだから付いていければいいのだけだ」

そんなことを本気で考えているのか、兄の一步ほど後ろに立つ秘書らしき女性に「今から錬金鋼ダイト持ってちよつと行ってきても……」
「だめです、これでも公務が押しているので」なんて会話を交わしている。

と、そんなやりとりを眺めていると、放浪バスが出発の合図を告

げる。甲高い笛の音が背中から響いてきた。今まで停留所で待機していた人々が次々に乗り込んでいく。

「……おれは大丈夫だから」

目線を合わせることなく、そう言って乗り込もうとする。ほとんど最低限のものだけを詰め込んだトランクケースだが、いやに重い必要なものは向こうで買い揃えるつもりでそれほどの量はないというのに。

どうしてか、こんなにも腕は重い。

「そうか」

小さく、兄はそう呟く。

もう会うことがないかもしれないというこの状況のなかで、ルシエは兄に何かを言うこともできずに、そのまま放浪バスへと乗り込んだ。

汚染物質に穢されたこの大地で移動を続ける自律型移動都市、レギオス。

人は、この都市が張り巡らせたエアフィルターの外で生きていくことができない。もしもまともな装備もなくエアフィルターの外へ行けば、人間の身体は五分も持たない。

絶対的な死の世界。

そんな世界で唯一レギオスに縛られることのない生物 汚染獣。

小さな箱庭に近い都市で生きる人間にとって汚染獣は天敵だ。彼らは汚染物質に身体を蝕まれるどころか、喰らうことすらできる。

人が住めなくなった世界で生きるために貪欲に進化した種。その食欲は留まることを知らず、ときに都市に住む人間に襲いかかる。

そんな汚染獣から逃げ続けるために、レギオスは今日も世界を歩み続ける。

そして今日、学園都市ツエルニに向けて、一台の放浪バスはゆっくりと大地を駆けだした

第二話 付いて回る

ラグナイト家は王家を支える一柱でなければならない。

それは父親の口癖でもあり、家訓のようなものでもあった。

そんな家訓に従うように育ち、ルシエが幼いころに次期天剣とまで噂されるほどの実力を持っていたはずの兄は、今ではグレンダンの政治に携わる者として、ラグナイト家に恥じぬ働きを見せている。天剣という名誉を得る権利を捨ててまで政治家になった兄の、彼の心境に何があったのか窺い知ることは今ではできない。

そんな兄の配慮で、ここ学園都市ツエルニにルシエはやってきた。

学園都市 学生だけで社会構成の成り立つ都市のことで、そこで生活するものすべてが学生、学生による自治、学生による商業、もちろん教鞭を取るのも学生である。

それは知識として知っていた。知っていただけで、本当のところあまり信じていなかったのだが。

ルシエは放浪バスの駐留所に流れ込む人々を見て感慨深く呟いた。

「ほんとうに大人がいない」

大人がいない、というのには少々語弊があり実年齢は成人を超え
る者中にも存在する。もっとも、数えで十六歳になるルシエにと
っては年上には違いなく、そしてこの場所にいるのはたっ
たいま到着した放浪バスと少し前に到着したらしいバスに乗員していたもの

がほとんどなので、ルシエと同年代のものが大半である。

そんな人の波を眺めていると、一際目立った学生がいることに気づいた。

少女、光を浴びて銀色に輝きを散らす髪を風に流しながら何事にも興味の無さそうな無表情をつくっている。

一瞬だけ少女と視線が交差する。

長いコートに身体が埋もれてしまうのではないかというほど華奢な体躯。相変わらずの無表情であるが、その造形は人形のような儚さを再現しているような気さえしてくる。

彼女はすでに支給されたらしい制服を身につけていた。焦げ茶色の制服は彼女の銀髪にはやや不似合いであるが、それでも彼女に着させればどんな服でもそれなりに見えてしまうだろう。どうやら一般教養科に所属しているようだ。確かに、彼女は武芸者という風ではないし、せいぜいが錬金科の研究生や一般の学生と同じように幅広く勉学を修める、そんなタイプに見える。

観察するようなルシエの視線が気に入らなかったのか、交差した視線はきつい睨みに変わったかと思うとすぐに反らされた。

少しだけ残念だとも思いつながら、しかしそれがいつもと違う日常であると再度認識させる。

と、そんなルシエの様子を数人の学生が見ていることに気づいた。しかしどうにも少女を見ていたことをいぶかしんだため、などということではないことは込められた敵意によって否定する。

その視線は鋭く、どうにもルシエを警戒、もしくは威嚇しているようなものだった。

武芸者だ。威嚇とともに垂れ流された剳がこちらに不快にまわりつついてくるような嫌な気配。

さすがにこの場所で殴り合いを仕掛けてくるようなことはないよのだが、それにしても不躰すぎる。ルシエと無関係な者達は、その様子に気づかない者もいるようだ、そうではないものはルシエと

同じように剗を流す者を見てやや警戒心を抱いたようだ。

「……因縁は付いて回ると」

小さく肩をすくめて呟きながら、自身がこれから住むであろう場所を目指した。

十十

それは荷物の整理をしているときに起こった。

深いため息とともにルシエはその原因を眺めて見る。

「どうして、^{タイト}錬金鋼が？」

生活に必要な物だけを持ってきたつもりだった。^{タイト}錬金鋼といったものはこちらに来てから手配する心づもりでグレンダンを出たというのに、どこか肩すかしのような、苛立ちのような複雑な気持ちがある。ルシエを悩ませ、そしてこの疑問にすぐに結論をはじき出す。

^{タイト}錬金鋼が入ったケースの中に手紙が添えられていたのだ。宛名はつい先日、といっても一月ほど前にだが、別れた実兄の名が書き込まれていた。

兄の仕業だった。

放浪バスの中で決して荷物をすべて開けたわけではなかったが、まさかここまで巧妙に気づかないようにしまっただけとは思わな

った。そこはルシエの大雑把さというか、生活に関してのずぼらな部分を見抜いていた兄に脱帽するしかないのだろうが。

二つの、色の違うダイト錬金鋼を眺める。

プラチナダイト白金錬金鋼とルビーダイト紅玉錬金鋼。それは白い輝きと、紅い輝きを放っている。まさに新品同様といったものであったが、それをすぐに元のケースの中に仕舞い、手紙は封を開けることもなく同様に仕舞いこんだ。

ツエルニでは新入生のダイト錬金鋼の携帯は半年後からだ。それまでは武芸者同士のいざこざなどを防ぐために授業以外での使用は認められていない。仕舞ったのにはそういった理由ももちろんあった。あったのだが。

「おせっかいすぎだろ、常識考えてさ」

兄は、ルシエが置かれていた立場を理解してははずだ、それなのにこんなことがあれば父親からも世間からも厳しい立場になるかもしれない、ただでさえこの場所を提供することすら一部から反発を産んだというのに。

ただ仕舞うという行為自体をとて重労働のように感じる。

その理由と原因を頭で理解しながらも、決して認めたくは無かった。

ここ三日ほど、必要な家具の購入やらこれから使用する教科書の準備などに追われて少々慣れないことに疲れを感じ始めていたルシエであったが、その疲れを押しつけて朝早くに起き、未だに着なれない制服に腕を通す。

この都市に来てから、私服ではなくずっと制服で生活していたのだ。早いうちにこの正装に慣れたいということもあつたが、私服というものが落ち着かないという性格故でもあつた。

ルシエが所属する武芸科の白く眩い制服。それは武芸者が高潔な存在であることを主張するかのようでもある。

それを鏡で見て取って、苦笑する。

何度見ても違和感があつた。これに慣れるにはどれほどの時間が必要なのか、それを想像してみて、すぐに意識を切り替えた。

なれなければならぬとは少し違う、なれるように努力するのだ。

学園であるからには、やはり入学式という行事が存在する。

そして現在、ルシエは実に今年の入学生の大半が収まっているだろう大講堂の中で窮屈な思いをしながら会が始まるのを待っていた。入学式などかつたらい、面倒だ。そういつた声が聞こえてくるたびに、ルシエはそのことを不思議に思った。

義務なのだから、式に出席することは当然ではないか。

王家に忠実であれという精神のもとに育てられたルシエにとって、こういつた都市全体やそれに連なる会などには出席することが当たり前であつたためにそう考える。

もっとも、ルシエと同じように考える者もいたようで、そういつたもの達を律儀に叱つたりもしている。そこまではする気が起きないルシエは黙つたまま会が始まるのを待った。

その中に、銀髪の少女の姿を見かけて、すぐに違和感を覚える。

「武芸科の制服？」

思わず自分の声が出てしまったのかと思ったが、違った。

その声は驚きというよりは怒りが、侮蔑が混じったようなそんな声だった。

それは放浪バスの駐留所に居た数人のうちの一人だった。

同じ放浪バスに乗ってきたことはわかっている。ということは結論は一つしかない。

「あー、もしかしてグレンダンの出身？」

相手はその言葉にやや動揺を表しながら、されど強い反発の意思を持ってルシエを睨みつけると何も言わずに立ち去って行った。おそらく仲間のところに戻ったのだろう。

それだけでどうやら同郷の出身であることが分かってしまう。

駐留所に着いた時からわかっていたのだが、どうにも先が思いやられる。暗い何かが腹の底に溜まっていくような感覚。はたして、この都市に来ることで何かが変わったのかという漠然とした不安。

「仕方ない、か。　そう思っているても、どうにもならないんだけどなあ」

『だったら少しは抗ってみたらどうですか？』

思わずこぼれたルシエの声に反応したかのような言葉。

響いた声には感情が込められていないかのようにであった。だといつのに、その言葉はルシエの耳にひどくはつきりと残った。

第三話 よろしく、ロス

抗う 聞き慣れない言葉だ。

それはルシエという現在いまを形成する経験の中で、あまりにも少なく、そしてそうする必要を感じなかったが故の言葉。

ただ、唯々諾々と父親の言うことを聞きながら武芸に磨きをかけた自分には縁がないように思わせる、そんなおぼろげなものだ。

『だったら少しは抗ってみたらどうですか？』

その声が聞こえて、辺りを見回してみるが、誰もが周りの新入生と話をしたりしてルシエに注目したり話しかけた様子の人物は見当たらなかった。

素早く目を走らせていると、予定の時刻きっかりに生徒会長

実質この学園のトップが壇上に現れたことでルシエは声の主を探すのをやめた。

カリアン・ロス、社交辞令的な挨拶の言葉を述べると、彼はその美麗な顔を真剣な表情に変えた。

「新入生の諸君の中には知らない者もいるかもしれないが、現在、このツエルニに残されたセルニウム鉱山は一つ。都市の動力ともいえるセルニウムを確保するためには、次の武芸大会で勝利しなければならぬ。それができなければツエルニという都市は廃都へと変わるだろう」

初耳だった。瞬く間のうちに大講堂が喧騒に包まれる。

それはそうだ、都市の命である動力源、セルニウムの確保できる

唯一の鉱山を一つだけしか所有していない。各都市間で、ある一定の時期に行われる武芸大会という名の“セルニウム鉱山の奪い合い”に勝利できなければこの都市は、人間が生活するライフラインをすべて止められ、ツエルニで生きていくことなどできはしないのだから。

その様子をカリアンは机上に手を叩きつけることで黙らせた。

「しかし、そんなことを許容できるわけなどない！　これから新入生諸君には、輝かしい学園生活が待っている。　ここには自身の夢の為に勉学に来たものや、ここで自身の将来を探すために来たものも多くいる。　私はそんな皆を、都市を守るために全力を尽くそう！　諸君らも、ここで生活していく中で、秀でた才を惜しみなく発揮し、決して諦めることなく、自分自身の未来を獲得するために共に闘い抜いて欲しい！」

彼の本心か、否か。都市の為に必死に新入生に訴えかけるその姿に心を打たれた生徒がカリアンに視線を釘づけにしている姿がかなりの割合でみられた。

熱弁ともいえるその演説に、講堂内はしんと静まり返っていたが、カリアンの最後の言葉を皮切りにけたたましいほどの歓声と拍手が巻き起こった。

それを見て、ルシエは人心掌握術に優れた人物であるとそう評価する。おそらく上に立つような人物は彼のように口がよく回るものでなければ務まらないのであろう。それはすぐ近くで政治屋をやっている兄を見ていればわかる。もっとも兄は政治屋と揶揄されることを嫌っていたようだが。

その後の軽いオリエンテーションが済むと、大講堂から出て三々五々に解散となり各教室へと移動となる。このとき、ルシエは若干ながら焦りを感じ始めていた。

周りはすでに二人、ないし三人以上で行動している者が見受けら

れるのに、ルシエの周りには誰もいない。

確かに社会的かどうかで言われれば人づきあいの類はあまり慣れていないために、引っ込み思案などと評価されるかもしれないが、それにしてもまさか自分が顔見知りの一人もつくれないということに少々衝撃を覚えた。

昔は、それでももう少しまともに人が寄ってきていた、そんな気もする。しかし、それも捨て去った家柄という魅力に集まっただけで、決して自分に向かってきたのかと言われればそうだと自信を持って言えないところではあるが。

教室は至って普通のものだった。武芸科とはいえ、一般教養の授業も含まれているために、机と椅子、黒板などは存在する。

適当に椅子に座ると、担当の上級学生がこれからの授業の組み合わせや諸注意を促す。諸注意と言っても、剉を使った悪事に対する厳罰についてや、万が一いざこざが起りそれに決着がつかない場合には、学園公認の立会人のもとで決闘を行うことができるなど。

そんな説明を適当に聞き流しながら、窓際に座る銀髪の少女を見つめる。

つくづく縁があるのか、それともただ単に偶然なのか。どうやら同じクラスらしいことを確認する。

一瞬だけ、こちらを見る。不快そうに顰めた眉を隠そうともせず、に不機嫌さを表しているようであった。

「……以上だ、何か質問はあるか？」

その一言とともに、今度こそ今日は下校となった。教室に残る者もいれば、すぐに出ていくものなど、生徒たちの姿は様々であるが、銀髪の少女は席から動こうとしていなかった。

少しだけ、話しかけてみようか。

そんな風に思う。

何度か見かけていたからか、まったく見知らぬ他人と言うような印象は無い。これは勝手な思い込みではあるが。

それに案外、話しかけたらいい奴かもしれない。だが、予想では軽くあしらわれるというのが八割近くだったが、どうして一般教養科から武芸科に転科したのかということも、知らない他人ながら気になっていた。

そう思って声を掛けようと思った時、なんて声を掛けられればいいのか、浮かぶ言葉がないことに気づく。

「あ、と」

少女へと伸ばしかけた手を止め、その場で硬直ししばし思考。

そういえば、この場合ナンパとかそういう類になるのだろうか。

仮にも目の前に座って特に何も書かれていない黒板を凝視し続けるこの少女は、可愛い。社交辞令など抜きで見たとしてもまだ。

それを一人のタイミングをまるで狙っていたかのように話しかけるのは、やはりまずいのだろうか。そんなことを考える。

「それで、あなたはわたしに何か用なのですか？」

イラつきのような、それとただ冷静に対応されただけなのか、その声色からは想像できないが、おそらく前者のほうが強いのだと思う中、少女の方から声を掛けてきた。

「いや、特に用というわけでもないんだが」

「でしたら、速やかに下校することをおすすめします」

冷たい切り返しにはどうにも取りつく島がないようである。しかし、このまま、はいそうですかと引き下がるのはなんだか癪である、

というのは子供すぎるだろうか。

「少し気になることがあってね。 どうして一般教養科の制服じゃなくて、武芸科の制服を着て武芸科のクラスにいるのか、と疑問に思ったんだよ」

「……わたしだって好きでこんなところにいるわけじゃありませんから」

「え？」

少女はルシエの問いにピクリと肩を震わせて、一拍ほどおいて何事かを呟くが、あいにくと放課後の喧騒でかき消されてはつきりとは聞き取ることはかなわなかった。

それをもう一度聞かせてくれ、というのは目の前で怒りを体現している少女に聞くのは躊躇われる。

しかし代わりに応えた人物は居た。

「それはこちらでも聞かせてもらいたいものだな、ルシエルディア・ラグナイト」

数人の、同じ武芸科の制服を着た生徒。どの顔もここ数日のうち、あるいは今日見かけたものだった。ルシエに問いかけてきたのはその中でも一際屈強そうな身体を、無理やり制服に押しこんだような強面の男だった。

「どうして武芸者を諦めた貴様がこんなところにいるのか、それはまあいいだろう、ここは学園都市なのだから。 だが、なぜ武芸科の制服を着ている？」

「……その質問は、君に答える必要があるようには思えないけどね」「なんだと？」

過去、何度も似たような体験をしたような経験からか、外部からの敵対対応に無意識に反応してしまう。自分の中で何か冷え切っていくのを感じる。それはどうしようもないほどに凝縮された負の塊のような、あらゆる感情が渦を巻いて身体を掻き乱すような、そんな嫌な気分。

「貴様がそのような態度を取ろうとも、貴様が剋を扱えないという事実だけは覆らない。そのことをしっかりと肝に銘じておけ。行くぞ」

男子生徒はルシエの態度に鼻を鳴らすと、取り巻きに声を掛けて荒々しく教室から出て行った。

去って行った問題に、ルシエは小さく溜息をこぼす。

自分のことが気に入らないのはわかるし、嫌悪感を剥き出しにしてしまうのも納得できる。だが、かといって他人が居る前で迂闊に発言することだけはしてほしくなかった。

「剋が使えないというのは、どういうことですか？」

ほら来た、と心の中でまた溜息をつく。剋が使えないものを武者と呼ぶはずはない。それは武術ができる人間を武者と呼ばないように、剋という力を行使できないものは武者以外の人間を表すからだ。

「大した意味は無いよ、少しかけ語弊がある言い方だったし。おれの状態をよく知らない他人が言ったことだから気にしないでくれるとありがたい」

「でも向こうはあなたのことを知っているようでしたよ？ それに語弊とはどういうものなのでしょう？」

質問攻め、だろうか。先ほどまでの態度が嘘のように話しかけてくる姿を見て意外な気持ちになる。

「同じ都市、槍殻都市グレンダンの出身なのだと思う。放浪バスの中とかで見かけたから。語弊というのは、別に剽を使えないわけじゃない、ということ」

少々含みのある言い方になってしまっただろうか。それでもこれ以上詳しく話すとなるとそれはこれからの生活に支障をきたすかもしれない。だったら黙っておくほうが互いのためにいいだろうと判断した。

「……そうですね」

「うん」

少女が興味を惹くようなことは話し終えてしまったことを感じたのか、彼女はゆっくりと椅子から立ち上がると教室を出ていこうとする。

それを止めようと思えばできただろうが、今の状況からそんなことをすれば藪蛇になりかねないことはルシエとて承知していたので、黙って見送ることにする。

結局、今日は友人ができなかったなあ、とぼんやり考えたときだった。

少女は立ち止まると、銀色の輝きをまき散らしながらルシエに振り返った。

「フェリ・ロスです」

それが自己紹介であることを理解するのに数秒かかった。まるで

事務的に交わした挨拶のような、そんな気がしたからか、はたまたその銀色に見とれていたからかはわからない。

「ルシエルディア・ラグナイトだ、よろしくロス」

そう返すとなぜか少しだけ不機嫌そうな顔で、銀色の尾を引きながら教室を出た。

第四話 先立つもの

武芸者にとつての剋とは、身体を循環する血液でもあり、神経でもあり、呼吸のように当然のように存在するものである。そして、人類の天敵汚染獣に対抗するために神から与えられた贈り物だというのが都市間にある共通の認識。

その力を賜った武芸者は、高潔な存在であるということも含んで

しばらくの間、ルシエの周辺で問題が起こることは無かった。

絡んできた彼らが何か事を起こす可能性を考慮していた身としては大変ありがたいことではあるが、根本的な問題が解決されたわけではないという事実がある以上、これからも当分気が抜けるわけではないことが悩みの種となった。

しかしそんなことよりも当面抱えているある重要な問題がルシエに襲いかかっていた。

「生活費が……ない」

財布をひっくり返し、ぼろぼろとこぼれるのは小銭ばかりでまともなお金と言うものがない。更に言えば、仕送りの類も期待はできない。何世家とは縁を切った状態であるし、ただでさえ反発が多かったツエル二への入学支援だ、兄からのお金を期待するのは間違っている。

その事実気づいたときに、先日学園の事務窓口に奨学金の受け取りに行ったのだが、さらなる追い打ちが待ち受けていただけだった。

それは、学園の奨学金制度が適用されていなかったことだ。つまりランク外のぎりぎり合格であったということ。事前に知らされていた内容では奨学金ランクことになっていたのにどうということだろうか。

恐らくは、ルシエを快く思っていない一派の仕業だろうということまではわかる。どういう風に学園連盟を抱き込んだのかはわからないが、うまいこと合格にしてグレンダンから追い出し、かつ他の都市で野垂れ死ぬように仕向けられたみたいだ。

「うまく出し抜かれたな、兄上も……」

送り出すならせめて万全にしておいてくれ、などと言わないまでも少しだけ恨みがましく思ってしまう。もつとも、この件に関してはこれから優秀な成績実績を修めていくことでなんとかなるということなので、やはり当面の問題はすぐに手に入る現金だ。

そういうわけで、現在サーナキー通りの書店で就労学生必見と書かれた雑誌を読みふけり、日給でもなんでもお金が入る仕事を探していた。

今まで就労のようなことをしたことがなかったルシエにとってこの変化も新たな経験だと思うことで、多少気を紛らわせる。ぺらぺらとめくっていくページの中では一番時給が高いのは機関部清掃という都市の機関部をひたすらきれいに掃除するというものである。どの就労の中でももつともきつい、と書かれているが、一番重要なのは即金が入るか否かであり、残念ながらこれは月給らしい。ほかの日給の仕事を探し続ける。

と、一際目立つように大きく書き出された仕事があった。

「都市警察の臨時出動員、荒事を鎮める為の君の力を求め、ねえ。まるで新手の詐欺みたいなお謳い文句だな」

などと呟きながらその一覽を読むやいなや、ルシエは雑誌を元の位置に戻し書店を出た。

十十十

背に腹は代えられない、背水の陣、など昔の人は良く言ったものだ。

そしてルシエの状況はまさにその通りであった、というのが少々笑えないだけなんだろう。

「ルシエルディア・ラグナイトです。臨時出動員の枠に就労を希望しました」

就労学生の申請で手早く都市警察へ届け出ると、しばらく待ったのち面接を受けさせてもらえることになった。現在、グライダーによって窓の光を遮られた薄暗い部屋でパイプ椅子に座り面接を受けている。

一体どこの取り調べなんだろうか、と思わないでもないが、これが都市警察の雰囲気だ、と言われれば納得してしまふような気がする。希望者にとって不安になるような状況、よほど肝が据わった者でなければ正面でじっとこちらを見つめる面接官の鋭く威圧的な視線に耐えられないであろう場の悪い空気。

あれか、精神面を試されているのだろうか。

「希望理由は？」

渋い重みのある声がルシエに質問を投げかける。

中でも、無精髭を生やしたどこからどう見ても学生に見ることが難しい男性の纏う雰囲気、やりづらさを感じさせる。希望者の一挙動、言葉からまるで見えない何かを探るような深い視線。それに少々のむずがゆさを覚えた。

希望理由に関して、無難に都市の治安維持、だろうか。だが、別に自分はそんなことの為になるわけじゃなく現金が欲しい、更に言えば即金で。ただそれだけ。たまたま条件に合致してなおかつ高い報酬に惹かれてやってきたのだ。

だからといって、そのことを言うのも不味いだろう。だがしかし、思ってもないことを言うような、不誠実な嘘はすぐに見破られるだろうと今までの経験でそう判断する。

まあ、都市の治安維持が守られるならばそれはそれでいいことだということ思いもないことはない。

「生活費に困ってしまして、即現金が手に入る就労がこれしかなかったことと、自分に向いていることが希望理由です。それに都市の治安維持にも貢献できますし」

真つ直ぐに相手の目を見つめたままで言い切る。今は詭弁や偽善を言うときではない。面接官の中にはそんなルシエを批判したそうな目で伺っていたが、実質的な権力を持っているのは正面の男性であると予想をつけていた。外野は恐らく関係ない、いや、後々話し合いなどで反対意見が多数になれば落とされる可能性が高いことを言っているのは自覚していたのだが、そう答えるのが正解だと感じたのだ。

「ほお。で、何ができる？」

その一言に、周りの人間は一瞬だけ彼を見て、そして溜息をついてそのまま何も言わなかった。かろうじて予想は当たったようだ。

「都市外活動の経験があります。それに汚染獣などの知識も。あとは武者である、ということですかね」

都市外活動など、武者者にとっては当たり前のようなものであるが言つのだと言わないのではやはり印象が違うかもしれない、そう思いつ口に出したのだが、彼は予想以上に驚いた顔をしていた。

「汚染獣との戦闘経験がある　そういうことでいいのか？」

まあ普通に考えたらそうなるだろう。しかし、その一言で大分疑問顔をされているというのが何やら不味い気がする。

「一応は」

「ふむ、しかし、おまえさんの奨学金ランクはランク外だ。そんな人間が汚染獣を前に本当に戦うことができたのか？」

「……戦闘以外にも支援やら補給やらならいくらでも仕事はありますから」

事実、そういった活動の支援を受けることもままあった。だが、そこまでの事態は老生体を相手取るときに天剣授受者の戦いやすい舞台への移動のための時間稼ぎなどのごく限られたときだけであったが。

ルシエの顔を観察するようにまじまじと見つめてうなずいている。彼の瞳がきらりと光った気がしたのは気のせいだろうか。それだけの言葉から何を察したのかはわからないが。

「そうか、まあいい。熟練がないツエル二の中で、都市外活動を
経験してる新入生は貴重だからな、採用だ」

「ありがとうございます」

「俺は三年のフォーメット・ガレン。都市警察強行警備課課長で、
まあおまえさんの上司だ。これからよろしく頼む」

採用が決まった瞬間、身体から力が抜ける思いだったが、それを
表に出すことなく礼儀正しく挨拶をし、今後の仕事内容の確認に移
った。

何かしらの荒事が起こった場合の出勤で危険手当、成功報酬の即
払い。それ以外にもなるべく出勤して出勤態勢を整えておけば稼ぐ
機会が多いだろうということだった。書類整理をすればそれに見合
った給金を上乘せしてくれるらしい。これはかなりの高待遇ではな
いだろうか。

それは必ずしも手放して喜べるようなことではなかったのかもし
れないが。

十十十

まさかその翌日に出動になるなどとは夢にも思っていなかった。

「目標は練金科からくすねたデータチップを自分らで所有している
放浪バスで都市外に運び出す算段らしい。やつらの放浪バスは押さ

えてあるのだが、向こうに手練の武芸者がいるようでこの奪還の阻止、及び拘束が目的だ」

常勤していれば、出勤の機会があるだろうとは思っていたが、こつも早く荒事が起こるとは。案外学園都市と言うのは治安が良くないのか、それとも他都市から目をつけられやすいのか。フォーメックも言っていたが、その道の専門家などが少ない都市と言うことで甘く見られやすいのかもしれない。

「念威操者に調べさせたが、向こうにも念威操者がいるみたいでな、妨害されてやつらの動きは掴みづらい。一般生徒に危害が加わる前にこれを武芸者のおまえさんたちで抑えてくれ」

念威操者、武芸者というカテゴリではあるが、根本的な部分で武芸者とは違う。彼らが扱う念威は、外力系衝剄でも内力系衝剄でもあり、同時にその二つとは異なる剄である。それらは、光や熱、音波や電磁波などの情報収集能力に長けたものだ。

そして、その念威同士で干渉し合うことで相手の念威を妨害することもできる。

ルシエの他にも、現場には臨時出動員の武芸者や都市警で勤務している武芸者が揃っていた。人数は二十人前後ほどだろう。

なぜこんなにも準備が揃っているのかと言うと、事件が起こってからすぐにこの一団に疑惑がかかっており、調査されていたらしい。決して突発的に起こったことではない、という風にその後の説明で付け足された。

都市外縁部にほど近い宿泊施設を都市警察がものしく囲み、緊張が高まっていく。

中の従業員などの避難はすでに済んでいるようで、あとは連中が大人しく出てくるのを待つだけ。今、必死に交渉人が投降を促して

いるが反応は無い。

おそらく、強行突破だろう。放浪バスを押さえているとはいえ、都市内で犯罪をおかし、その都市に潜伏していればいずれは捕まってしまう。しかし、他の都市に逃げれば素姓のわからない以上、その罪はなかったことになってしまふのだから。

ルシエは慎重に中の気配を探るが、自身に奔る鈍い剄の感覚ではその様子をうかがうことはできない。

自分に対して舌打ちしたい気持ちが出たが、すぐにそれを打ち消す。

仕方がないと、自分に言い聞かせる。

都市警察から支給された打棒型錬金鋼ダイトに、今の精一杯を練り上げた剄を流し込む。

「レストレーション」

錬金鋼ダイトを復元する起動言語を呟く。手に持った錬金鋼ダイトの感触は、手に馴染んだ物などではなく、違和感を生み出す知らないモノだ。

ルシエが錬金鋼ダイトを復元するのとほぼ同時に、宿泊施設の窓や扉が一斉に割れ散るけたたましい音で辺りは騒然となった。

瞬間に辺りにまき散らされる噴煙スモーク。もうもうと立ち込める破碎の断片、音が襲いかかり半数の者が動けずにいる。

ルシエは混乱の中、大きく後ろへと後退し噴煙の中から離脱する。

チームを組んで行動するようには言われていない。ならば、自分がやりやすいように勝手に行動する。事実、この事態に動いている武者の数は少ない。味方を助けていては目的には逃げられ、チップは奪われといった最悪の展開だ。

「警察なんて名ばかりの連中ばかりじゃないか……！」

雪崩れ込むように建物から飛び出してきた数は五人。見えたのはほとんど一瞬に近いが、そのうちの後方にいるのが念威操者だったか。全員が都市外装備に身を包んでいた様で、噴煙の中、動きの止まった都市警をなぎ倒して放浪バスの駐留所に向かっていく。

おそらく念威によるサポートで、彼らはヘルメット越しに鮮明な噴煙を透視した映像が見えているのだろう。

手練の武者、フォーメッドはそう言っていた。彼らのこの突破力は連携によって成り立っている。倒されていく生徒の様子を感じ取る限りでは、彼ら自身の武芸はそれほど優秀と言うわけではない。言うなれば奇襲が功を奏して、この状況をつくりだしたということ。ならばやることは自然と決まってくる。

敵の四人が念威操者を中心として前面に押し出る形で攻めてくるのを、気配で感じ取る。

活剱を体内に奔らせ、肉体を強化。

ルシエの直線状で一人、都市警察の人間が打倒されたのを確認した瞬間に貯めていた剱を爆発させる。

内力系活剱、旋剱。

打棒を真つ直ぐと相手に突きたてるように、豪速ともいえる速度で直進する。

「があっ！」

攻撃の直後によるわずかな硬直の隙をつき、胸に深い一撃を与え昏倒させる。呼吸がままならないのか、倒れたまま痙攣を起こした

敵を無視し、そのままこの奇襲の最大の成功原因である念威操者へと突撃する。

(目を潰せばまだ数で勝るこつちに勝機がある！)

と、耳をざわめかす風切り音。

横合いからの気配に突撃を断念。

(かわせない)

衝撃を覚悟し、打棒で受ける。

鈍く重質量の金属が打ち鳴らされる音が響く。手のひらから伝達された衝撃が右腕全体に痺れをもたらす。

次いで二撃目、十分に剱を練り込めなかったその一撃を相手の脇をすり抜けることで回避。

そのまま回し蹴りを相手の頸椎に叩き込む、が武者持ち前の頑丈さと機敏さで打撃を外されて大したダメージにはならない。

仕切り直す間もなく、相手の一撃が頬を掠め、鮮血を散らす。

「っのやろっ！」

握力のない右腕から左腕に打棒を持ちかえて思い切り打棒を投擲。なんなくサイドステップでかわされてしまう。しかしルシエはすでに次の動作に移っている。

「なっ、これは!？」

拳を握り込み、ヘルメット越しに顎を打ち抜く一撃を放つ。一瞬の動揺を利用した渾身の一撃に相手は背中から地面に倒れ込んだ。

ゆつくりと、噴煙が晴れていく。その場には倒れ伏した都市警の面々とデータチップ奪取を目論んだ一団があり、その中央には念威操者が使う重晶鍊金鋼パラライトタイトを持った者が倒れていた。そのそばには黒い打棒も転がっている。

その中でも、チームを組んでいたらしい武芸者の手によって残りの二人も鎮圧されていた。

投擲された打棒による一撃で気絶した念威操者。それによって目を失った動揺。致命的な隙を生んだ武芸者の末路である。

あまりに作戦が型にはまって油断していたのか、それとも学生だからと甘く見ていたのかはわからない。

だが、武芸者は常に油断などではいけない。それは汚染獣との戦いで死を意味する。

「なんて言ったところで、こいつらはただのコソ泥なんだけどね」

初仕事を無事にやり遂げた疲れを感じ、息を吐き出すことで緊張を解いた。

わずかに感じた眩暈を無視して放り投げた打棒を元の鍊金鋼タイトに戻す。

さあ、初の給金で一体何を食べようか、そんな風に気楽に考えながら。

第五話 交渉する人

まだルシエがグレンダンにいた頃、^{タイト}錬金鋼を手放したことなどなかった。まるでそれが身体の一部であったかのよう^にに。

実際、そうだったのだらう。剽技を使うときも、^{タイト}錬金鋼を復元する時も、常に自身の神経の延長にそれはあった。それが第二の身体のパーツであるかのように。

だが、今ではもうその感覚はわからない。

使い慣れた^{タイト}錬金鋼がなくなったからか、それとも

事件が一段落ついたころには陽がすっかりと落ちかけ、夕焼けが赤く部屋を彩っている。

都市警の本部、強行警備課でフォーメッドとともに詳細の報告書類を作成し提出すると、予定通り即払いで給金が支給されることとなった。

「こんなに、ですか？」

「ああ、何か不満でもあったのか？」

「いえ、でもこれ……多すぎませんか？」

フォーメッドの自然な対応に思わずもう一度給金の入れられた茶封筒の中身を確認する。

たったの一度の仕事で一月分の生活費くらいが支給されたのだ。驚くのも無理は無い。せいぜい一週間くらい余裕で持たせられればいいと思っていたので、これはうれしい誤算ではあるのだが。

「なんだ、おまえさん。計算間違いでしたとでも言って減額され

「たいのかい？」

「え？」

「なんでおまえさんが入学試験で手を抜いたのかは知らんが、優秀な武芸者が授業料も払えずにツエルニからいなくなったら困るんだな、多少色をつけてもらった、そういうことだ」

そういつてにやりと口元を歪めるフォーメッド。

つまり、色々と融通するからこれからも辞めずに優先して頑張るための前払い、そういうことなのだろうか。

もっとも、入学試験で手を抜いていたわけではなく、そのときの全力で以て試験を受けたのだが、言っても仕方がないことなのでルシエはそれに関しては触れないように答える。

「優秀かどうかはわかりませんが、ありがたく頂いておきます。

これからもお世話になると思いますので」

「ああ、頼りにさせてもらう。今日はもうあがっていいぞ」

「はい、フォーメッドさんもお疲れさまでした」

ルシエはそう言ってやや浮かれた足取りで部屋を出た。残されたフォーメッドは、ぎしりと軋む古い椅子に背中を預けると誰に言うでもなく呟いた。

「うちの会長さんは、ホントおもしろいもんを見つけてきたな」

先ほどまでの目に焼きつくほどの陽はすっかり落ちて、街灯が静かに道を照らしている。

ルシエが住んでいるのは外縁部にほど近い場所で、都市の中心地からは大きく外れた場所にある。現在苦学生であることもそうだが、もともとそれほど贅沢な暮らしを望んでいたわけでもなく、家賃が安いことが最大の要因だったりする。

そんな郊外にある家路だ。中心から離れていくにつれて人が少なくなるというのは当然であるのだが、何かがおかしい。

(誰かに見られている?)

気配も何も感じ取ることは叶わないが、こちらを観察するような視線のような何かを感じ取る。グレンダンに居たころの似たような経験から、このような視線には特に敏感になったのだ。

それは話しかけてくることもなく、かといって観察をやめることがないようであった。

敵意がないことだけはなんとなく理解して、ただどこそのまま家まで着いてこられるのもなんだか気持ちが悪い。内力系活剏で足を強化し、一気に引き離そうと力を込める。

瞬間、脳みそが空中に放り投げだされたような感覚。

足は地面を踏みしめ確かに蹴りだしたはずだった。

最初に神経の伝達がちくはぐだということに気づき、次に視界が反転したことを確認するのに数秒かかって、自分が地面に倒れ伏していることを漠然と理解する。じんわりと届いてくる痛み。どうやら頭をひどく打ちつけたらしい。

自分に襲いかかった謎の原因ははっきりとわかっていた。

別に外部からの攻撃というわけではない。
危機感だけがただ身体を包み、そしてルシエは気を失った。

次に目を覚ましたのは白い、清潔な部屋の中だった。

不必要な物とはことん排出したかのような真っ白な部屋。自分の右腕に刺さった管と、そこから補給される栄養剤のパックを見て、ようやくここが病室で、点滴を受けていることに思い至った。

「目が覚めましたか？」

淡々とだが、綺麗な声が耳朶を打つ。ぼんやりとした視界の中を、銀色の光が散るのが見えた。純白の部屋に、まるで彼女だけが特別な存在であるかのように映る。

「……なんでロスがここに？」

フェリ・ロス。なぜか一般教養科から武芸科に転科していた人形のように無表情な少女。彼女がなぜかルシエの寝ていたベッドのすぐそばにいるのだ。その疑問が浮かぶのも当然だろう。

「……偶然通りかかったところあなたがまるで地面の上で水を求めて喘ぐ魚のように痙攣していたところを病院に搬送したのですが何か不都合がありましたか？」

「いや、ないけどさ。なんでそんなに説明口調なのさ」

「それは仕様です。諦めてください」

決して冷たいわけではなく、かといって打ちとけた雰囲気と言うわけでもない。なんとなくの事情も把握したのだが、倒れた原因に

ついでにはなんと言われたのだろうか。

「それで医者とは……なんて？」

若干のためらいを含みながら、フェリにそう尋ねる。一瞬だけ、また眩暈がしたような気がした。

「栄養失調、過労による貧血だろうと医者は言っていました。一日大人しくしてれば治るだろうとも。ところで命の恩人に対して何か述べる必要があるのでは？」

ひとまずの心配は杞憂に去り、フェリの言葉にルシエはぐうの音も出ない。どんな顔だったのか、ルシエ自身にはわからないが、きつと苦い顔をしながら眉間にしわを寄せていたのだろう。その表情の表す感情の意味は違うが、フェリはそれを見てほんの少しだけ満足そうだった。

「感謝してないわけじゃないんだけど……、もしかしておれを見張ってたのはロスなのか？」

と言った瞬間、今度はフェリが言葉に詰まる番だった。偶然通りかかるにはいささか人通りがなさすぎるし、それにあの時間帯にあの辺を散歩しているのは不自然極まりない。普段から散歩が趣味であるの辺りがそのコースとなっている、なんて裏設定があれば話は別なのだが。

少しだけ悩むような素振りを見せて、目を泳がせて溜息をこぼした。観念したのだろうか。

「わたしだって好きでこんなことしてるわけじゃありません」

「まあそれはそうなんだろうけど」

言い訳だろうか、子供のように拗ねた口調でそう言われても何の事だか判然としない。そもそも、自分のような者をどうしてフェリが観察する必要があるのかなど理由がないのだから、他者からの依頼と言われた方が大分しつくりくる。

その考えに至った時、頭の中が嫌になるほど冷静に冴えわたっていく。

「で、誰に頼まれたんだ？」

自然、口調は高圧的で荒いものになってしまう。心当たりは今のところあのグレンダン出身者達だろうが、しかしフェリと繋がりがありそうにはルシエには思えなかった。

「いやいや、頼んだのは私だよ、ルシエルディア・ラグナイト君」

突然、ノックも何もなく部屋に入り込んできた男子生徒を見る。

軽い口調に花束を持って、いかにも知り合いの見舞い風に来たようだがあいにくとこのような二枚目の知り合いはルシエにはいない。

「おたくはどちら様ですかね？」

「これは失礼。私はカリアン・ロス、ここの学園都市ツエルニで生徒会長をやらせてもらっているよ。先日入学式で挨拶をしたんだが……どうやら記憶に残っていないということかな？」

言われてみて、その顔と名前が合致する。確かにあのときツエルニの新生入生に熱く演説をしていた生徒会長のようなのだ。長い銀髪に丸眼鏡をかけ、いかにもインテリ然としたその容姿に見覚えがあった。

「そしてこのフェリの兄でもある。君のことをいろいろと調べさ

せてもらっただよ」

「……それは、またどうして？」

フェリの兄であるということにも驚いたが、そうそう同じファミリーネームがあるわけでもないのだからそう考えるのが自然だったろう。

それよりも後者、ルシエのことを調べていたということに注意が向く。

「槍殻都市グレンダン、そこでかつて十二人に与えられる天剣授受者を賭けた戦い、それを観戦していてね。君の活躍をそこで生で見っていた、というわけだ。まさか偶然にもツェルニで会うことになるとは、あのときは夢にも思わなかったが」

グレンダンの名前が出た時から嫌な予感はしていた。だがまさか、あの時の戦いを観戦していたという事実には驚きと運命というものは皮肉であるということに悟った。

カリアンの顔を伺うが、その顔には笑顔が貼り付けられているだけで何を考えているのかは少しもわからない。

「それで、おれをどうするつもりなんですか？」

「そう警戒してくれなくても大丈夫さ。簡単な話、君には小隊に入ってもらいたい」

小隊 学園都市ツェルニにおいて、武者達の憧れの的だ。現在では十六の小隊があり、それらは日々切磋琢磨し、武者大会においては他の武者者を引っ張る作戦の要となる集団である。

「それがどうしておれを調査することにつながるんです？」

「君の実力が本物であると確認するためさ。どうしてか、君の入

学書類ではぎりぎり合格の奨学金ランク外でね、同姓同名の全くの他人を小隊に入れてしまうのはまずいからさ。もっとも、ここ数日の調査と例の事件の鎮圧時の武芸の冴え、それでほとんど確信に変わったというところかな。まだまだ実力を隠しているみたいだけどね」

カリアンの口から語られる内容から察するに、ルシエはずっと監視されていたらしい。誰にか、視線をはっきりと感じたのは今日だ。戦闘の余韻で到のセンサーが敏感になった影響だろうか。

「わたしの念威ですつとあなたを観察していました。ごめんなさい」
「いや……」

フェリが念威操者ということには自然と納得がいく。彼女は武者というほど頑丈そうな身体ではなく、触れれば壊れそうなそんなイメージがあるからだ。

ルシエは言葉を濁しながら、しかし素直に謝られて困っていた。別にそれを知らされたところで自分はまったく気づいていなかったし、そのおかげというか、不幸中の幸いでこうして自分は病院で命を拾ったのだから。

「いや、でもこれが原因とえばそうなのだろうが、それは置いておこう。」

「おれは小隊には入れません」

「それはどうして？」

「おれには武芸者の模範となるような生徒には、まだなれませんから」

「私は言ったね、君の奨学金はランク外、つまり全負担だ。それを仕送りも何もない君が学生を続けていくのは不可能に近い」

カリアンは笑みを絶やさずにルシエに顔を近づけて囁く。

「小隊に入れば奨学金ランクA、つまり授業料免除、生活費だけ稼げば余裕で生活できるようにしてあげられるけど？」

なんとも甘い誘いだ、そう思う。相手の弱みを突き、それを盾に自分の通したいことを通そうとする。構わない、そういうやり方は嫌いじゃない。

ルシエも笑みを造り、口調を丁寧なものに切り替える。

「そうですね、大変魅力的です」

「そうかい？ それじゃあ、そのように手配を」

「いえ、それには及びません」

すぐにでも動き出しそうだったカリアンを言葉で制する。彼は相変わらず笑みを絶やさないが、眼鏡がきらりと不気味に光った気がした。

「魅力的ではありませんが、やはり小隊には所属する気にはなれません。ですので、この件はご遠慮させていただきます」

「……おやおや、なかなか頑固なようだね」

「ちなみに言っておきますが、こちらの経済状況は大変切羽詰まっています。もしかしたらこのままでは、近いうちにツエル二を去ることになってしまいかもしれないですね。もともと奨学金ランクCのつもりで入学していたのが、どういうわけかランク外に認定されているというミスがあったようです」

その事実を聞いてカリアンは眉をひそめた。しかし、それも一瞬で切り替えて見せる。どうやらルシエの言いたい事情が伝わったら

しい。

「なるほど、わかった。君の奨学金ランクはCだった、こちらの書類にどうやら不備があったようだね。ならばそのように手配しておこう」

そう言うと、何やら秘書らしき人にさらさらと書いたメモを渡して下がらせる。どこかで見たような光景ではあったが、あえて口に出す必要もないとルシエは黙っていた。

「その時が来たら、いつでも小隊入りを歓迎しよう。もちろん、奨学金ランクはAにするという破格の条件でね」

「御厚意大変痛み入ります」

くすりと小さく笑って、カリアンもすぐに退室していった。その一部始終を黙って見ていたフェリの視線に気づき顔を向ける。無表情ながらもどこか怒気を含んだものだ。

「どうして兄に貸しを作るような真似をしたんですか？」

「彼のようなタイプはどこかで落とし所を見つけないといつまでも粘着されそうだからね。強引な手に出られるのもこちらの要求が通らなくて困るのだから、だったら少しくらいこちらにうま味が出るように恩を売らせておけば、向こうも次回のなんかしらの交渉を有利に進められる布石を打てたと思うだろう？」

といつても、こちらが交渉の材料にできるものと言えば武者である以上、その力以外に他ならない。更に言えば、向こうに付け入られる材料を渡したようなものであるのだから、決してこちらに一方的にいい条件と言うわけではなかったのだが、こちらも苦学生と言う事情があったのでそれを解消できると考えれば、あの条件を吞

んでくれたのは重畳だっただろう。

「……やり方が汚い気がします」

「綺麗汚いで言ったら、まあこれは汚い交渉だったのだろうけど、最初からこの話しには綺麗な部分なんてあんまりないんだから五十歩百歩だよ」

かつて、天剣を賭けて戦ったほどの武芸者を引き込んで武芸大会を有利に進めようというのだ。まだこの学園都市全体、他の学園都市のレベルはわからないが、それでも十分すぎるくらいの戦力になるだろう。

それが当時の自分だったならば。

「……一つだけ、気になることがあります」

「ん？」

少しだけ言いにくそうに、膝に置いた手をぎゅっと握りしめて彼女は言葉を紡ぐ。

「どうして、小隊には入りたくないんですか？ この学園都市の、武芸者の憧れだというのに」

「それがこの武芸者の憧れだというのなら、おれはその小隊に入隊する気にはなれない」

それはなぜ、という疑問に明確な答えを与えたものではない。

決してフェリの問いかけを解消したものではなかったというのに、彼女はそこから先に踏み込むことができなかった。

「そついうのを求めるのは、もうやめたんだ」

どこか遠くを、窓の外に移った荒廃した大地を眺めながら、ルシ
工は呟いた。

第六話 ぶつけられる因縁

もしかしたら、この人も自分と同じなのかもしれない。

自分にある才能を活かすのではない、別の生き方を探している自分と。

経緯は違うのかもしれないけど、自分のようにその才能を周りから期待され、周りが望むような生き方しか許されないことに虚しさを覚えたのかもしれない。

だけど、それは少しだけ違うものなんだと気づく。

その少しの違いが一体何なのかは、まだわからないものなのだけ
れど。

どこか似た者同士であると、フェリは感じていた。

翌日にはルシエは無事に退院した。かかってしまった入院費は自己負担だったのがやや笑えない。これも危険手当の内ということ
で納得しておく。

そしてルシエは当然のように学校に出席したが、ルシエが教室に
顔を出すと、今まで和気あいあいとした雰囲気だったクラスがやや
一変して、彼を伺うようななんとも居心地の悪い空気を出すよう
なっていた。

「おい……」

「ああ、あれが……」

声ができる方をちらっと見ると目を逸らされる。

ルシエにはまったく言っていないほど心当たりがないので、突然

この周りの変化に困惑したが、特に何かがあるわけでもないし割り切って自分の席に着く。敵意を向けてくるわけでもなく、ただ好奇心に近い興味本位な視線だということに気づいた。

だが、その中のごく一部には激しい怒気を含んだ視線も混じってはいるが、こちらから積極的に関わらなければいい話だと無視を決め込んで、我関せずと席に座って窓の外を眺めているフェリに近づいた。

「おはよう、昨日は色々世話になったな」

「そうですね、貴重な一日の半分を台無しにしてしまうくらいには世話をした気がします」

その返答に苦笑する。あの後彼女はすぐに帰ったのだが、どうやら目が覚めるまではずっと傍にいたようなのだ。それが監視としての務めだったからか、それとも友人としてかはわからないがしつかりと礼を口にしたわけではなかったために声を掛けたのだ。

「……なあ、それにしてもおれは何かやったのか？」

一段声を落としてフェリに問いかける。フェリに話しかけたあたりで周りが一瞬ざわついたのだ。グレンダンに居たころでも学校生活などを送ったことのなかったルシエは未だに自分に注がれる視線の意味がわからず、知らないうちに何かをしでかしたのではないかと若干危惧し始めていた。無視を決め込むにしても、やはり理由は気になってしまう。

「おそらく、一昨日の件について噂になっているのでしょうか」

「一昨日？」

一昨日、錬金科から盗まれたデータチップをとある一団から取り

返した件を思い出す。

「期待の新人現る　今武芸科の間で噂になっています」

期待の新人、そう言われる程の活躍をした覚えは無いが、確かにあの場で作戦の要である念威操者を倒したのは自分である。もつとも、あんな攻撃でやられる程にやわな連中が強盗を働くなどと思ってもいなかったわけで、他にも武芸者を倒した生徒もいたわけだからルシエが無理をしなくても取り押さえることはできたと思う。そうなることややはり大した実績ではなかったような気もするのだが。

「ですので、あまり近づかないください。目立つのは嫌いです」
「口スはおれがいなくても十分浮いて目立ってる気もするけど」

実際、入学してこの一週間ほどの間、フェリが誰かと一緒にいることはほとんどない。一人で窓の外を眺める姿が非常に絵になるからだろうか。それはクラスメートも同様に思っているようで、彼女の出す儂い雰囲気壊すようなことはしないために、彼女は知らず知らずのうちに教室の中で別の空間を作り上げているのだ。

もつとも、それも今ルシエが話しかけたせいで壊れたであろうけど。

「……なんか言いましたか？」

「別に悪い意味ではない、と弁解しておこう」

底冷えするような冷たい声に冷や汗を感じる。どうやら少しは自覚しているらしい。

と、ちょうど予鈴が鳴り響く。ジト目でこちらを睨みつけるフェリの視線を受け流しながら席に着くと、すぐに授業が始まった。

午前中は武芸の座学や、一般教養の授業がほとんどだった。

入学してからまともに錬金鋼ダイトを握ったのも先日的一件、それも自分が使い慣れた武器ではない都市警察の武芸科生徒に同様に支給される打棒だ。治安維持を目的とするなら、新入生と言えど使い慣れた武具の方が戦略の幅は広がるし、帯剣許可を出して準備をさせたほうがいいと思うのだが、その辺はどうなのだろうか。

もっとも、その辺は小隊に入れば新入生でも帯剣が許可されるらしい、ということはい先ほど、次の授業の概要を話しているときに知ったのだが。

「それで、何か用？」

目の前の三人組、入学当初からルシエに敵意を向け続けるグレンダン出身の者達。ルシエが中庭のベンチでゆっくりとランチを楽しんでいた所にやってきたのだ。

その中でも一際ルシエにきつい視線をぶつけてくる強面の男を見て言った。

「次の模擬格闘戦、俺と戦え」

「随分と気が早いね。まだ昼休憩が半分も終わってないのに」

と、牛乳パックにストローを挿してルシエは飲み始めた。その姿を見てか、男の顔は怒りに顔を赤く染める。

「俺は貴様が武芸者面を気取っていることが、我慢ならない」

「武芸者面……ねえ、グレンダンで流れた噂がどんなものだったのかは詳しく知らないし、知る必要もあるとは思わなかったけど、おれは別に武芸者を諦めたつもりはないよ。周りがどう言ったであ

れ、ね」

歯を食いしばりながら怒りを抑える男の顔を見ながら、ルシエもベンチに腰掛けながら強い視線で睨みかえす。大人げないことをしている自覚もある。だが、それ以上に自分を侮辱されることに腹を立てない気持ちがないわけではないのだ。

「次の授業では、各小隊の実力者が新入生の引き抜きにも来る。決して貴様を小隊員などにはさせんぞ」

だからか、とどこか納得したような気持ちでこの男を見る。かつて、栄誉を手に取りかけて、取りこぼした男に嫉妬を向けるその瞳を見る。

再び、その栄誉ある座に近い者が、その高潔な存在　武者そのものを穢すのではないかという懸念を抱いている。そしてそれに本気で、自分ではどうしようもできないほどの憤怒をぶつけようとしている。

ルシエは小さく息を吐いた。

「よほど、こちらの実力を買ってくれているみたいだね。もしかして、一昨日の一件を聞いたのかな？」

「言っただけで、貴様を許せないと」

今まで剽を扱えないと思っていた存在が挙げた急な功績に焦りを感じたのだろうか。それとも、剽が扱えるとわかって対等に戦い打ちのめせると思ったのか。もしくはその両方だろう。

そんなこと、ルシエにとってはどうでもいいことだ。それは結局この男の中だけの葛藤であり、それを勝手に解消しようとルシエに当たってきているだけではない。ルシエにとってこの男の存在はさして重要なものでもなければ、一方的にこちらに因縁をつけてき

ているだけなのだ。唯一、ルシエに関わるとすれば、過去に一部で流れたグレンダンの噂をツエルニでも流そうとするかどうかという点だろう。

だから別に、この男のことなど本当にどうでもいいのだ。いいと思おうとする。

「その申し出、受けるよ」

だが、口から出たのは考えとは別で、感情が先に口から吐き出された。

武芸科の生徒が使う専用の体育館、壁や床は緩衝材が使われて武芸の鍛錬で怪我を最小限に抑えるような造りになっている。

「それでは、今から模擬格闘戦の授業を行う！」

武芸科の上級生が気合いの籠った声でルシエ達下級生に声を投げかけた。

周りには見慣れない学生がちらほらと見学に来ている。ルシエは隣で同じように突っ立っているフェリに声を掛けた。別に意識して隣にいたわけではないが、自然とそういう形になった。

「あれが小隊員か？」

「そうです。あなたが勧誘されていたツエルニの精鋭、小隊員達です。もっとも、今来ているのは隊長やら副隊長やらその辺でし
ようね」

確かに、その立ち居振る舞いには落ち着きがあり、他の学生武芸

者とは違う雰囲気を纏っている。おまけに他の小隊員と区別するた
めか、目立つ数字の入った銀色のバッジをつけている。こちらを値
踏みするように観察している視線は何とも気分が悪くなってきそう
だ。

「……………怒っていますか？」

「ん、何が？」

「なんでもありません」

一瞬、フェリが言ったことを理解できなかったルシエだが、すぐ
に思い至る。ギャラリーからの視線を不快だと思ったときに、きつ
とそれが表情に出てしまったのだ。

「監視のこと？」

「……………ええ」

「それほどだよ。ロス会長はああ言っていたけど、もしもおれが
力に身を任せて都市に害を為す存在だったら排除するつもりだった
んじゃないかな？ 唯でさえ、この世界で優秀な武芸者を他都市に
出そうと考えるところはないだろうし、そう考えるとなんかしらの
問題を起こして厄介払いされてきたとか、そう言う風に考えるのが
自然だと思う。だから、有害か、有益か見極める必要があったん
だよ。仮にもツエル二の最高権力者なわけだしさ」

と、自分の考えを小声で説明すると、フェリはどこか呆然とした
顔でルシエに目を向け、そして小さく呟いた。

「……………やはり、あなたは少し変わっています」

「ひどいな、そりや多少は人と違う人生だという自覚はあるけど」

そういつて肩をすくめて見せると、聞いているのかいないのか、

フェリが返答することは無かった。そんな会話の中、事態は進行していたようで、今は相手が組み分けられている最中だった。まさかフェリとやり合わせるなどなかるうが、ルシエはそつとフェリから離れて、勝負を申し込まれた男に近づいていく。

男は一瞬だけルシエを睨みつけると、上級学生にルシエと組ませてもらおうように進言し、その要求は通った。

やがて、すべての組みわけが終わったらしく、十組ほどが体育館の中央程で距離をあけて相對し合う。その中にはルシエも混じっている。

「なあ、あんたはおれの名前を知ってて、おれはあんたの名前を知らないのはなんとなく不公平だとは思わないか？」

「勘違いするな、慣れ合う気は無い」

男はそれに無然とした態度で答えた。ルシエはその態度に苛立ちも何も感じはしなかった。別に友好を深める為に言ったわけではないのだ。これは所謂けじめというものなのだから。

「そつちこそ、勘違いするなつて。これは模擬格闘戦だ、決闘じゃない。礼節を重んじない武芸者は、ただの獣と同じだ」

軽く、あくまで緊張感も何もないような素振りでルシエは言う。

それに男は言葉を詰まらせて、それを言うことがひどい拷問であるかのように声を絞り出して言った。

「ガレルだ。ガレル・エリック」

「ルシエルディア・ラグナイト」

ルシエは静かに名乗りかえす。闘いが始まる、その気配が広い体育館に充満していく。

小隊員達の視線など気にならない。彼らが自分をどう評価しようが、こちらはカリアンとの交渉で小隊に関する自由意思を持っているのだ。彼らが自分を強制的に小隊に参加させようなどと言うことはできないだろう。もっとも言外にそう言っていただけであって、確約ではなく、決定事項でもないが。

そんな余分な考えを頭から排除して、目の前の相手の構えを見る。何度か他流試合で見たことのある、そんな構え。

「気絶、降参、もしくは上級学生の判定によって勝敗を決するものとする」

そういつて、何人かの上級学生が各組に散っていく。

少しだけ息苦しい、他人の薙が発する余波に気分が高まっていくのを感じる。

思考が切り替わる。自分の中の武者としての本能が呼びさまされていく、そんな感覚。

「はじめえっ！」

体育館に反響する大声に、身体は滑るよつに動き出した

第六話 ぶつけられる因縁（後書き）

ここまで読んでくださった方、評価してくださった方、お気に入り登録してくれた方、ありがとうございます。それらは作者のやる気につながるので大変ありがたいです。

これからも拙作をよろしく願います。

何か物申したいことがあれば感想の方まで願います。

第七話 重なる

自分でも理解できない感情に囚われている。

かつて、自分が目指していたその場所にもっとも近かった者。

それは過去の自分の憧れであり、目標であり、何より超えるべき壁のほずであった。

だが、時が経つにつれ賢しくなっていく自分が、自らの限界に気づくのは早く、気づいてしまえば自分にはないモノを持っていることが妬ましくなる。

妬ましくも思いながら、されど憧れることをやめることができない。そんな二律背反な気持ちに終止符を打ったのは自分ではなく、憧れそのものだった。

たぶん、その瞬間に憧れは憎しみへと変わったのだ。

互いに動いたのはほぼ同時だった。

ガレルはルシエへと距離を詰めようと動き、ルシエはガレルの側面に回り込もうとする。

それを許すはずもなく、ガレルは拳を振り上げ、隙のない牽制を繰り返す。

一度、二度、そのやりとりを繰り返し、また牽制のために繰り返される攻撃がルシエに当たることもない。

だが、ルシエは執拗にその動きを繰り返す。何度も何度も、手を出そうとするわけでもなく、かといって全く当てる気がないわけでもないように剄を振りまきながら牽制をかわしていく。

ガレルも根気よくその牽制を続ける。時に速く、時に間合いをずらし、左右上下の微調整を変え、少しでもルシエに変化があれば手痛い一撃へと繋がられる動き。

ルツケンスで学んだ格闘術の中の一つだ。

「捉えた！」

一瞬、わずかにルシエの動きが鈍った。それは牽制を繰り返すうちに反撃の為に力を練ったタイムラグだとガレルは判断する。

一撃だ。一撃を牽制の為ではなく、必殺の一撃とする。

勝てると、あの天剣にもっとも近かった男に勝利できると確信を抱く。

屈強な腕から弾丸のように、何度も繰り返された型であろう一撃をルシエに見舞わせる。

それは空気を震わせ、上半身のバネを最大限に活かしたものだ。

そして驚愕することになる。

ガレルの顎に奔る鈍い衝撃。何が起こったのか、ガレルの思考は混濁し停滞する。

空を打ったのだ。自らの拳が振り抜いた先に揺らめくのは残像。執拗なまでに牽制を繰り返し、その一撃を打つための型だと悟らせてはいなかったはず。

ガレルは混乱の中、自身がどのようにやられたのかようやくその技に頭が回る。

剄を抑え気配を断つ殺剄、その応用。

内力系活剄の変化、疾影。

ルシエはガレルが振り抜いた拳よりも下に。クロスカウンターのごとく顎に綺麗なアップパーをぶつけていた。

「……逆手に、取ったのか」

「御名答」

声をなんとか絞り出す。脳髓が揺さぶられ、立つことができないほどに両足から力が抜ける。

ガレルが必殺の一撃を狙っていたのを知り、繰り出す一撃の隙をルシエも狙っていた、そういうことだ。

「勝者、ラグナイト！」

終わりを告げる声が聞こえると同時、ルシエの身体から汗が噴き出す。だが、それよりなによりも周りにいた武芸科生徒によるざわめきが大きかった。

見れば、残っていたのはルシエとガレルの一組だけだった。他はあっさりと決着が付いたのか、それともルシエ達が時間を掛け過ぎたのか。

どちらにせよこれで一つでも問題が解決できればいいか、などとルシエは考えながら緊張を解いた。

どさりと、床に手を付いて倒れるガレルの姿が目に入る。わずかに肩を震わせながら、ガレルは言う。

「なぜ、なぜだ。 どうして、手を抜いた」

言わんとしていることをルシエは漠然と理解する。それが正解かどうかはすぐにガレルの口から語られた。

「貴様なら、もっと早くに決着をつけられたはずだ。 こんな、惨めな姿を晒させることもなく！ どうして勝てると思わせた、答える！」

声には怒りも覇気もない。ただ、無念と諦念が入り混じったか細

い声だった。ルシエはその姿にかつての自分を見た気がした。

「……手は抜いていない。これが今の、おれの全力だ」

事実、少しだけだがルシエの息は乱れており、身体にかかった負担も大きい。強烈な剄を発したあと、一気に剄を抑え相手に残像を見せる“疾影”。この技の剄脈にかかる負担が今のルシエには少々堪える。

此度の試合、ガレルの力量は決して低いものなどではなかった。

この年齢でこの実力ならば、グレンダンでもなかなか優秀な部類に入るだろう。実力が拮抗していたわけではなかったが、わずかな油断やミスによってルシエが負ける可能性も勿論含まれていたのだ。

そのとき、少しだけあの日、自分の運命が大きく変わった日のことが分かった気がした。彼は、ヴォルフシュテインもまた現在いまの自分のような状態だったのだろうか。

本気で戦い、その結果として勝利がある。ただそれだけのことで、それは過程をすっ飛ばして、名のもつブランドによって結果だけが眩く見えてしまうものに。

高い、手の届かないものに見えてしまったのだろうか。

その考えを振り払うように、ルシエは次の相手を求めた。

第八話 顔見知りの関係

人との関係の境界と言うのは一体どういうものなのだろうか。

例えば友達と顔見知りの境と言うのはどこからが友達で顔見知りなのだろうか。

話をする程度なのか、相手の名前がお互いにわかることなのか、一緒にどこかへでかけることなのか。

それとも、胸の内の苦悩を打ち明けられることなのだろうか。

結局その後、もう二、三度ほど相手を変えて組み手をやったが結果はルシエの勝利で終わった。それは当然だとルシエは思う。ガレルのように本格的な武芸をやっているものが少ないのだ。実力の半分も出さずに結果が出るのは必然であって、決して偶然や運に頼ったものではない。

そうして模擬格闘戦という名の、小隊員選別試験は幕を閉じた。

「どうですか、調子の方は」

「どう、とはどうということさ？」

あの模擬格闘戦から一週間ほど経って、放課後となった今フェリに話しかけられたのだ。問いに対して、元気がどうか返せばいいのだろうか。毎日学校で顔を合わせているだろうに。

「はあ……、小隊からのスカウトの話です。すでに何件か来ているのでしょっ？」

ああ、とそのことに思い至る。確かに何件か誘いに来た小隊はあ

つたが、どれも丁寧にお断りした。最初の三日ほどはずっと交渉に
来ていたが、変わらない対応に諦めてったのが大半である。憤慨さ
れて逆恨みされないかがやや心配なところではあるが、最近変わっ
たことと言えばそのくらいであろうか。

あとは、目の敵にされていた視線が目に見えて減ったようだ、と
いうこと。

どんな心境の変化があったのかはわからないが、武芸で負けてま
でこちらに因縁を吹っかけてくるほど性根が腐っている、というこ
とはなかった。そうなるそれは、根が純粋な武芸者からそういっ
た負の感情を抱かれていたということで、その事実には少々思うとこ
ろもある。

「やはり、来ていたようですね、兄にはなんと？」

「へ？ あ、ああ。別に今のところ全部断ってるし、それをわざ
わざ生徒会長に報告する必要もないだろう」

カリアンからしたらルシエを小隊に入れたいのだから、こうして
活発的に小隊員が勧誘する流れができたほうが喜ばしいだろう。そ
うして何かの間違いでルシエが入隊してくれば万々歳なのだから。
そういう理由が分かるため、わざわざ勧誘を禁止してもらうなど頼
もうと思わない。行けば行ったで何か厄介な手土産を持たされるこ
とにもなりかねない、そう考える。

「それもそうですね、むしろ非協力的になることをわたしは推奨し
ます」

「それはまた、どうして？」

フェリの言葉に疑問を覚える。どうして非協力的な方がいいのだ
ろうか。少しだけその理由に関して思案してみるが浮かばない。は
たしてルシエが入隊しなくて、カリアンにとっていいことなどある

のだろうか。

「嫌いだからです、兄が」

「反抗期？」

割りと本気の蹴りを脛に当てられ、ルシエは悶絶した。悶絶しながらもフェリの表情を伺うと、どこか辛そうな、悲しそうな、けど強い憤りすらも混ぜ合わせたような複雑な感情が露わになっていたような気がする。無表情だからその感情が決して正しいモノではないだろうけど。

それはこの短い期間でしかフェリを知らないルシエには到底わかりえない何か。だけど、長く居れば自然とわかるようになるのか、と言われればわかる自信は無い。

「憎んですらいいるのかも知れません」

貯め込んだ何かを吐露するように、一瞬だけ弱気な声を出す。心なしか、輝く銀色の髪が光沢を失った気さえした。

「……いえ、あなたに話すようなことではありませんでしたね、忘れてください」

そういつて教室から出ていくフェリに、ルシエは一言も声を掛けることはできなかった。

相変わらず学生に見えないルシエの上司であるフォーメッドとも今日も今日とて書類整理。一体どれだけの量があるのか、小さい揉め事はどこでも起きるらしく毎度毎度に書類は溜まっていくらしい。最初にあつたような荒事がそうそう起こることもなく、カリカリとペンが走る音だけが室内に鳴り響く。

「そっちのファイルとつてくれ、ついでにお茶」

「お茶つて……専属の秘書になった覚えは無いんですがね」

都市警察強行警備課の中に漂うこの空気にもほどほどには慣れてきた。しかし、こつ手足のようにあれこれと言われるのにはやや辟易としてしまうが、これが上下関係というものなのだと納得して、椅子から立ち上がりてきぱきと湯を沸かす。備え付けの簡易キッチンには湯しか沸かさないためか綺麗なままだ。

「ところでおまえさん、どこの小隊に所属することにしたんだ？」

集中力が切れたのか、それとも一区切りついたのか、フォーメッドから再度声がかかる。

「また唐突に。おれは小隊に所属するつもりなんてありませんよ、強いて言うなら強行警備課所属ですから」

「は、うれしいことを言ってくれ」

うんざりといった風に大げさに肩をすくめて言ってみせる。模擬格闘戦からのこともすでに噂が出回っているらしく小隊勧誘の話までも流れているらしい。ここ何日かの間に別の同僚にも聞かれてい

たことで実際うんざりしていたわけだが、少々お世辞を混ぜて冗談めかすことで話題を打ち切らせようとする。

フォーメッドはその言葉に笑みを浮かべながらも、ルシエに問いかけた。

「だけどな、お前さん何か勘違いしてやいないか？」

「勘違い、ですか？」

「ああ、そうだ」

ルシエはあまりにいきなりな言葉にオウムのような返事をしてしまう。フォーメッドはあくまで机の上の書類と睨めっこしながら答える。自然に、世間話をする程度のそんなものだ。

「小隊に所属する如何は確かにおまえさんの意思次第だ。何か小隊に入らないことに特別な理由があるんだろうが、そのことも別にこっちは何の気にもしない。貴重な人材がいなくなっちゃう事態になるのは困るからな」

「苦学生のおれが、小隊に入っている余裕なんてありませんよ」

本当はカリアンから奨学金ランクAに昇格させる話が出ていて学費の面での心配は無いのだが、余計なことを話して面倒なことになるのは御免である為に話そうとはしなかった。

「そうだな、だけどあの生徒会長が優秀な武者を遊ばせておくはずがない。すでにおまえさんのところに交渉に来ていてもおかしくはないはずだ」

一瞬、ルシエは自分でも明らかに表情が硬くなったと感じたが、すぐに微笑を作る。幸い、フォーメッドには背を向けている為に顔は見えていないだろう。

「まさか。おれはまだまだ新入生のひよっこですよ？ そんな奴のところにはわざわざこの都市の最高権力者が来るわけないじゃないですか」

「ひよっこかどうか、それは別に年齢や学年が決めるわけじゃない。俺が三年で課長を務めているのも一重にそういう能力があったからだ。小隊に所属する者も、才能があるから抜擢される。世の中とはそういう風にできているんだよ」

さも当然のようにのんびりとした口調でそう語るフォーメッド。この世界では実力のないものが生きていくには、辛い。そんなことはルシエも承知していた。そのことを自分で考えるのと、他人に言われるのではまた違った意味があると感じる。

どうして全力を出さないのか。そんな風に言われた気がした。

「切羽詰まったツエルニの状況をなんとかしようとしているのは何も会長だけじゃない、小隊員たちも一緒さ。いつまでも今のままでいられる、そう考えるのはちと甘いかも知れんぞ？」

「おれは、別にそんなつもりじゃ」

書類から目をあげて、フォーメッドはルシエの顔を見た。視線が頭蓋を突き抜けて、まるで心を見透かされているような感覚。ルシエの中で用意されていた“無難な答え”を吐きだすことはできなかった。

「心の準備くらいはしといて損は無い、そういうことだ」

そんな会話を打ち切るように、沸騰する湯の音が部屋に鳴り響いた。

定時前には仕事を切り上げることができた。所詮は臨時出動員、ある程度負担がかかりすぎる分だけ終わらせれば、あとは本業に任せとけばいいのだから。

夕方、そういうには微妙な時間に街に繰り出す羽目になったのも、たまにはいいのかもしれない。

流れていく人は皆が皆、学生。この光景を異常だと感じたのは最初の数日で、今ではすっかり目に馴染んだものだ。そのことが、自分がこの都市に馴染んできたのかということとイコールになるかは別として。

決してこの都市が嫌いなのではない。元の故郷であるグレンダンに対して、どう言う気持ちだったのかはわからない。だけど、故郷と思っている時点でそれなりに愛着はあったんだとルシエは思った。

これからここツエルニが第二の故郷となるかはまだわからない。

「こんなところで、何してるんですか？」

不意にかけられた声に振りかえると、そこには最近になって徐々に話す機会が増えてきたフェリが居た。何をしていると聞かれても、柄にもなくいろいろ考えながらぶらぶら散策していただけだったのだが。

それにしても、何かを言おうとしたあのとき以来の声だ。なんとなくだが、ルシエは気まずさを感じてしまう。

「何かをしてた方がいいかな？」

「別に。その辺の学生同様に賑やかにしゃいで青春を謳歌するような気持ち悪い真似をされていなくて安心です」

なんともコメントに窮するものだ。何と返答していいやら、ルシエは苦笑しながら答える。

「あゝ、年齢の割に落ち着いているということでもいいかな？」

「……ポジティブですね。 解釈はお任せします」

少しだけ不貞腐れたような、そんな風に見えるフェリ。そういえば彼女の方こそどうしたのだろうかと思うと、右手に服屋の名前が入った紙袋をぶら下げている。

「服、買ったんだな」

「あなたはわたしが裸でその辺を歩き回るとでも？」

「えっ、いやいやそうじゃないって！」

「冗談です。 不埒な妄想は即刻やめてください」

冗談、至極真面目に答えるせいで不意に考えてもいないことが頭をよぎって顔を赤くしたルシエを咎めるようにフェリは言った。この間見せたような感情を浮かばせることは無い。それに少しでも安心して、ルシエは未だに熱を持った顔を誤魔化すように言う。

「途中まで持っていくよ」

フェリが何か言う前にさっと袋を取り上げ、隣に並ぶように歩く。そうすると会話はぱたりと止んで、通りの喧騒から二人だけがぽつんと孤立したような、だけど決して気まずいわけじゃない空気。

そうして少しずつ通りから離れていく。フェリの家がどこかはわからないが、外縁部にほど近い場所に向かっていているということに気づいた。

フェリの横顔を伺って、だけど彼女は特に何を言うでもなくただ

前だけを見たまま黙々と歩を進めていく。どこに行くのか、そういうことがなんとなく躊躇われた。そう口にするところの空気が壊れてしまいそうな気がしたから。

どうして壊したくないのだろうか。

よく、わからない。他人との距離をここまで意識したこともなければ、ついこの間まで誰かが隣を歩くことなどなかった。それはいつも一歩後ろか、それともはるか遠くから眺められるくらいのものであったはずなのに。

友達、そういうものなんだろうか。教室では誰かがルシエに話しかけてくるような者も少ない。ないこともないのだが、それは噂を頼りにやってきた野次馬のようなもので、ルシエを見ているわけではなく、偶像のルシエを見るようなものだとすぐにわかる。そういうものには自然、冷たくなってしまおう自分がいることもよくわかつている。昔と違うと言いつい聞かせたところで、習慣と言いか習性と言いかそういったものが滲んでしまつて普段通りに感情を誤魔化せなくなる。

だからそれほど深い仲になるわけでもない。

その点、フェリとはカリアンとの繋がりといい、少しだけルシエの秘密を知っている。だからなのだろうか、でもそれだけでもない気がする。いつも何に対しても無表情で無感動な顔をしているから、何の裏も悪意も感じないから、下手に笑顔で取り繕って接する者よりも気楽に感じるのだろうか。

でもきつと、誰よりも自分を誤魔化さなくてすんでいるから、それが理由じゃないだろうか。

歩いているうちに外縁部に到着する。大分時間が経って夕日が静かに輝いている。

「いい眺めだな。 これが見たかった、つてこと？」

間が空いた。一拍ほどのほんの少しの間。

「……兄を憎んでいると、わたしは言いました」

ルシエの問いには答えず、フェリは言葉を紡ぐ。顔は見ないで、遠くの穢れた大地ですら美しく染める夕焼けを眺め続ける。

「それは、わたしにあるこの才能　念威操者としての才能を利用しようとしているからです。　念威操者として決められた将来以外の道を探しにツエルニに来たわたしに、兄は武芸科へと転科させ、念威操者となる道を強制する。　だから、恨んでいる、憎んでいます」

才能、どれほどのものをフェリが持っているのかはわからない、わからないけど、少なくとも彼女が数日間念威端子をルシエの傍に置いて気づかせないことができるくらいの実力がある。

彼女の選択、念威の才能があるのにそれを使わない道を探すということ、それ自体は別段間違ったことではない。才能がない武芸者が商売を営むこともままあることだし、決して武芸者が武芸者である必要もない。

だけど、それはルシエが理解できるものでもない。

「そっか」

「……他に何かないんですか？」

相槌を打つ軽い返事に、少しだけイラついた声でフェリは言った。相変わらずの無表情の中に見えない怒気を感じる。

「別に恨んでもいい、憎んでもいいと思う。　それはおれにはどうにもできないことで、ロスの中にある問題だから」

「冷たいんですね」

一瞬だけこちらを見たような気がする。ルシエはこちらを伺う視線に、さらに答えを重ねる。

「否定しない、けど肯定もしない。その悩みはロスだけのもので、他人のおれからしたら贅沢な悩みに見えるから」

「これが贅沢だというならば、わたしはあなたを軽蔑します」

はつきりとした拒絶の意思。ルシエはその言葉を意思を受けても自分の考えを曲げようなどと思わなかった。それが本心で、偽りない言葉で、ロスの前ですら自分を取り繕うようなことをしたくなかったからかもしれない。

「……それは結局ないものねだりなんだよ。でもさ、さっきも言ったけどおれはロスのことを否定も肯定もしない。だからもしもロスが武芸以外の道を探すなら、協力するから」

そしてこれもルシエの本心だ。フェリにはもう見限られてしまっただかもしれないけど、それでも言うっておきたいとそう思う。

「だからまあ、なんていうか、これからもよろしくしてくれると嬉しいかな？」

それを聞くと、フェリはふうと息を吐いた。なぜだか目に見えていた威圧感が消えた気がする。

「……普通、そこは適当にでも共感してくれる場面なはずですよ。それと話題がずれていますよ」

「いつも唐突に話題を外してくるロスよりはマシだって」

くっ、と思わず笑いが零れる。それはたぶん、ツエルニに来て一番自然な笑いだっただ。

「何がおかしいんですか？」

「さあ、何がおかしいんだろうな？」

わからない、どうして笑っているのか、フェリの深刻そうな顔がいつもの無表情に戻っているのかも。

「なんだかわたしばかり損をした気がします……やっぱり変わった人ですね」

「つてことは、ロスも変わった人ってことでいいんだな？」

「え？」

口を呆然とばかりに開けて見せるフェリに笑いながらルシエは言う。

「類は友を呼ぶ……お互いに、他人が知らない自分の事情を知っているんだから友達なんじゃないか？」

「友達……」

口の中でフェリはその言葉を転がす。転がしてみてもその意味を反芻する。

「まあおれもよくわかんないけどな」

自分で言ったセリフに恥ずかしくなつて頭を掻く。きつと、もっと人づきあいとうまいやつはそんなことを言う必要もないのだろうけど、不器用な自分には精一杯だった。

「あなたの場合友達と言うよりは悪友でしょうに」
「相変わらずひどい言われようだなあ」

気が抜けるような、力のない声でルシエは返答する。
フェリは考える。どうしてルシエにこんな話をする気になったのか。

たぶん、誰よりもフェリの近くに居た血のつながらない関係、友達だったからなのだろうか。
まだそれはわからない。

「でも、悪くないです」

風の流れる外縁部で、フェリはそう呟いた。

第九話 小隊員、迫る

武芸とは、単純な剽の量だけで強さが決まるものではない。

自分が使うダイト錬金鋼の形状を把握したうえで、身体の動き、随時それに合わせるように剽を調節する。いや、それはもはや合わせるなどというものではなく一つの個体として錬金鋼ダイトを自らの身体に組み込むことで最上の力を発揮できるものだ。ルシエは考える。

それを為すためには、どんな達人でも日頃から錬金鋼ダイトの感触を忘れてはならない。それはルシエとて例外ではない。

早朝、まだ陽も昇りきらぬ時間。朝靄を切り裂くほどに素早く動きまわる一点の人影。

「はっ！」

気迫の籠もった声と共に打棒を振りぬく。振り抜くだけに留まらず、その動きを軸とした連撃へと繋げていく。始動から自身の隙は最小に、威力は徐々に重く鋭いものに変えて行く。

仮想の敵を打ち、薙ぎ、叩き潰す。

とどめとばかりに繰り出された一撃は、外縁部の地面を抉り半径数メートルのクレーターを作り出す。

「ふう……」

溜まった息を吐くのと同時、ルシエの中に滾っていた剽が霧散し、剽息だけが体内に循環する。

剽息は剽の基本。常日頃から父親の言い付けで絶やすことなく、

それが実力に繋がっていると理解しているから、子供っぽい考えでこの習慣をやめることはない。

慣れないものだ、ルシエはそう感じている。

自身の剄に不満は感じるが、現状でこの出力ならば問題ない。それは徐々に改善されていくはずなのだ。

今の問題は武器にある。

支給された錬金鋼タイトは黒鋼錬金鋼クロムタイト。剄の伝導率はあまりいいものではなく、その分密度が高いので、ある意味剄の扱いが苦手なものだとしても真つ向から叩く分には扱いに差が出ないであろうもの。

もつとも、熟達したものが使えば、かなりのものとなるのだから、錬金鋼タイトというものも奥が深い。

しかし、根本的にルシエとは真逆の相性ではある。そもそも扱う武器が違うのだから、その剄の流れも身体の動きもかなり異なる。今の一連の流れとて、かつての相手の見よう見真似、自身の扱える流派から引つ張ってきた身体の動きなどだ。

本当に基礎の部分は変わらないにしろ、やはり同じ武器同士でやり合った場合経験の差が出てしまうだろう。この練習はその誤差を埋めるための代替的なものであるのと、普段からの鍛錬として剄を鈍らせないようにするためのものだ。

鍛錬を終える。終わると、いつもの時間通りに来客がやってくる。

「やつぱり、今日もってわけか……」

ルシエは小さく一人愚痴るように呟き、手早く錬金鋼タイトを仕舞う。

いくら支給され携帯が許可されているとはいえ、使っているのを見られるのは好ましくない。

ルシエは家に戻ると、シャワーを浴びて授業の支度を始めた。

「で、どう思う？」

「朝から熱心なストーリーカーですね、わたしにはとても真似できません」

尋ねたのはルシエ、答えたのはフェリだ。

いつものように登校するまでの間、ずっと気配の主はルシエを観察しているようだった。もともと、ルシエに気付かれているくらいならば実力は知れていると考えるのだが、ここ数日の間付きまとわれ、無視するにもいい加減ストレスが溜まってきたのでフェリに話してみたのだが結果はこの様だ。

「そんなの事実から見たら誰でもわかる」

「それほどまでに自分の容姿に自信があたりだと？」

「いや、そうじゃなくてだな……」

困っているルシエに反比例するかのようにはフェリのリアクションは冷たい。元から素の反応はこのくらいなのだからルシエも気にしてはいないのだが。

「大体、正面から探りを入れてこない辺りが、なんかこつむずむずするといつかだな」

なんとも情けない事であるが、ルシエはルシエで荒事にしたくは

ない。だから穏便な解決方法をフェリに求めているわけなのだが、フェリは相変わらずだ。

「わたしには関係ありません。あなたの問題ですから」
「うぐつ、いや、それはそうなんだけど。もっと何かあってもいいだろうに、心配してくれるとか、こつ念威でこそつと正体を探ってくれる、とか……」

念威の“ね”が出たあたりでフェリの視線がきつくなり、ルシエの言葉は尻すぼみになって消えていく。わかつていたことだが、やはりフェリは自分の才能を疎ましく思っているようだ。別の道を探すにしろ、才能は才能として使えばいいとルシエも思わないこともないが、それも個人の問題だと割り切つて考えているため強制はできない。

あの日から、念威に関して、武芸に関してフェリに強要することは考えてはいけなかつたからだ。もつとも、フェリが自分から協力してくれたりするのならそれに遠慮することはないのだが、今回はどうやら無理らしい。

「はあ、やっぱり自分でなんとかするしかないか……」

「心配したところで、そうそうにあなたがやられてしまう姿は想像できません。それと最初から他人の力を当てにするのは駄目人間の始まりです」

「はいはい、価値ある教訓をありがとうございます」

適当に手を振つてあしらわれたフェリはその視線をより一層険しいものとする。フェリにはまだ天剣授受者がどういったものであるか、きちんと説明したわけではないが、この間の模擬格闘戦の実力を見てそう判断したらしい。

「せいぜい、夜中に襲われないことを祈るんですね」

なんとも洒落にならない一言だ。ルシエは言葉を詰まらせて苦笑する。

と、乱暴、というほどでもないが荒っぽく教室のドアが開かれると、剣帯を腰に着用した上級学生が教室に入ってくる。

「ルシエルディア・ラグナイトだな、話があるついて来い」

突然の事態ではあるが、ルシエは特に面食らうこともなかった。しかし、クラスメートからの視線を一手に引き受けてしまったことには若干の恥ずかしさを感じている。それもほんの一瞬のことではあった。注目されるのは割と慣れていて、いい意味であった期間は短い。

「はあ、わかりました。じゃロス、またあとで」

上級学生の前だと言うのに、普段の砕けた態度のまま何の緊張もなくフェリに一言告げる。そのときの上級学生の顔はやや歪んでいたが、特に咎めるようなことはしなかった。

「あとで会えればいいんですがね」

逢引の心配、などでは決してなく、フェリの少しだけ悪意を混ぜた言葉にルシエは頬が引きつりつつも、上級学生に続き教室を後にした。

連れてこられた場所は練武館。小隊員が鍛錬に使う特別棟だ。た

だの武芸科の生徒にとってある意味聖地といってもいいだろう。武芸科生徒の大半が都市の精鋭と言われる小隊員の座を夢見ているのだから。

もつとも、その大半からあぶれたルシエがここにいるのはなんと皮肉だろうとも思わないでもない。

上級生は躊躇うことなく中に入って行く。入って行くときにちらりと銀色のバッジが見えた。どうやら彼も小隊の一員らしい。生憎と、その数字までは確認できなかったがすぐにわかるだろう。

「来たか、御苦労」

「遅いぞ！」

訓練室の扉を開く上級生に続くと、待っていた言葉は対照的だった。一方が労いの言葉を落ちついた声で掛けるのに対して、もう一方は子供のような高い声でそれを咎めている。

ルシエは声の主二人を見据えた。

「それで、おれに何かご用ですか？」

やや生意気になってしまっただろうか。相手は特にそれを気にすることなく、寄りかかっていた壁から直立した。

かなりの体格だ。筋肉は余すところなく鍛えたと言わんばかりに盛り上がっている。しかし、その顔は厳つい造りながら、どこか愛嬌を感じさせる。笑えばそれなりにもてそうであるが、彼が持つどこか落ちついた雰囲気、威圧感のようなものがそうさせない。

もう一人の声の主は彼の肩に掴まっている。紅い燃えるような髪に、どこか小動物のような体格。本当に学生の年齢を満たしているのか、やや怪しい。そんな第一印象だった。

「わざわざ呼びつけて済まなかったな、武芸科四年の第五小隊長、

ゴルネオ・ルツケンスだ。こっちは四年のシャンテ・ライテ、同じく第五小隊で副隊長をやっている」

小さく見える制服に銀色のバッジ。第五小隊を表す数字が輝いている。用件は大体わかったが、それよりも。

「ルツケンス？　ということとは天剣授受者の弟、ですか？」

「ああそうだ、もっとも兄とは違って出来がいいとは言えんがな」

珍しいものを見た、というルシエに対し、ゴルネオはどこか自嘲気味に言ってみせた。それに気まずさを感じてしまふ。それは自分が嫌う、知らない他人が自分を見る目を自分がしてしまったことに対してだった。

「すみません、そういうつもりで言ったわけではないのです」

「いい、気にするな。お前は、天剣を賭けて戦ったラグナイト家の次男で間違いないな？」

「……ええ、その次男で間違いないですよ」

ルシエはその事実にはやや目を伏せた。どうして彼が自分に声を掛けたのか、ただ単に実力があると言っただけではない気がしてならない。あの出来事を知らないはずがないだろうに。

「そうか。　実はお前を第五小隊にスカウトしたい」

「え？」

思わず間の抜けた声を返してしまう。何を言っているのだろうか
と耳を疑った。

「何を呆けた顔をしている？　ここに呼ばれた時から、そうなる覚

「悟くらいあったらどう？」

「いえ、それは、そうですね」

歯切れの悪い返事を返すルシエを不審に思ったのか、否か。ゴルネオは尚も続けた。

「ああ、お前にはこの武芸大会なるものが子供の遊びに思えるのかもしれないな、かつて天剣を賭けて戦ったのだ、学生たちの武芸など武芸の内に入らんのだろう」

「……………」

「だがな、全員この都市を生かすために必死なのだ。その思いだけは嘘ではない。もしもお前が協力してくれれば、戦力は大幅に上がる。本気なのだ、我々も」

誤解をしていることはすぐにわかった。ここまで純粹に崇高な志を語る彼は、恐らくルシエが引き起こした惨事の顛末を知らないと言っただろう。それを知れば、彼は今のようにルシエに接してこないことは容易に想像できるし、だがそれを自分の口から語るのは酷く億劫で、そうすべき理由はあるのに口は動こうとしない。

何の言葉も返さない、正確には返すことができないルシエにゴルネオはいぶかしむことなく続ける。

「この間の模擬格闘戦、あれも実力を抑えていたのだろうか？ 天剣になれなかったとはいえ、おまえの武芸のレベルは天剣に迫るものがあった。ヴォルフシュティンの座はアルセイフのものとなったが、あれから随分と時が経った。相当な武芸者になっていることは容易に想像がつく。それに仮にも俺とてルッケンスの出で、他の武芸者連中よりも実力があると自負している。どうだ、うちに入ってくれないか？」

途中から、その言葉は耳に入ってこなかった。彼を欺くような真似をして小隊に入ろうとも思えないし、もとよりその気もない。四年前にグレンダンを出たと言うのなら、その事情を知らないことも頷けるが、果たしてそれもいつまで続くのだろうか。不意に届いた情報でその事実を知ることになった時、彼はルシエを憎まずにいられるだろうか。

様々な考えがルシエの頭の中で交錯し、絡み合う。

「申し訳ないですが、おれは小隊に入る気はありません」

それだけを何とか喉から絞り出す。ゴルネオはその顔に渋面を作るが、すぐに無機質な厳格な顔となる。と、今までおとなしくこちらを見ていた赤毛の上級生、シャンテがこちらに牙を剥けるように口を開いた。

「おまえ、ゴルの誘いを断るって言うのか!」

「シャンテ、落ちつけ」

「でも、ゴル……」

ゴルネオはシャンテにため息と顔を横に振るだけで黙らせる。

「……無理に誘おうとは思わんが、いつでも来い。こちらから手合わせを願うこともあるかもしれんしな」

少しだけ残念そうに言われたことが、救いだったのか、後ろめたかったのか。

よくわからないまま、ルシエは練武館をあとにした。

「それで、まあ不幸なことは連続して続く、と」

練武館を出てからずっとまとわりつく存在に気づいて、気付いていながら手を出すようなことはしないで放っておいたのだが、いい加減うつとおしくなってきたてきそう眩く。懐にしまった錬金鋼ダイトの感触を念の為確認しておく。

「出てきたらどうだ？ わざわざ下手くそに殺到しても意味はないんだが？」

「あちゃー、ばれてたのか。さすがは期待のルーキーってことかねえ」

軽い口調で、街路樹の陰から姿を現したのは細身の男。だらしく着崩した制服は彼の持っている軟派な雰囲気雰囲気に拍車をかけている。長髪を後ろに束ね、緊張も警戒も持たない様子で男はこちらを見ている。

極めつけは制服につけられた銀色のバッジ。

「……今日はよくよく小隊の方と縁があるようで」

「まあ、ずっと見てたわけだし。この様子だと気付いてたんだろうけどな」

どうやら最近ルシエのことを監視していたのはこの軽薄そうな男らしい。ゴルネオほど堅くなれとは言わないが、もう少し礼儀と言

うものを学んだほうがいいのでは、そんな風におもつ。家の性質上、このようなタイプと会話することはほとんどなかったために、あまり免疫もない。

「ああ、そう警戒しなさんなつて。オレは三年のシャーニッド・エリプトン、第十小隊所属だ、おまえさんを第十小隊に」
「小隊には入りませんよ、おれは」

シャーニッドという上級生が言い終える前にルシエは否定の言葉を紡ぐ。先ほどの事が頭から離れず、目上に対して余計な気を払う気にもなれない。

「手厳しいねえ、今のところ誘いに来た小隊が全滅つても領けるわ、こりゃ」

「ついでに言うと、おれはあなたと無駄話をしている時間もありません。重ねて言わせていただければ、即刻下手くそな殺戮で付け回すのもやめていただきたい、わざとなんでしょう？」

ひゅ〜、と文字通りの綺麗な口笛を吹くシャーニッド。その姿に尚もルシエは怒りを募らせる。こちらと交渉をする気がないのだから、おちよ〜くつていただけなのではないか、そう思う。

「これもお見通しっつと」

「舐めているんですか？ そちらから気付いてくれと言わんばかりのレベルでしたが」

「まあ、試験みたいなもんだ。噂ではどれほどのもんかなんてわからんからな、勝手にこちらで試させてもらった。ずっと無視されてるから、気付いてないのかと思ってたぜ」

にやりと人の悪そうな笑みを浮かべる。そんな中ルシエは少々、

いやかなり怒っていた。

(試す？ おれを、この軽薄な男がか？)

それがルシエには気に食わなかった。もつとも、無表情を貫き、自身の中にある怒りはその表情の裏に隠したつもりではあったが、さきほどまで柔らかかったシャーニツドの視線が少しだけ真剣味を帯びる。

「おっと、不快にさせていたのは謝罪させてもらう。すまなかったな。 単刀直入に言っ、役に立たないならスカウトしようなんて考えない。 だが、オレはおまえがかなりの実力を持っていると見ている。 それは模擬格闘戦だけじゃなく、今までのおまえさんを見ていればなんとなく、わかる」

「それがどうしてこちらを舐めてかかった殺到になるのか、甚だ疑問ですけどね」

その謝罪に少しだけ怒りを鎮めて、冷静になる。 軽薄な態度から真剣な態度に変わったことも大きく、少しだけ真面目に話を聞こうと言つ気にもなる。それが彼なりの交渉術だとしたら大したものだが。

「まあ、初めは徐々につてやつだ。 最初から本気でやつても気付かれないだけでアピールにもなんないだろうしな。 仮にもおまえさんは新入生で、まだまだ未熟なんだからな」

彼自体、悪気があったわけではないのだろうが、いささか今のセリフはルシエにとって許しがたいものであった。

「……やるなら全力でやるべきだ。 もつとも、あなたくらいの実

力者が本気で殺到をしたところで、サーカスの中で無様を演じるピエロを見つづけるくらいに容易いでしょうけど」

まさに売り言葉に買い言葉。ルシエは反射的にそう返す。

その挑発には、シャーニッドも思うところがありその目が鋭く変わり、口元が引き締まる。

「……ほお、言ってくれるなルーキー。だったらオレと勝負でもしてみるか？ もっとも、やっと親元から巣立ったようなヒナにやられることなんてありえないけどな」

「は、勝負？ それは本当に勝負になるんですかね？ おれには地面で泣き崩れる軟派男の姿しか見えませんよ」

「ああ、なるさ。もちろんやるんだらう？」

「いいでしょう、受けて立ちます」

互いに互いを口汚く罵りながら、ルシエは自身が久しぶりに怒りを感じているのを自覚し、そしてまたすぐに冷静になる。シャーニッドの顔がニヤリと歪むのを見て気付く。

ああ、まんまとはめられた、と。

第十話 狩るもの、狩られるもの

勝負をすることは一向に構わない。

構わないのだけれど、それが自分からむざむざ挑発に乗ったこともそうだが、あまり目立つのはよろしくない。

流れてくる噂の中には（といっても都市警察の同僚から聞いた話だが）、小隊員入りを断るルシエをあまり快く思わない者も多いらしい。それはそれで、ルシエがフェリに言った贅沢な悩みの類に入るのだから、ルシエとしても理解できる。

そんな自分が、小隊員と事を構えるというのはやはり少々問題があった、とそのときの自分のことを振りかえり自省してみる。

「こつなつた以上はどうにもならないのだけれどね」

誰に咳くでもなく、ここ三日間通い続けた街中を散歩中にそう零す。

思い出すのはシャーニッドと会話したときのこと。

十一

すぐに自分が感情のままに勝負を受けてしまったことに気付いたが、それを取りやめられる雰囲気でもなければ、自分から威勢よく毒を吐いていたのにひっこみがつかなくなっていたということもあ

る。

「ああ、もちろん、勝負に負けたらおまえさんは第十小队に入隊。そういうことでいいな?」

「何を……こちらにメリットがない」

何を交渉事に出してくるか、それはわかっていたことでもある。もちろん、毒を吐いていたのはそれ相応に自身の今の実力に自信があるからだ。だから負ける気など最初からないのだが、やはり勝負をするメリットがあまりにない。さらなる挑発を受ける前に正論で返しておく。

「嫌がらせのようにあとをつけることはやめてやるさ」

「それに関しては、訴えられても文句は言えない立場なんですけどね、あなたは」

「なあに、ちよつと行きすぎた勧誘行為ということで、生徒会長は理解を示してくれるさ」

いけしゃあしゃあと何を申すか。この分ではルシエと生徒会長に関わりがあることを掴んでいるのかもしれない。別段、それに問題があるわけではないが、広く知れ渡るのはまずいだろう。裏取引が持ちかけられていたのを誰かに知られれば、他の小隊員はあまりよく思わないだろうし。叩かれて埃が出てしまつ前に交渉を済ませようと頭を切り替える。

「……まあいいでしょう。それで勝負の内容は何ですか? まさか賭博とか言い出しませんかよ?」

勝負をする、そうは言ったが“何で”勝負するかまでは言っていなかった。それがルシエにとっての不安要素でもある。普通に考え

たら武芸であるうが、運の要素が強い勝負ごとだった場合や、イカサマができる賭博などだったらルシエに勝ち目は薄い。

それを聞いてシャーニッドはあからさまにため息をついて見せる。その仕草がいちいち様になっているのは彼の持つ軽い雰囲気故にだろうか。

「まさか、仮にも小隊員への勧誘だぜ？　いくらなんでもそれは舐めすぎだ」

「では、もうすでに考えてあるんですね？」

「もちろん」

少しだけ間を溜めて、シャーニッドは口の端を釣り上げる。

「狩られるものと、狩るものの戦いだ」

「……格好付けずに端的に言っていただければありたがいのですが」「はあ、そこは雰囲気で察しろよ」

本当に呆れたようにため息をつかれる。そう言われてもどう察しると言うのか。

「鬼ごっこでもするんですか？　この年齢になってそれはいささか恥ずかしいのですけど」

「鬼ごっこね、まあ似たようなもんだな。　レストレーション」

片目をつぶりながら、その手に復元されたリチウム・ダイト軽金鍊金鋼を見る。

「狙撃銃、なるほど」

シャーニッドは生粋の狙撃手、というところらしい。というところは、先ほどの言葉の意味は。

「オレが狩る側、おまえが狩られる側になった鬼ごっこ、単純な話だ。制限時間は三日後の陽が落ちるまで。寝てる時以外はずっとオレはおまえを狙撃しようとする。おまえはそれをただ避け続けるだけでいい。有効な攻撃が一発でも当たった時はオレの勝ち」

「実に一方的なルールなんですけど……」

そつだ。三日間もこの男に付き合つてやらねばならないし、通常の授業だつてあるのだ。授業中に万が一撃たれたら大騒ぎになるだろうに。

「こつちはおまえさんの実力を認めている。同じ土俵で戦ったら、悪いが狙撃手であるオレはおまえさんに負ける可能性がでちまうからな」

「憎らしいくらいに自信がありますね」

少なくとも、狙撃ならば絶対に勝てると言いきつたようなものだ。ならば、その自信を粉々に打ち砕くのも一興か。

「で、こちらは反撃してもいいんですか？」

手の上で器用に銃を扱う姿を見て、なかなかの練度があることはわかる。仮にも小隊員だ、そつでなくてはこちらもやりがいが無いと言つもの。

「もちろん、それでオレを三日間行動不能にしてもいいぜ。やれれば、だけどな」

そして、今現在三日目だ。少しだけルシエの顔はやつれたように見える。

「ああ、あの得意げに笑った最後の顔を思い切りぶん殴りたい……」

三日間、三日間だ。

それは貴重な学園生活を無に帰すくらいにはストレスを溜めた。四六時中気を張っていなければいけないし、シャーニッドの劉の流れを読み取って知覚できる範囲にいればいいが、まるっきりその気配はない。

本当に実力を隠していたのか、それとも周りにいないのか。

周りにはいないとたかをくくってやられましたでは格好がつかないということもあり、対汚染獣くらのつもりで気を張り続けているのだが、普段の生活と兼ねながらということもあり、ずっと汚染獣と戦い続けるのはまた違ったストレスが溜まってしまふ。

「まさに負の連鎖……」

フェリはルシエのぴりぴりとした雰囲気にかかるところがあったようだが、結局聞いてくることはなかった。もっとも、ルシエとて自身が買った“喧嘩”に他人を巻き込む気など毛頭ないため、細心の注意を払い今日まで生活したのだ。

日没まであと三十分ほどと言ったところか。

夕陽が紅を纏い、暗い闇が堕ち始める黄昏時。

ルシエは意識を切り替える。

どうやら、彼が狙撃手と言う点は本物だと認めねばならないだろう。

殺戮の完成度は測れないが、獲物を弱らせ一撃で仕留めようと言うその姿勢。実際、今まで牽制での一撃も何もない。これは人から見れば油断を誘うような状況ではあるが、ルシエのような者には逆に重圧がかかる。それすらも対話の中で読み切っていた、というのは少々彼のことを買い被りすぎだろうか。

もっとも、乱射して当てに来たら程度が知れている。狙撃とは一撃で相手の息の根を止めることに本質があるのだ。基本的に二射目はない。

それが対人ならば、の話ではあるが。

ルシエは少しだけ街から外れた道に入っていく。

残り時間から考えて、シャーニッドが動き出すのはそろそろであるはず。直前まで動かないと言うのならそれはそれでいいのだが、いい加減張りつめた緊張と戦うことにも飽きてきたということもある。

ルシエの下準備は整ったのだから。

(集中しろ)

極限まで意識を集中し、気配を探る。

何の為に授業後に何も買うこともなく、わざわざ街に繰り出し続けたのか。

別に人ごみにまぎれれば大丈夫、などといった素人考えがあったわけではない。シャーニッドがそう思っていたのならば いや、

彼は気付いているかもしれない。

ルシエが何の為に街の地形を把握していたのか。

今までも十分すぎるほど周囲の様子を警戒していたが、今回は違う。探るのではなく、流れを読み取る。

人の流れ、空気の流れ、そして剄の流れ。

多すぎる人々の群れの中から、わずかな乱れを感じとろうとルシエは意識を外に飛ばしていく。

違和感

心の中で準備をする。

足しげなく通い続けたこの三日間の中で最高の乱れ。

獲物をスコープ越しに見つめ続ける狙撃手の姿を幻視する。

息を殺し、剄を殺し、獲物が見せる最大の間を窺っている。

すぐにでも撃ちとりたい、今が好機か？

いや、まだだ。

そんな葛藤を繰り返す狙撃手がいることを認識する。

「っ！ 見つけた」

ルシエは獰猛な笑みを浮かべる。浮かべて、迷いなく地面を蹴って建物の屋上へ。更にその動きを止めることなく屋根を蹴り、建物から建物へと飛び移る。

ルール上、ルシエがシャーニッドを倒すメリットはあまりにない。すでに陽が没しようと言うこのタイミングでわざわざ射線上に姿を晒している、それは一重に一発くらい殴らないと気が済まないという表れでもあり、逃げるという選択肢が頭からすっぽりと抜け落ち

てしまっているからでもある。

勝負を受ける前は穩便に済ませたいが、いざ勝負になれば逃げる
と言つ選択肢はルシエにはありえない。

「さあ、こつからが勝負ですよ、シャーニッド先輩！」

吠えるようにルシエが叫ぶのと同じ、三度目の跳躍を終えまさに
着地しようというタイミングで一射目、予測よりもずれた地点から
の狙撃に着地後に前転することで回避。

「狙撃地点を変えたか？ だけど」

だけど、甘い。例え地の利が向こうにあつたとしても一射目のア
ドバンテージ、どこから来るのかわからない、その点を活かしてト
ドメとならなかつたのは痛手だ。ルシエに気付かれぬようにわずか
に場所を変えたのは予想外だったが、しかし今で場所は割れた。

東側、十一棟先の廃屋屋上の裏。

猛然と、前面から来る狙撃は恐れずに、疾風の如く攻めに走る。

剽が滾る。久しぶりの剽の使用に身体が驚くほど軽い。

跳躍。閑散とした通りを大きく飛び越え、着地しようというまさ
にそのときだった。

「うおー！」

世界が揺れる。足元がぶれる。

一瞬、我が身に起こつたことが認識できずに、神経の伝達を確認
するが異常はない。

原因は耳をつんざくような爆発音。違つ、倒壊に伴つ崩壊の爆音。
崩れる足もとに足場を見いだせない。

落ちる。身体が重力に従つて。

建設科実習区画、そう呼ばれる地区。そこには建築科が建てたという芸術的であつたり、理想とされる設計図で組み立てられた建物が存在するが、人気のない建物は廃屋として処理される定めとなっている。そんな事実をルシエは知らない。そしてその建物が、シャーニツドの正確な射撃によって脆くなった支柱に弾丸が叩きこまれたということも。ルシエは唐突に起こった倒壊に、別の要因が絡んでいるかもしれないと一瞬だけシャーニツドから意識を外してしまう。

『これでトドメだ』

冷めきつた声が聞こえた気がする。

わずかな自由落下の時間で体勢を整えようと足掻く。

獲物を狙い続けた狩人の剽がルシエを捕え、引き金をひいた。

音が消えた。

シャーニツドはゆっくりと息を吐き、剽によって生まれた熱を剽の余波と共に体外に逃がす。

「当たった、確実だ」

自身の腕を過信してのものではない。

銃身から撃ちだされた剽を纏った弾丸は、確かにルシエを貫いたはずだ。

この三日間、シャーニツドは必ずしもルシエを付け狙っていたわけではない。行動の把握には努めたが、決して近づかず動向を探るだけに留めていた。このときに気をつけたのが絶対に敵意、殺意、

その他の興味をルシエに向けないこと。

もちろん、そうはいつでも限界はある。何度か気付かれていそうな場面もあったが、殺戮は完璧だったはず。獲物の動向はきちんと探り続けた。

街に繰り出したときは絶好的だとも考えた。だが、ルシエには“何か”があり、一筋縄ではいかないと直感していた。狙撃手の勘そういった何かが働いたのか、慎重派な考えが強く出たのかはわからないが、三日間じっくり時間を掛け、確実に仕留めるためのルートも考えだした。

それが今の一連の流れ。

残り時間で焦ったように見せかけ、わざわざ気配を漏らし、すぐに殺戮。位置を変えて一射目を。この時点で彼はシャーニッドが焦っているとは勘違いしたようだった。もつとも、それにすら気付かないようならそのまま一射目で仕留めていたであろう。

次いで、二射目。こちらの位置を正確に把握したらしいルシエが、向かって来る進行方向の建物の中で、何件か目をつけていたうちの一つ。そこを狙い撃ち足場を崩す。

最後は単純にその最大の間隙をついての狙撃。しかし、この最後の二射はほとんど連続で行われた。その射撃の正確な腕前、それはシャーニッドの実力がなければ成功しなかったであろう。

陽が没した。

倒壊といっても、それほど酷いものではない。並みの武者でも場合によっては大けがをする程度で済むだろう。

シャーニッドは意気揚々とそこへ向かう。

現場へはすぐに到着した。

やはり、というべきか予想した通り建物の倒壊はそれほど酷いものではない。四階建てが二階建てに変わったような、とにかく足場だけが崩れた状態。崩れた二階には三階と四階分の木材が山のように積み重なっており、まさにその山の中心にシャーニッドの弾丸は

叩きこまれたのだ。

「おい、生きてるか、ルーキー」

いつものように軽い調子で声を掛ける。

気絶したか、もしくはちょっとまづいことになっているのか。後者だったら笑えないが、恐らくは気絶したのだろうと、シャーニッドはあたりをつける。

あれだけ大口叩いておいて情けない、とは言わない。シャーニッドは小さく肩をすくめて、木材に埋もれているであろう後輩を助けたそうと向かいの建物から跳躍し着地した。

「……ちょっと派手にやりすぎたかね」

そう呟いて、シャーニッドが大きめの木材に手を掛けた瞬間。

「ちょっとどころでは、済まないでしょう」

背中を刺し貫かれたか、シャーニッドは一瞬本気でそう思った。実際は向けられていたルシエの剱の大きさ、それに込められた殺気、首筋に当てられた錬金鋼ダイトの感触だった。

「……わお、御無事で何より」

ハンズアップ。シャーニッドに敵意がないことをアピールし、溜まった息を吐きだす。

シャーニッドの銃に込められていたのは麻痺弾。その一撃を受けてなお、ルシエが正常に動き殺到まで使ったと見せたと云う事実。それはつまり、シャーニッドの敗北を示していた。

弾丸が迫っている、そんなことは歯牙にもかけなかった。

ただ本能のままに向かつて来る力　剄に反応して錬金鋼ダイトを復元し、胸元に引き寄せた。

感じたのは鈍い金属音と重たい衝撃。十分な受け身を取れずに崩れた木材の中に突撃したわけだが、シャーニツドの一撃が有効なもの、つまりルシエの身体に触れたわけではなかった。

それがシャーニツドの仕掛けた最初で最後の勝負であると認識し、あとはずつと殺剄で現場に待ち伏せし、明らかにそこに埋まっているであろうと予想したシャーニツドの背後を取った、そういう顛末だった。

「結局、自分の土俵で戦った上に、こんな真似までして勝利を拾えないとは……、なんとも情けねえ話だ」

軽い口調であるもののシャーニツドが本当にそう思っていると言うことは伝わってきた。

「……ですが、おれも見直しましたよ。　バカにした発言をしたことは謝ります」

実際、ルシエは一瞬敗北した可能性を考えた。それほどまでに追いつめられたのだ、例えそれがシャーニツドに有利な条件であったとしても、ルシエは自分が負けるとは思っていなかったのだからその事実に感心したし、感謝もする。

学生　小隊員でもこれほどまでに自分を追いつめる、追い詰められるくらいにしかルシエの実力は戻っていないと言うことを気付

かせてくれたことに。

「そうかい、ありがとよ。　こうまでしてやられたってんなら、オレは負けを認めるしかねえ。　それにだな、色々挑発するようなことを言ったり、わざと気付かれるような殺戮をしたりしたのも全部この勝負の為だったんだ。　悪かったな」

「実はそれが一番気になっていたんですが、どうして新入生のひよっこにそこまでする必要が？」

仮にも小隊員の一人が、そこまで作戦を練るくらいに自分の実力が過大にうわさで流れているのだろうか。　それとも。

「おまえさんが考えるような噂やなんかじゃないさ。　単純に、一筋縄じゃいかない、そう判断しただけさ」

「こうまでして、小隊に引き入れたいと？」

「そうだ、それだけオレ達も本気だったこと。　考えが変わったらいつでも入隊に来い」

不意に見せたその瞳は、本気だった。

ゴルネオといい、シャーニッドといい、小隊員になるものはこうも真っ直ぐな真剣な表情をするものなのかと、それが今のルシエには眩しく映る。

と、そんな会話が終わると周囲がにわかに騒がしくなった。

「まずい、都市警察が来るぞ」

「えっ!？」

「いくら廃屋決定の建物でも壊せば立派な犯罪だからな」

「ええっ!？　許可とか、そういうのは一切？」

「取ってるわけがない!」

シャーニッドはカラカラと笑う。ルシエはそれに辟易としながら肩を落とし、しかし悪くない気分です。二人同時に活剏を奔らせその場から逃げだした。

後に、この区画での都市伝説が増えたとか、増えないとか

第十話 狩るもの、狩られるもの（後書き）

注意事項として

建築家実習区画の廃屋云々ですが、作者の記憶違いの可能性が
あります。ですが、当作品ではこのような感じ（曖昧ですが）で進
めて行きますのでご了承ください。

第十一話　それは知らないところから

他人に言えないような秘密など、だれしもが持っている。

それが語れる内容か、否か。それは秘密を持つ者だけが決められるものだ。

そして見る者が違えば、知る秘密も異なる。

他人から見た秘密と、己から見た秘密の違い。

例えその認識に食い違いがあろうとも、公にされた秘密は、つまるところただの事実でしかないのだ。

外縁部に立つ一人の少女。

風に揺れるたびに銀色をまき散らす長い髪は、比喻なしに輝いている。

膨大な念威。

それは彼女が行使する念威操者としての力が強大であることを表す。

「……馬鹿ですね」

その手に握られた重晶鍊金鋼パラライトダイトが淡い花卉のような念威端子を飛ばしている。

フェリ・ロスフェリは念威を行使することで、とある事態をずっと見つめていた。

ルシエルディア・ラグナイトルシエル、彼が今何に巻き込まれていたのか、ということ。

彼から頼まれた時は、正直に言って念威など使つてなるものかと思つたが、こうして結局自分の為に使つている。そのことに自己嫌

悪しながら、だけどこの力を切り捨てることなどできはしない。

念威を無性に使いたくなる、そういう日がある。

そんな日は今のよう都市内に限らず、外の世界すらも知覚できるくらいに念威を使う。

そして、そんな中でどんばちやってる武芸者が嫌でも目につく

それはフェリの中で建前ではあるのだが。

そんな彼に呟いた一言。

目立ちたくないだの、小隊に入隊したくないだの、そんな消極的な姿勢のわりに自分の武芸者としての本質、戦いたいと言う欲求を隠し切れていない。ルシエの考えはどうであれ、フェリは少なくともルシエのことをそう見ていた。

おまけに、彼は前の都市グレンダンで最高峰の実力を持つ者たちのその一歩手前、天剣授受者といわれる存在に近い者だったと言う。それは彼女の兄であるカリアンが保証していた為に信じるに足る材料だ。

信じるに足る情報ではあるが、だがルシエはフェリに一言もそのことを告げることはない。

最初は自分と同じような境遇なのだろうかと思った。だけどそれが少し違うものだと気がついた時、それを知りたいとフェリは思い始めていた。

思っているだけで、問いかけるようなことはできないのだけれど。

「なんだかムカつきます」

それは広大な大地を感じとることができるといふ開放感を邪魔されたからか、それとも別の要因か。

誰にも聞こえないくらい小声で、フェリの言葉は虚空に消えた。

ルシエがツエルニに入学してから、早いもので既に三カ月が経った。

何をしていたか、そう言われると学生らしく勉学に励んでいたし、武芸に磨きをかけてもいた。

小隊員への勧誘は一時の勧誘が嘘だったかのように波も収まり、ルシエのところまでやって来るものはほとんどいなくなった。どうやらこの隊もルシエを勧誘するための労力を使うよりは、自身の隊の強化をした方がいいと判断したらしい。実際のところ、第五小队と第十小队が動いたおかげで牽制し合っているような均衡状態になったのだが、そのことをルシエは知らない。

その勧誘がないという懸念が消えたおかげか、ルシエはルシエで何の憂いもなく武芸に励むことができるようになったわけだからありがたい。

「というわけで、最近は本当に平和なんだよ」

「なんですかその前振りは。まるでトラブルでも起こって欲しいような口ぶりですね」

今日も今日とて、フェリと中身のない会話を続ける。夏期帯に入ったこともあり、歩いているだけで汗が浮いてくる。街を歩く学生の姿も薄着の者たちが増えてきた。

「いや、だって最初の頃の怒涛のような忙しさが嘘だったんじゃないかと最近錯覚し始めているくらいだよ？」

「要するに、ちやほやされたいんですね」

「そういうわけじゃない。相変わらず口が悪いな」

「どこかの誰かさんほどではないでしょうけどね」

放課後、フェリと行動を共にすることが多い。それは多分にクラスで友達が少ないと言うこともある。あの模擬格闘戦での熱気も今では冷めて、それでもなぜかルシエを敬遠している節があるのだ。フェリとつるんでいるために話しかけづらいということも可能性としては充分考えられることではあるが、どこか遠い存在にみられている感は否めない。

そんなわけで二人で特に何をすることもなく、フェリはフェリで家に帰るのは遅い方がいいという性分で、それに付き合っている結果でもある。カリアンとなるべく接触することを避けたいと言うことはわかるのだが、だったら独り暮らしをした方がフェリの探す道の為にはいいんじゃないかと思うこともあるが、それは自分で言いたさなくてはならないことのような気がしてルシエは特に何もいかなかった。

基本的に、他人のことを指摘するようなことは避けているということでもある。

「そういえば、もうすぐ学内対抗試合が始まりますね」

唐突に、フェリがそんなことを言い出したことにルシエは一瞬疑問に思ったが、いつものことかと思いなおす。

「そうだな、どの小隊が勝つかっていうのは見物だけど、おれは個人的には第五小隊か、第十小隊に勝って欲しいところだね」

「……あなたが入れ込む小隊なんてあったんですね。もしかしてそのどちらかに入隊を考えているのですか？」

そういわれてルシエは苦笑を零す。特にそういつつもりがあつたわけではないと身振りを交えて説明する。

「何度も言ったように、おれは小隊に入る気はないよ。ただ個人的な縁から応援したいって考えただけ」

「なら、あなたは何のために武芸を磨いているんですか？ 普通の学生なら、小隊に入ってエリートとなることを望むのに、あなたが目指すのは何なんですか？」

その言葉に、なぜだかいつもの軽い話からどんどんルシエの核心をつくような、そんな質問に変わってきた気がするのはルシエの勘違いではないはず。それを敏感に感じ取って、フェリの表情を見るが、どこか無表情の中に苛立ちのような心配のような、微妙な感情が見え隠れしていることを感じとる。

長い、そう言えるほどではないけど、どことなく出会った時よりも感情の端々を感じとれるようになったことを理解する。もちろん、今はそれを喜んでいる場合ではないのだけど。

だからその問いにルシエは笑顔をつくって答える。うまく笑えている自信はない、苦い顔をしているかもしれない、そう思いながらも言葉を返す。

「武芸者である以上、武芸を磨くのは当たり前だと思っけど」

「それは建前であつて本音ではないのでしょうか？」

その言葉に、棘が含まれていることに気づく。どうしたのだろうかと思案する間もない。ここで黙ってしまつてはいけないと考える。

「どうかな、わからないよ。ただおれは武芸が好きだけなんじゃないかな」

「……そうですか」

それは嘘ではない。ルシエが武芸を嫌いになったというのならば、今更武芸者に戻ろうなどという考えは初めからなかっただろう。

フェリは一瞬だけ言葉を溜めるが、ルシエの言葉に本音が混じっていることを感じとったからか、それ以上の追及をすることはなかった。

若干の気不味い沈黙。話題を変えるように、フェリが言葉を発する。

「そういえば、あなたに勝負を申し込んできた彼、第五小隊に引き抜かれましたよ」

「ガレル・エリックが？」

その名前を聞いて、ルシエは驚いた。彼とのつながりは現在皆無で、ときおりこちらに向ける視線は今もまだ敵意が拭えないままだ。確かに、彼は他の武芸科生徒に比べて幾分実力は抜けている。小隊に選ばれても不思議はないだろう。おそらく、ルシエのせいでの実力がやや霞んでしまう印象を与えたのも原因で声が掛からなかったということもあるかもしれない。

「ええ、なんでも次の対抗試合にも出場するとか」

フェリの言葉を聞きながら、ルシエは別の事を考える。

「よりによって第五小隊、か……」

まさかルシエの考える懸念がそうそう当たるわけもないが、だが考えられる可能性としてはありえないことでもない、そう自分に言い聞かせる。

呟いて、ふと店のディスプレイに置かれたテレビが目に入る。

明日、第五小隊と第十小隊の対抗試合開始と銘打たれたタイトルが流れていた。

十十十

対抗試合といわれる小隊同士の争い。

その戦いは拮抗していた。

「どっちもやるね、でも第五小隊の方が押ししてる感じかな？」

「……わたしは特に興味ありませんが、強いて言うならあなたの言う通りなのでしょう」

二人、いつものようにぶらぶらするだけでなく、ルシエの方からフェリを誘い喫茶店のテレビを通して試合を観戦していた。

ちゃっかりデザートの甘味をおごらされたのだが、ルシエはまったく気にしてはいなかった。それは決して彼女に貢いでいるだとかそういうことではなく、昨日の茶を濁してしまったお詫び、そう勝手に考えていた。

事実、おいしそうにスプーンを口に運ぶ姿は普段の伶俐な姿からあまりにも想像しがたい。ルシエがじっと見つめているのに気付いてか、少しだけ拗ねたような顔になる。

「……あげませんよ？」

「あはは、だいじょうぶだから」

手を振ってみせて否定し、ルシエはそれから画面に集中する。

対抗試合は防御側と攻撃側という区分で行われる。都市対抗戦と同様に、都市のシンボルであるフラッグを破壊された場合に敗北となるという条件を元に、対抗試合はそのフラッグを防御する側と、破壊する攻撃側に分かれるのだ。更に条件を加え、攻撃側は隊長が戦闘不能、防御側は小隊員全員が行動不能になるか、制限時間までフラッグを守りきるかで決着がつく仕様になっている。

現状、防御側の第五小隊が堅実な守りを展開し、第十小隊の突撃を防いでいる。

テレビに映るのは第五小隊長であるゴルネオ・ルツケンスと、紅い髪が特徴的なシャンテ・ライテ。それに第十小隊の紅一点と言われる選手を筆頭に、禿頭の武芸科生徒がそれをフォローすることで互角に渡り合っている。

そこにもう一人援護として新しく第五小隊に入隊したガレル・エリック。彼とゴルネオの流派はルツケンスによる格闘術だ。お互いに合わせる時間は少なかったろうが、技の特徴を二人が良く掴んでいるために連携能力は高い。

数的有利によるものも大きいが、予想以上の連携によって防御側を突破できずに第十小隊は攻めあぐねていた。

「第五小隊が守り切りますね」

ルシエはフェリの言葉に頷かない。第十小隊の特徴はその一点突破にあるという。主力が中央を駆け抜け、瓦解した間にフラッグを討ち取る。ゴルネオもその辺りはよく理解しているのか、中央を中心に厚く守りを展開させるくらいだ、気付いていてもおかしくはない。

もう一人の突破要因である狙撃手の存在を探しているはずだ。

厚く守り、鉄壁の如く第十小隊に立ち塞がる第五小隊。このままだけいばフェリの言うとおりの展開になるのだから、次の瞬間、事態は大きく動く。

第十小隊の紅一点の体勢が、ゴルネオによって崩された。

瞬間、見計らったかのように気合いの声を上げながら、今まで守りに徹していたガレルが攻勢に出る。

その拳が彼女の胸を貫こうと迫った瞬間、一筋の弾丸がガレルの側頭部に直撃した。

「やっと出て来たか」

「第十小隊のエース三人組の一人、シャーニッド・エリプトンですね」

彼の放った弾丸によってガレルは意識を刈り取られる。そのときから形勢は逆転したといっても過言ではなかった。今まで数の有利も働いていた第五小隊の中央の守りは瓦解し、見えない敵と目の前の敵によって翻弄される。

数分後、試合の終了を告げるブザーが鳴り響く。

勝利を勝ち取ったのは第十小隊、シャーニッドの隊だった。

白く、清潔な病室。頭に包帯を巻かれ、ベッドで休んでいるのはガレル・エリックだった。その表情は敗北を知ってから、魂が抜け落ちたかのように脱力している。

「その気を落とすな、初陣にしてはよくやったほうだ」

「そう、でしょうか」

ベッドの傍らに居るのはゴルネオとシャンテの二人だ。労う声に偽りはない。

ほんの一、二週間ほどまえ、ガレルを小隊に誘ったのは兄弟子でもあるゴルネオからだ。ゴルネオは、ガレルのことを知っていて今まで誘わなかったのは一重にルシエの入隊を心待ちにしていたという理由があることを勧誘された時点でガレルは知らない。

しかしガレルとしては、小隊員になるばかりか、いきなり初陣を任せられていて期待にこたえられずに、この様であった自分の無力さに歯噛みしてしまう。

あくまで自分に期待がかかっていたのだと、思ってしまう。

「お前一人の力でどうこうなる話でもない。これは小隊対抗戦なのだから」

それはそうだ、ガレルとてそう思う。だが、負けの要因を作ってしまったのは自分であると言うことが悔しいのだ。

「ふ、悔しければ己を磨け。おまえの学年にはちょうどいい目標もいることだしな」

「……目標？」

思わず、悔しさを忘れさせるような一言をゴルネオが漏らしたことでガレルは不審げな声を出してしまう。

目標。ガレルの学年で今のところ突出している武芸科生徒は大体把握しているが、どれもガレルを大きく超えるような存在などいない。いないゆえにガレルの脳裏にはある一人の姿しか浮かばない。そしてそれに気付いた瞬間、表情の抜け落ちたガレルの顔に怒りが表れる。

「ラグナイトのようになれ、というわけではないが」

「俺に、俺にあんなやつを目標にしるというのですか！　いくら隊長だとしてもそれは言いすぎでしょう！！」

「……っ！」

「な、いきなりなんなんだ、おまえ！」

あまりの剣幕にゴルネオは言葉を失くし、代わりにシャンテがガレルに牙を剥いて怒鳴る。先ほどまでであった敗北に浸る弱々しさはなく、ただ怒りに声を上げるガレルの姿がそこにはあった。

最大の侮辱だ、ガレルはそうも思っていた。

「確かにあいつの武芸はすごい。　とてもあんなことになってからの武芸とは思えませんが、だからといって俺はあいつの行動が許せるわけじゃない！」

「もしそれが模擬格闘戦のことを言っているならば、おまえのこれからの評価を考え直すぞ？」

ガレルの悲痛な叫びとも取れる発言に、ゴルネオは尋ねる。

ゴルネオとて、いつまでも年下の怒りに呑まれていくほど柔じゃない。視線を先ほどまでの労わるものから、鋭く相手を委縮させるようなものに変えてガレルに問う。ゴルネオはその叫びを嫉妬や憎しみから来るものだと思知したからであって、そしてその感情はおよそ間違いないが、決定的に少しだけ違っている。

逆に、ガレルはその雰囲気で我に返る。そして、二人の間で認識

の違いがあることに気づく。

「もしかして……隊長は何も知らないんですか？ あいつの、グレンドンでの事を」

「……一体、何の話だ？」

突然の故郷の話に、一瞬だけガレルが話をすり替えようとしているのかと疑う。だが、彼の瞳は揺れていた。それは良心の呵責か、それともゴルネオにはわからない迷いの類か。

何か、ルシエがゴルネオの申し出を拒否した理由が隠されていると、そう判断する。

「話してみる、ラグナイトの事を」

深く、重い声が室内に響いて消えていく。

ガレルは、それでも少しだけ躊躇うような素振りを見せたが、今まで溜めこんでいたものを吐きだすようにゴルネオにすべてを話した。

話し終える頃には太陽は落ち、暗い帳が辺りを覆っていた。

第十二話　それは不運か幸運か

昔、父に怒られて一人落ち込むルシエに、兄はこんなことを言っていたことがある。

『ルシエは生きるのに不器用な性格をしてるよ』

そういつて笑う顔に向かって、思い切り反抗して、背伸びして見せたこともあった。そんな兄に『生き汚いくらいに世渡りが上手だと皮肉ったこともある。だけどそれが本心でもあった。兄は決して誰かの不快を買うような人じゃなかった。』

だが、そういうたびに兄はどこかさびしそくに笑っていた。笑いながらルシエの頭を撫でてこう言うのだ。

『だけど、そんな不器用なところが羨ましいよ』

ルシエにはそのときどうして兄がそんなことを言うのかわからなかった。

不器用よりは器用な方がマシなんじゃないかって、いつも思った。

ルシエは今でもそう、思っている。

「あと三カ月、そんなに待たないと一年生は新しいダイト錬金鋼を持ってないんだよなあ」

いつもの日課である外縁部での鍛錬を終える。朝日が綺麗に見え

る時刻に身体を横たえてそう一人愚痴るのはルシエ。癖の残る黒髪は、わずかに流れる汗によって湿り気を帯び、武芸に必要な分だけついたしなやかな筋肉が道着を内側から押し上げている。

いつまでも支給用の黒鋼クロムタイツ錬金鋼を扱わなければいけないことと、打棒では本来の武器の代替としてはやはり不服であると感じ始めたからである。

「といつても、新しい錬金鋼タイツを新調するお金もないから、愚痴つても仕方ないんだけど……」

ぼりぼりと頭を掻きながら、上半身を起こす。

外縁部を駆けめぐる風が、汗で湿った身体に浸透していく。時期ももう夏期帯だ、朝とはいえ暑いものは暑い。それが運動後ならなおさらである。

手早く片付けを済ますと、ルシエは家路へと歩き出した。

この三カ月あまりの時間で、打棒型錬金鋼タイツにもある程度慣れた。剽の流れも付け焼刃にしては申し分ない。あとはこれが本来の武器を扱った時の身体の動きに近い型を繰り返し返せば、それは必然的に本来の武器の動きを思い出すことになる。だが、それはやはり打棒での代用でしかない。

要はないものねだりを考えているだけなのだけれど、金策の必要性を認識し、ため息が零れる。

頭の片隅にちらつく兄からの贈り物も、三カ月経った今ですら一度も使わずに仕舞いこんだままだ。

たぶん、使わない理由はわかっていて、使えない自分がいる。それだけの話だ。

「ん……？」

すでに見慣れた家のポストに、簡素な手紙が入っている。ルシエは少しだけ珍しがりながらも、それを無造作に取って自分の部屋へと向かった。

家との縁を切られた自分宛ての手紙が、都市間を渡り歩いたものであるはずはない。兄なら送ってくることもあるかもしれないが、そんな余裕は時間的にも立場的にもなかなかないだろう。となればそれは当然、ツエル二内での手紙であり、こんな手段をわざわざ取るような相手などほとんど限られていた。

差出人の名前を見て、ルシエはどこか胸騒ぎを感じていた。

十十十

おかしい。何かがいつもと違う。フェリは自身の脳内でそう結論付ける。

座学、一般教養の授業は夏期帯独特の気だるさと共に、何事もなかったかのように過ぎていった。現在、武芸科生徒に欠かせない基礎鍛錬の実践授業の最中。

隣で、いつもの柔らかさを欠いた、強張った表情をしたルシエをフェリは訝しげに見ていた。ルシエが顔を難しくさせるような武芸者など、他クラスが混じった授業であるとはいえ、いるとは考えにくい。

「何か、あつたんですか？」

フェリは思わずそう尋ねていた。なぜだかそんなルシエの表情に、居心地の悪さを感じたからかもしれない。

問われたルシエは一点を見つめたままだ。それは指導している上級生を見ているのではなく、ただ真つ直ぐ、何も無い体育館の壁を見つめているだけ。

「聞いていますか？」

「え、ああ、ごめん。……なんだっけ？」

ルシエの眉間に寄せられていた皺がわずかに緩み、いつもの表情に似せたような顔でフェリを見た。

それが作り笑顔であることは、フェリでなくともわかるであろう。

「なんだか調子が狂います。何かあったんですか？」

「何かって、特別なことは何も」

何も。そういうにはルシエは少々いつもと様子が違っていた。それが何なのか、どうしてそうなったのか、フェリはなぜだか無性に気になった。

普段から掴めない言動や行動にも慣れてきた。だが、それはルシエのほんの一面でしかない。フェリはその先が、まだ自分が見えていない部分に興味があったのかもしれない。

それはもしかしたら、ルシエの何か重大な部分に繋がっているのかもしれない。

そう考えたら、口から言葉が滑りだしていた。

「だったらどうしてそんな、そんな顔をしているのですか？」

「この顔は生まれつきだ」

「誤魔化さないでください」

「別に、誤魔化してなんて」

ない。尻すぼみになりながらも、ルシエはそれだけを口にする。そういつて、少し俯きながら困ったというように軽く笑って見せる。そのあとはいつものように軽口をたたきあうのだ。二人の間でお決まりのパターン。フェリも仕方なく本心を押し殺し、それに便乗することにする。

ああ、これは絶対に口を割らないだろう。フェリは、直感的にそう感じたからである。

短いようで、長い付き合いなのだ。ルシエがフェリに気を遣っていることくらい、嫌でもわかる。ならば、最初からいつもと違う振る舞いなんてしなければいいのにも思う。

重くなってしまった空気を軽くするように道化を演じる彼を見て、フェリは理不尽ながらそんなことを思う。

だが、そんな不器用さも悪くないと思う。その弱さを吐露してくれないことにだけ不満は募るのだけだ。

「何かあると言ってるようなものじゃないですか」

だからそう小さく呟いて、行き場のなくなった感情を思い切り脛に向かって蹴りだした。

シエはその扉の前に立ち、暗くなった表情を引き締める。

他の小隊員たちが練習を終えて出て行く時間を見計らってきたのだ。不都合はない。

これからどんな展開があるか、頭の中で何度もシミュレートした。もしかしたら、この学園都市にもいられなくなるかもしれないことも考えた。

「だけど、これは保留できうる問題じゃない」

言葉にすることで意思を確かめ、建物内に足を踏み入れる。一度だけ入ったことのある建物だが、機能的重視の簡単な造りであるために道に迷うようなこともない。

目的の部屋の前でノックをする。返事はない。

入室と同時に、威嚇とは言えないような剽の奔流を知覚する。

それは最早殺気と言える類のものだ。

「よく、来たな。 ラグナイト」

「……連絡つけるのにわざわざ手紙をいただいたんです。 来ない方が、失礼でしょう」

短く刈った髪が、怒りのあまりに逆立っているようにすら見える。ゴルネオ・ルッケンスがそこにいた。

「ルッケンス先輩、その剽は少々穏やかじゃありません。 話がしたいのでしょっ？」

冷静に、そう言葉を掛ける。あまり大事にしたいくないというのが本音だ。ルシエは錬金鋼ダイトを床に放り投げて、両手を挙げた。ゴルネオはすでに錬金鋼ダイトを復元させているのだ、話し合うのならばまずは戦闘態勢を解かせたい。

「……そうだな」

こちらの友好的な対応で、ゴルネオは剋を少しだけ緩めた。

ああ、とルシエは納得した。おそろくというか、案の定というか。ゴルネオは警戒しているのだ。もしかしたらルシエに口封じをされると思っただのかもしれない。

「昔の話、聞いたんですね？」

「……ああ、ガレル・エリック、あいつはグレンダン出身だし、何よりお前と同じ歳だ」

そこから先は言わなくてもわかる。いつかはこういうことが起こることもあるだろうとは思ったが、こんなにも早いとは。

いや、むしろ早い方が良かったのか。どうだろう、しかし今はそんなことを考えてもどうしようもないことだけは確かだ。

「俺は、あいつの話がまったくの嘘だとも思えない。だが、それがすべて真実なのかどうかはわからない。教えてくれ、グレンダ
ンで何をしたのかを」

一瞬だけ、本当に一瞬だけ、嘘をつこうかと思った。

今日一日、ずっと何度も考えた案の中の一つとして、そんな事実はなかったことにするシナリオもあった。

だが、そんな選択肢も、構えを解いて錬金鋼ダイトを床に落としたゴルネオを見て、どこかに消えていく。

その真摯にルシエを捉えている瞳に、嘘をつくことを躊躇ちゅうちゆわされた。

「……こんな話、誰かが得するような、そんな幸せな話なんかじゃ

ないんですけどね」

そう前置きして、ルシエは語りだす。

かつて、故郷と呼べるグレンダンでの話。

ルシエルディア・ラグナイトの過去を。

十一

天剣授受者、それはグレンダンでは有名な存在だ。

かつて、ルシエがその高みへとあと一歩と言うところで挫折した至高の存在。

グレンダンと言う都市において、最強と謳われる十二人。

すべては、天剣を掴み損ねたその瞬間から狂い始めていた。

ラグナイト家において、その頭首たる父の言葉は絶対のものだった。

幼いころから、武芸の才能を見いだされた兄弟は、当然の如く、当時残り一本だった天剣を掴むための英才教育を施された。

ルシエの兄は、しかしその道を自ら閉ざし、実力を持ちながら政治への道を歩み出す。

弟であるルシエにはその真意はわからなかった。わからなかったが、兄が武芸をしなくなっただけからは、自分が兄の代わりとなるように、天剣を取るためにひたすら武芸に打ち込み続けた。

結果は今、ルシエが天劍授受者でないことからわかるだろう。

それまでの父親からの厳しい鍛錬に耐え、それが必要なくなると自身で弛まぬ努力を続け、血反吐を吐くくらいに心血を注いだ武芸は、脆くも敗れた。

接戦だったとか、相手の辛勝だったとか、そんなことは露ほども関係がない。

敗れた、その事実だけがルシエに重くのしかかった。

周りから天劍たることを渴望され、ルシエに取り入ろうとした者たちは手のひらを返した。

曰く、エリートでありながら孤児に負ける軟弱者。

曰く、権力に溺れ、自身の実力を履き違えた愚か者。

そんな言葉が周りから零れているのを知っていた。

知っていながら、ルシエにはどうしようもなかった。どうしようもないと知りながら、それでも武芸をやめることはしなかった。

何をやっても無駄だと罵られながら、それでもひたすらに剄を通し、鍊金鋼ダイトを振るい続けた。その間にも、開いていく相手との実力に焦り、感情を失くしたように武芸だけはひたすらに、愚直なまでに続けた。

運命の日から一年が過ぎた頃だ。

ルシエに転機が訪れる。それはそれから更に一年後にもう一度天劍授受者の選定会が行われると言う事実だった。

どうやら、ヴォルフシュティンとなった天劍の年齢が低すぎると言うことで、武芸者の間で不満が爆発したらしい。それを諫める為に、優秀な武芸者は再び天劍と戦い、その栄誉を勝ち取るチャンスを得ることができた。

次は負けられない。

その思いだけがルシエの内で熱く燃えていた。
だが、それもすぐに行き場を失くす。

グレンダンを襲った名付きの老成体、それとの戦闘支援として天劍授受者の中でも最強と言われている鋼系のリントンス、サーヴォレイド卿の仕掛けた鋼系の罠に誘導するという任務のときだった。襲いかかる汚染獣の重圧に耐えながら、得物を振るい、剄をぶつけ、闘志を滾らせた。

数名の武芸者を失いながら、その場所まで誘導したときだった。目を覆うような莫大な剄の光。

圧倒、その一言に尽きる。

リントンスだけではない、ルツケンスの天劍授受者サヴァリス、それに片時も忘れることのないレイフォン・ヴォルフシュティン・アルセイフ。

その三人の同時攻撃に、あれほどルシエが苦戦し、命を捨てる覚悟で挑んだ汚染獣が、容易く引き裂かれ、あるいは砕かれ、あるいは切り刻まれるのを見て、その歴然とした差に絶望の淵に立たされた。

どうして彼が天劍足るか、それは年齢など関係ないのだ。

ふさわしいだけの實力を持ち、人間を、武芸者すらやめた“何か”が天劍でありうる。

そう悟った。

悟ったが故に、ルシエはすぐに手を模索した。

どうしても負けられなかった。厳しかった父はルシエに構うことをやめ、兄の政治手腕に期待を傾けたし、半ば放逐されたように分家の屋敷に押し込められ肩身の狭い思いをすることも嫌だった。

だから自分の居場所を、天劍という権威に縋ることにした。

幸い、武芸が盛んなこのグレンダンという都市で“その手”に困

ることはなかった。

裏では有名な話だ、前線で汚染獣と戦うルシエの耳にもその噂はすぐに届いた。

劉脈加速薬　　劉脈に異常脈動を起こさせ、劉や念威の発生量を爆発的に上昇させる。

簡単な話だ。ルシエはそこで生まれて初めて権力を、金を使った。子供の買物どころの騒ぎではない。副作用のこともよくわかっていた。

服用を続け、武芸大会では悉く優勝を勝ち取り、汚染獣戦では向かうもの敵なしの実力を手に入れた。

自分は生まれ変わった、そう感じた。あれほど無様なまでに時間を掛けて修練を積んでいた自分がバカらしく思えてしまう。それほど力を与えてくれた薬に、当時は心酔した。

溢れて止まらないほどの劉を容易く扱う技術は、過去の心血を注いで生み出した財産であるとも知らずに。

半年間だ。その間にルシエの名はただの敗北者から、天剣に最も近い、天剣すら凌ぐ武芸者へと変わった。

それは何事も起こらなかった故の幸運。そして何事も起きなかった故の不運とも言えた。

運命の転換点は、再び訪れた老成体との戦闘で起こった。

第十二話　それは不運か幸運か（後書き）

拙作をお読みいただきありがとうございます。

お気に入りか100件を超え、感激です。

こんな文章ですが、評価してください。あなたにも感謝を。

飽きられないように、続けていければいいと思っておりますので、
よろしく願います。

第十三話 生きる道

「どうして、そんなものを使う必要があった！ おまえの実力なら、いつかは天剣にすら届くものに成りえたのに！！」

ゴルネオの怒声が、二人だけの訓練室に反響してルシエの耳朵を打つ。

ルシエはそれに自嘲気味に笑って、無感情な言葉を、事実だけを返す。

「……それは可能性の一つでしかない。そうなり得ない可能性の方が多いくらいだったし、それだけ、おれにとつては時間がなかったんですよ」

老成体を相手に、天剣の準備が整うまでの時間稼ぎ。

そんな内容の任務だ。驚くべきことに、前回、あの膨大な剋を以てして仕留めたと思った汚染獣は生きており、再度襲撃してきたという事。

集められた武芸者はざつと三十名前後。全員が臨時で出動できるように体勢を整えていた為に、すぐに召集することができた。それでも都市全体からみれば大分少ないが、時間稼ぎということもあるし、何より大人数で出張ればそれだけ動きに制限が出てしまう。集まっていたのは次期天剣の座を賭けて戦うことになるであろう実力者たちばかりだった。

全員が全員、生き残ること、時間稼ぎを前提に戦う。各五名ほど

ずつに隊を組み、目標に当たる。

その中で、ルシエだけは違う思想を掲げながら戦いの場へと降り立った。

大地を覆う汚染物質が舞い飛ぶ中に、武芸者たちは一斉に身を躍らせる。

粘りつくようなエアフィルターを抜ける。

初めから戦闘態勢。誰も気を抜く者などいない。

地面に降り立つ、まさにその瞬間だ。

「あがあああああ」

「うあああああ」

念威の通信から耳をつんざくような悲鳴。それはヘルメット越しにすら聞こえるほどの絶叫だった。

地中から現れた汚染獣の存在。ルシエはそれを白金鍊金鋼フラチナタイトの片手剣を振ることで、重力にとらわれながら方向を変える。

そのまま汚染獣の頑強な牙に噛み砕かれる武芸者は二、三名ほど。腕利きの武芸者がその存在に気付かないほどに地中にいる存在の察知は難しい。そして、それを可能にするこの老成体の存在にほとんど全員が吞まれていた。

「怯むな！ 攻撃しろ！」

誰かがそう叫ぶ。それは自分だったかもわからない。ルシエは熱く滾る剽を本能のままに汚染獣にぶつける。

周りの武芸者もときに注意を引き、仲間が生んだ隙を悉く必滅の一撃を以て汚染獣の肉体を削って行く。

だが、そんな攻撃をもともしないのはこの汚染獣が老成体たる由縁だろうか。一向に汚染獣はダメージを受けた様子はない。削ら

れた肉片は爆散し、避けきれなかった武芸者は退避しようとしたところをその太くおぞましい触手によって絡め取られ捕食されていく。傷つけたと思つた箇所もすぐにその持前の再生能力で復元されてしまふのだ。

相手は老成体六期、名をベヒモト。それは、過去に一度グレンダンを襲撃し天剣から逃れ、かつ、半年前に三人の天剣のからも逃げのびた汚染獣。

力量は例え天剣の一步前かもしれない武芸者がたかだか三十名ではお話にならない。天剣か、そうでないかの間には天と地ほどの差をルシエは身にしみて感じていたのだから。

わずか数分の出来ごとだった。

たったそれだけで、数名の武芸者を失い、更に半数は疲れを感じ始めている。汚染獣と常に手慣れた戦いを繰り広げ、三日三晩戦い通せるほどの実力者たちが、だ。

それほどまでの脅威を目の当たりにしている。

決して抱いてはならない死への恐怖が、なまじ自身に誇りを持っている者たちの剄を鈍らせる。

その事実にも、天剣が仕留め損ねたということも頷ける。

ならば、この汚染獣を倒せば天剣授受者をも凌駕することになる。

そのIFを想像して、ルシエは獰猛な笑みを浮かべていた。

自分ならやれる、それは決して驕りではない、事実としての認識。

だがそれは、あの天剣三人の剄を以てして倒せなかった化物を自分ならやれると言う過信。

片手剣を元に戻し、新しく、腰に挿してあつたラグナイト家秘奥の鍊金鋼ダイトを復元する。

身体を巡る血液が沸騰するような錯覚。全身の神経が痺れ焼き切

れるかのような幻覚。

目の前で展開される戦いに見惚れているわけではない。

ただ、ルシエルディアの出せる全力の剄を練りあげる。

そこにはただ、栄光を運んできてくれた汚染獣しか目に映らない。

放たれた剄が、汚染獣に向かいながら多くの武芸者を呑みこむ。

それは世界から音が消えたと思わせるほどの絶大な一撃。

剄脈加速薬によって膨れ上がった剄は天剣にも匹敵する威力となつて汚染獣を貫く。

貫いて、身体を爆散させる。汚染獣の上半身はほぼ吹き飛び、身体の七割は失つた。

半年、その間での完全な身体の再生が出来ていない可能性　そんなことは頭から抜け落ちている。

それを自身の実力だと、殲滅できることが現実だと認識した。

『どついつつもりだ！　仲間ごと吹き飛ばすなど　』

通信から飛んでくる声が鬱陶しい。何を吠えている、汚染獣はほとんど虫の息だ。

さあ、とどめを刺そう。天剣を、握め。

再び白金鍊金鋼を復元しようと、剄を奔らせたとき、剄脈に不和が起つたのは鮮明に分かつた。

吐き気、頭痛、全身を蝕む苦痛。

先ほどまであれほど高ぶっていた剄は弱々しく、それはもはや武芸者ではないほどまでに小さくなる。

神経の痺れは、血液の熱は、嘘でも何でもない。ただ身体が異常を察知し、警告を与え続けていたのだ。それが今になって襲いかか

ってきていた。

薬独特の感覚によってルシエの神経は徐々に麻痺していたのだ。あまりの痛みに霞む意識の中で、数名の武芸者が撤退していくのが見える。

残りはどうした？

あれだけの武芸者はどこへ消えた？

最早現状の把握すら、壊れかけた人格で把握するのは困難を極めた。

思考は靄がかかったようで、ルシエの意識は錯乱している。

最後に見えたのは、白く輝く剣を携えた武芸者が汚染獣に斬りかかる光景だった。

次に目を覚ましたのは病院だった。

といつても、意識は相変わらず濁ったままで、音を聞き取ることすら意識を集中しなくてはいけないほど衰弱していた。

自分はどれほど眠っていたのか、一日か、二日か。身体の感覚は研ぎ澄まされていたつい先ほどが嘘のように重く、そして到脈に大きな異物があるような異常を覚える。

来るべきものが来たことを悟る。副作用は、どうやらルシエが天剣になるまで待つてくれなかったらしい。

「目が、覚めたのか？」

「ア、アア」

驚いた、声すらまともに出ない。心なしか自分で呼吸することすら難しい。今は人工呼吸器に身を任せることだからうじて呼吸を可能としている状態であることに気付いた。

しかし、意識は大分はつきりしてきていた。目の前の人物は誰な

のか、視界はぼやけて良く見えない。だがそれも、次第にくつきりと視力を取り戻したことで見えてくる。

兄、グランディア・ラグナイト、その人だった。

少し見ない間に大分大人びて見える。いつの間に兄は眼鏡をかけるようになったのか、そんな風にぼんやりと考えた。分家の屋敷にいる間は、ほとんど顔を合わせなくなっていた。多忙なのだからそれもいたしかたないといえそうなのだが。

そんな風に思っただけで兄の顔を懐かしげに眺めた。

兄は泣いていた。泣いて、泣きながらルシエの手を握っていた。

そしてルシエはその状況を目の当たりにして衝撃を受けた。

しわがれて、まるで枯れ木のような細腕となった自身の腕は、兄の手に包まれている。その事実ルシエは動揺するよりほかなかった。

「おまえは……ルシエは、丸々一年間眠っていたんだ」

意識を失っていたのは、一日や二日ではきかなかった。

医者に言わせればそれは奇跡以外の何物でもないらしい。剽脈加速薬の副作用による剽脈に悪性の腫瘍が発症し、更に剽脈以外へのダメージ、脳へもかなりの損傷が出て、生きているのが不思議な廃人と化していた。

もう二度と意識を取り戻すことはありえないとさえ言われ、ここ一週間、ルシエの身体は高熱を出し、生死の狭間をさまよい続けたのだ。

ようやく峠を越えたとき、ルシエは目覚めたのだ。

そして、傍にはずっと一週間もの間、仕事すら放棄した兄がいた。どうしてか、なぜ彼がここにいるのか。ラグナイト家をこれから背負って立つはずの兄が。

それは声にはできなかった。

声に戻るまでの一週間。ルシエは長い苦しみを味わった。

夜は眠れぬほどの苦痛が身体を蝕み、体温は常に人体の生きられるぎりぎりの高温を維持し続けた。再び、死の境をさまようこととなった。

武芸者でなくなった自分。武芸者と戦い続ける自分。何度も夢に見る汚染獣との最後の戦いでの自分。それらが何度も走馬灯のように現れては消え、精神的な苦痛というものを超えるものが、現実と夢の狭間でルシエに見えない痛みを与え続けていた。

ようやく身体が落ちつき、まともにならなければならないまでに二週間が必要だった。そして病室に訪れた兄であるグランディアは、ルシエが倒れてからの事を語る。

ベヒモトは三人の天剣によって今度こそ消滅。被害は次期天剣争奪戦候補者だった武芸者二十四名、一人が植物状態となるほどの負傷となったという顛末。

そして死傷者以外の重傷者、その真実は汚染獣との戦いによる負傷ではなく、自己の問題から来る負傷。

その問題は公にされる前にグランディアの多大なコネや金、あるいはラグナイト家からの圧力、権威によって揉み消され、上層部への問題とはならなかった。

だが、真実を知るものの中にはいる。

「そして、これだけは覆らない事実として残っている」

そう言って突きつけられた一枚の紙。

そこにはルシエの罪状が書かれている。

『ルシエルディア・ラグナイト。汚染獣との戦闘において、計十八名の殺害容疑』

大雑把ではあるが、そんな内容のことが書かれている。

はつきりと思い出せる。何人もの武芸者を巻き込んだ剽の一撃が、それらを巻き込んだことを。

到脈加速薬の副作用には、悪性腫瘍が生まれる可能性以外にも、脳への影響がある。十全な判断を、半年もの間服用し続けた間にくだせなくなってしまうていた。

それも言い訳に過ぎないのだけど。

心の中でそう呟く。

しかし、その事実をなかつたことにはできない。

現場にいて生き残っていた武芸者は、どうしてそれが記事となつてグレンダンに情報が開示されないのかという不満を募らせ続けていた。もつとも、それらすべてを兄が懐柔、あるいは望む“何か”を提供することで口止めし解消していた。

「……この事実も、いつまでも伏せておくことはできない。ルシエが目覚めたのだから警察機関も再び調査を開始してしまう。いつまでも私の力でどうこうできることはないんだ」

一年間、よくそれだけの間もつたものだ。それは二重の意味、自分の身体も、兄の抑えも。そこにはルシエに測り知れないであろう苦労があつたはず。それを、少しだけ大人びた兄がやってのけたこと。その器の大きさにルシエは少しだけ、感謝以外の暗い感情を抱く。

「……どうして、こんな足手まといをさっさと縁を切るなり、殺すなりしないのさ」

ルシエにはもはや生きる希望もない。剄が使えないという事実以外に、グレンダンで深い罪を犯した武芸者は、生還不能な汚染獣との戦闘を強制される。つまり、処刑ではなく、名誉の戦死を余儀なくされるのだ。

ほとんど生身の一般人と変わらないルシエが、エアフィルターの外でまともに汚染獣と戦うことなどでははしないことは、自分でもよくわかっていた。

そしてこんな問いかけに何の意味もないことも承知している。生きているのではなく、生かされていたのだ。そのことに意味が見出せなかった。

自分はただ、ラグナイト家に天剣をもたらず者で、それ以上でも以下でもない。機械のようにただ武芸を極めるだけの存在。

そんなものがどうして生きているのか。それだけが知りたかった。

「……殺せるわけないだろう」

なんて顔をするんだ、やめてくれ。そう言おうと喉をひくつかせるがルシエの声帯は震えない。乾いて久しい肌を、水気を帯びた何かが伝っていくのがわかった。

「弟なんだ、殺せるわけがない」

ああ、泣いていると理解した。どうして生きているのかも、もう問おうという気にはなれなかった。

何もしなくてもいいから、もう少しだけ生きてみようと思わされた。

それから、ルシエの身体が快復の兆しを見せるたびに病魔が襲う。薬の後遺症か、はたまた精神病の一種か、医者ですらわからない何かが度々ルシエに猛威をふるう。三日に一度の頻度であったり、一月何も起きなかったり、だがそのあとリバウンドのようにひと月の間、生死の境をさまようような不安定な身体となった。

そんな身で事情を聴取できるはずもなく、なし崩し的に事実の公開は遅れて行った。

そんな日々が半年過ぎた頃だった。身体の異常を診察する為、到脈の腫瘍を調査した時だった。

「腫瘍が小さくなっている……？」

「そうなんだ！　もしかしたら回復の見込みがあるんだ！」

衰弱した声で、いつものように峠を越えたルシエがそう言うのと、嬉しそうに兄は言った。

武芸者に戻れる。そんな淡い希望はルシエに一つの安息をもたらした。

同時に、兄が病院を訪れることはほとんどなくなってきていたが、ルシエはもはや気にすることはなかった。いつまでもいつ死ぬかわからない自分に構うよりは、自身の仕事を優先させて欲しいということもあったし、ルシエはできることから始めようと少しずつではあるがリハビリというものを始めていた。

少し歩くだけでとてつもない吐き気を催しながら、それでも本当に少しずつ、努力を続けた。

いつからか、襲いかかる身体の異常は減少していた。目に見えて、ルシエは回復していたのだ。

常に青白かった肌はほんのりと血の気を取り戻し、枯れ木のような細腕や、皮と骨しか残っていなかった胸も少しずつ筋力というものをつけ始めた。

そんな風に、生活に支障が生まれなくなったのが、ルシエが目覚めてから一年が過ぎた頃。

生活の中で気になったのは、天剣授受者の選定戦だった。グレンダンを襲った老成体の脅威によりほとんどの候補が消えてしまった為につやむよとなっている。もっと多くの武芸者が育つまで、少なくとも現状あと二年は延期される予定らしい。

その頃には、ルシエの侵した罪に審判が下ることとなる。それは正式な裁判によって裁かれたものではなく、関係者にしか知らされないほどのもの。

グレンダンからの追放というものだ。

だが、ルシエはその事実には、少しだけ引つかかることがあった。法は覆せない。それが例え政治家の兄であったとしても。今まで警察関係を抑えていただけでもかなりの偉業であるとも言えるが、法に関しては王家すら絡むこともある。今回は事も事だけに、名家とはいえ一介の政治家に過ぎないグランディアではこれほどうまく丸めこめるはずがない。

どんな切り札を切れば、死刑が追放になるのか。

その瞬間、一度も見舞いに顔を見せたことがない父親の顔が浮かんだが、すぐに否定する。

否定して、ルシエはそれからもひたすら身体を動かし続けた。

第一審である『グレンダンからの追放』は、更に弁護人を交え第二審へと移行した。

一審では次の放浪バスによる追放で、三カ月ほどの猶予、正確にはわからないが、放浪バスの周期から見ての期間であったが、裁判を長引かせる目的で更に上告した。それらの判断はすべて、今のルシエの保護者と化しているグランディアに任せきりだった。

病状がどう転ぶかわからない、そういう点もあったらうし、兄は兄で何やら動いているようだ、くらいにしかルシエは思っていなかった。

この三カ月の間に、驚くべきことに剄を扱うことすら可能となった。

といっても、精々が剄息を常に纏わせているくらいで決して鍊金^{ダイ}鋼は使わない。どの程度まで剄が回復しているのか、確かめたいと思うこともあったが、それで病状が悪化することがあれば、それは

死に繋がる。

どうして今、すべての力を失ったはずの自分が武芸をするのか。

その理由はわからない。ただ、こうすることが正解にしか思えない。

生きる為に力が必要だ。才能はもつと必要だ。

ルシエには兄のような人間関係を構築する飛び抜けた話術があるわけでも、相手の裏を読むほどの冴えた頭脳があるわけではない。

秀でているのかもわからない才能は武芸、ただ一点だ。

ならば、それをまた一から磨く。

一から磨くことに、それだけの理由以上の何かがある。

そんな感情からルシエは行動を始められるように意識を切り替え始めた。

今までのように何かを背負った武芸ではなく、自分の為の武芸。

準備の為の時間は限られている。

やらねばならない問題も山積みで、無事にグレンダンを出られるかもわからない。

ただ、それでも恩に報いるだけのことをしようと、強く意思を固め、鍛錬に励んだ。

それは出発の前日、ラグナイト家への訪問まで続くこととなる。

「……それからずっとグレンダンで治療と鍛錬を続けていました。最後まで兄には世話になったままで、追放という形でグレンダンを出てきたおれなんかの為に、わざわざツエル二への道すら示してくれました。武芸者として未熟な者が集まる場所ならば、おれの居場所としても最適だろうという配慮なんだと思います。まだ半分の力も戻っていませんし、剋脈事態未だに不安定なときもあります。けど、医者がなにか特別な治療を施していたわけじゃなかったですし、あくまで自然治癒のような形だったらしいので、無理しなければ六年できつとこれも完治できますからね」

もちろん、無理をするとこの間のように入院する。と、そこまでは言わなかった。

語り終えて、練武館に明かりが灯る。周囲は薄暗闇から周りが見えなくなり、光に包まれていた。

ゴルネオは、何も言わなかった。ただ目を閉じて、何かを思案しているようだった。

ルシエは、ゴルネオにほとんど真相に近い部分を話していた。彼がそれを言いふらすような真似はしないであろうという無条件の信頼だ。もちろん、ある程度兄に迷惑がかからないようにぼかしてある部分もあるが、少し調べればそれはすぐにわかってしまうという危ういものだ。

「……最後まで聞いてくれてありがとうございます。できれば他言無用でお願いします」

そう言って、部屋を出ようと扉に手を掛ける。一步外に踏み出そうとしたときだった。

「俺には……お前を裁く権利などない。だが、お前の行動を許せな

いと感じている」

絞り出すような声に、振り向かずにルシエはそのまま耳を傾ける。

「許せない、たぶん、そんな感情だ。才能がありながら劉脈加速薬に頼ったことも、武芸者を殺してしまったことも、すべてはお前の未熟さ故だ。だから」

息を呑む音が聞こえた。それはほんの少しだけ二人の間に流れる空気を変える。ゴルネオにあつた怒りが霧散している。ガレルの語った内容がどんなものだったのか、それは噂を直接耳にしたわけではないから、わからない。

同情か、はたまた別の感情が渦巻いている、一番近いのは迷いだろうか。

「生きて、お前が殺した武芸者の分まで贖え」

その声を背に受けて、ルシエは思う。

たぶん、贖うことはできない、背負うこともできない、だけど逃げることもできない。

それは生きている者の傲慢だ。そんな風に考えること自体、死者への冒瀆なのかもしれない。

「二度と同じ轍を踏まないで生きる。それがおれの考え得る最高のライフワークです」

それを経験として、生きていく。

ただそれだけの話。

第十三話 生きる道（後書き）

ベヒモト、グレンダンでの裁判、処刑法、ルシエ奇跡の復帰など。その辺が恐らく原作設定と変わっています。ご了承ください

かなりリダイジェストな感じでまとめてしまいました。

書きなおせよ！「ちよ、わかんね」って感じな感想が来たら、もっと詳しく書きなおすか、補完して別に話を挙げようかと…（汗

！！最終的にちょうど入学期間までの間まで追放までの期間が延びたことになっています。中途半端な時間軸で過去の内容が途絶えているのでこれも補足です！！

タグにご都合主義追加します。あと今までの誤字修正しました。

第一話 人にやさしく

冷たく、乾いた風が吹き抜けて行く。

エアフィルター越しに見える空は蒼く、どこまでも澄み切っているかのよう^にに錯覚させる。

学園窓口には雑多に人が集まっている。どの学生も白い武芸科の制服を身に着けていた。

その中から一人の学生が人ごみをかき分けて現れる。ブルーの穏やかな瞳が随分とおとなしめな印象で、やや長くなりつつある黒髪には寝ぐせなのか天然なのか、自然と整った不思議な癖がついている。

「う、さむいな」

学生、ルシエはぶるぶると一度身体を震わせ、自分の肩を抱いた。時期はもうすぐ冬期帯とはいえ、どうやら今年は例年より早く気温の低下が始まっているらしい。

ルシエが入学してから半年が経った。とうとう自前の^{タイト}錬金鋼を登録することができるようになったのだ。

学園に発注することで、ある程度の割安となるのが特徴で、以前からそのための手続きを済ませていただけあって、学生たちが窓口^にに殺到している状況なのだ。

一日でも早く^{タイト}錬金鋼を所持したい、そういう願望は武芸者の誰もが持っていたのでこうゆう事態も仕方がないのだろう。

中にはこっそり隠し持っていたりなんていう輩もあり、それで問題を起こして、この半年の間に何名かの退学者を出してしまったこともある。

もちろん、剣帯を所持しているからといって、時と場合を考えずに復元してしまえば、それは都市警察のお世話になることにも繋が

る。この時期はそんなことが増えるから要注意だ、なんて笑いながら上司は言っていたけれど。

「……だからって、同じような新入生に警備を任せるかね、普通」

臨時出動員とはいえ、都市警察の一人であるルシエは、自身の鍊^イ金鋼を取りにいきがてら、トラブル防止の為の抑止力として窓口周辺で絶賛警備中。それもあからさまに、これでもかというくらいに都市警察と書かれた腕章をひっさげて、だ。

「ばーん、とでも効果音が鳴っている、それくらい派手にやれとのことだ。」

都市警察にお世話になっているような輩から見たら、たまらないだろう。

ちらほらと嫌な目つき、いかにもガラの悪そうな連中がルシエを威嚇しては帰って行く。

それに引きつった笑いを返しながら、寒空の下で立ち尽くす。

「おいおい、こんな木枯らしが鳴くような中、御苦労なことって」

「……またあなたですか、よほど暇らしいですね？」

「よっ、と軽く手を挙げて現れたのはシャーニッド。最近、暇を見ているルシエの元に顔を出している。」

「一時、無許可で都市内戦闘を繰り広げてからは、それほど接点を持たなかったのだが、それもどんな気まぐれか、またルシエに小隊への勧誘を始めた。とはいっても、断ればあっさり引き下がる辺り、彼には本気で誘おうという気持ちも少ないのだとルシエは思っていた。」

「やっと自前の鍊^{タイ}金鋼を持って、おまえも嬉しいんだろ？」

「別に、そんな子供っぽい事考えていませんよ」

少しだけ声が大きくなってしまったか、周りではしゃいでいた武芸科生徒が恥ずかしげに顔をそむけた。

「そうか？ その割には顔がほころんでいるように見えるが」
「……そんなことはありません」

一瞬、本気でそんな顔をしていたのかと思ったが、シャーニツドのにやける顔を見てため息を零す。危うくはめられる所であった。

「いやはや、相変わらずあんまり隙を見せない後輩だこと」

「実際隙がないんでしょう。常に鉄面皮を被った友人と接している影響でしょうかね？」

「へえ、あなたにわたし以外に友人と呼べる人がいたのですか、驚きですね」

軽く笑って流すつもりのはずだった。

背中から聞こえてくる、いつもの数倍は低い声。シャーニツドの顔も心なしに蒼くなつて見える。

「わたしにも、是非そのご友人を紹介していただきたいのですけれど？」

あちゃーとか言いながら天を仰ぐシャーニツド。思いつきり口元がにやけている。完全に他人事で、あまつさえ楽しんでる節すらある。

それを指摘して場を濁すこともできずに、ルシエは流れる冷や汗を止める為に即座に振り返る。

「ま、待て待て、それは決してフェリのことを言っていたわけでは

なくてだな」

「なるほど、では誰のことだったのですか？」

さらに地雷を踏む。慌てて弁解するも焼け石に水。いや、焼け石と言つ表現は適切ではない。

北風も真つ青になって逃げだすほどのブリザードがそこに吹き荒れていた。

「……なるほど、フェリも錬金鋼タイト所持の申請に、ね」

痛む脛を抑えて、ルシエはそう口にした。場所は近くの喫茶店。ある程度、人もまばらになったので場所を移動したのだ。

ちなみにフェリはといえば、お詫びにとルシエから進呈されたケークを頬張っている。最初からそれが目的で吹っかけてきたのではと思わされるが、満足しているようなのでこれ以上突っ込むのはやめようとルシエは判断し、おとなしくしている。

財布の中まで冬到来。どうやら苦学生にとって冬と言つ時期はそういうものらしい。

「そうです。それで、どうしてあなたもついてきたんですか？」

「おいおいフェリちゃん、そりやつれないんじゃないかねえか？ たまには、こんな根暗野郎というよりも新鮮味があつていいだろう？」

なぜか、テーブルにはシャーニッドもついてきている。彼と話すのは基本的に屋外であることが多く、このように店で会話することなどなかっただけに、少々戸惑いを感じないでもないが、彼の持つ明るく軽い雰囲気作用しているのか、あまり違和感はない。

「彼の場合、根暗と言うよりも、アウトドア武芸オタクなんですかね」

「……突っ込みどころそこかよ」

気力のない突っ込みを入れて、ルシエは頼んだ紅茶を啜る。しかし、こうしてゆっくりと他愛のない話をするのは楽しい。しばらくの間、そうやって三人は会話を楽しんでいた。

「そういえば、もうすぐ第十小隊の対抗試合なのにこんなところで油売っていいんですか？」

「ん？ ああ、まあな。普段から鍛錬を怠ってないし、今日は試合前の骨休めってところさ」

「そうですか」

ルシエが尋ねると、シャーニッドはどこか曖昧に笑って言った。フェリは特に気にした様子もなく、ストローでオレンジジュースを飲んでいる。ケーキを食べた後でその組み合わせは味がしないのではないかとも思うのだが。

そういう目線で見たら脛を蹴られた。痛い。

「ところで、フェリちゃんの錬金鋼タイトは重晶錬金鋼パライトタイトなのはわかる。おまえさんは、どんな錬金鋼にしたんだ？」

「え？ また唐突ですね」

「前にお前とやりあったとき、あー、フェリちゃんは知らないかもしれないが、そのときはよくよく考えたらフェアじゃなかったよな」

それはよく覚えている。あのときは確かに自分本来の錬金鋼タイトでもなければ、愛用の武器の形状でもなかった。

その事に関して、フェリにも特に詳しい話をしていたわけではなかったが、フェリの方も興味がないのか、深く突っ込みうとしな

った。ルシエは話を続ける。

「まあ、そうですね。都市警察から支給される黒鋼錬金鋼クロムタイトでしたけど」

「だろ？ そんな万全な状態じゃないのにオレは負けちまったなんて悔しいからな。本当はどんな錬金鋼タイトを使うのか、気になったわけ」

理由としては特に不自然なところはない。フェリの方もそのことに少し興味を持ったのか、ルシエの剣帯に注意を向けている。ルシエの腰につけられている剣帯は二つ。

「左の剣帯には紅玉錬金鋼ルビータイトの拳銃、右の剣帯には鋼鉄錬金鋼アイアンタイトの片手剣です。どちらも少々設定をいじってありますけど」

両方ともが学園に申請し、新しく注文したものだ。おかげで今のルシエの財布は驚くほど軽い。一つだけならある程度安く済むのだろうが、二つとなると負担も大きい。紅玉錬金鋼ルビータイトの方なら既にもってはいしたが、兄から贈呈された錬金鋼タイトを使う気にもなれなかったのだ。

「……ほお、片手剣に、拳銃ね」
「なんですか、文句でも？」

軽く言っただつもりだったが、シャーニッドは大げさに両手を振って見せる。

「そう喧嘩腰になり為さんなつて」
「でもなにか企んでいたのでしょうか？」

横から言葉を滑り込ませたのはフェリ。飄々としているのがデフ

オルトのシャーニッドが一瞬だけ目を光らせていたのだ、フェリも一瞬の違和感を感じとって言葉をはさんだのだろう。

「……まあ、代わりは無理だよな、やっぱ」

「はい？」

「なんでもない、こっちの話だ」

シャーニッドはそういうとお金を置いて立ち上がった。傍目に見てもそれが自身の料金よりも多めである気がするのは、ルシエの目の錯覚ではないはず。

「さて、楽しかったぜ。オレはそろそろお暇させてもらう。フェリちゃん、今度は二人つきりでお茶でもいかが？」

「お断りします」

キザっぽくウィンクまで飛ばしたものの鉄面皮のフェリの前でシャーニッドも秒殺だった。シャーニッドはめげた様子もないことから、本気ではなさそうだ。頬は引きつっているけども。

「つれないねえ、それじゃお二人さん、またな」

出て行くのを見て取って、フェリとルシエもそろそろ出ようかという話になる。シャーニッドが自分の代金を置いて行ったので、残りは全部ルシエが払えばいい。簡単な話なのだが。

「見事にわたしの分の料金も置いてありますね」

「えーっと……おごるのは女性の分だけ、と。らしいことはらしいのだけだね」

それはそれでルシエにとってはお金が浮いて助かったのだ。ある

意味ルシエの分もおごつてくれたようなもの。きちんとお礼を言うべきだった。隣のお嬢さんはそんな先輩の気遣いを見事に一蹴していたわけだけれど。

それでも、それでもだ。ルシエにとってはありがたい話なのだ。苦しい経済対策をなんとかしてくれるのは政府ではなく、身近な隣人、またはライトな感じの軽い先輩なのだ。アーメン。

「なんて良い先輩なんだっ」

思わず拳を握りしめ、感動に浸りながら会計に向かおうと立ち上がる。だがもう一人の連れはなぜだか立ち上がらない。あまつさえ席について、備え付けの呼び鈴を鳴らす。

「あのう、ロスさんや？」

ルシエが首をかしげると、店員が出てきて注文を取り始めた。

「ショートケーキ追加で」

「あんたは悪魔か」

思わず出てしまった本心を隠すために言い訳を並べるのも無駄な努力。

その後、当初よりも大幅にルシエが余計な散財をする羽目になったのは言うまでもないだろう。

第二話 働かざるもの、食つものがなし

生きて行くのに必要なものは何だろうか。

「ごんごんと低い唸りが聞こえる。ルシエの脳みそがフル回転で稼働している音ではない。

ぼんやりとルシエは考えながらひたすらに手を動かし続ける。

武者者であるからにはやはり剋か、いや、それでも人体的には水や食料だろう。となるとやはりお金だろうか。

何を隠そう、今のルシエの経済状況は苦しい。

これは常々彼が口に零していたし、何より現実として財布の中身が潤っていたのはつい先日の鍊金鋼購入までの間。

しかし、その中身も露と消え果て、拳句の果てに傍若無人な甘党大王様に貴重な資金を泣く泣く献上する羽目にも陥り、火の車どころか燃えカス一つ残らないくらいの悲惨な状況。

これも身から出た錆、今日から精進料理を毎日食べようなんてレベルで改善されるかと言えばノー。ついでに言うと、ルシエの財布事情をフェリは知らないし、男の意地からルシエがそんなことを情けなく言うことも絶対にしなかった。

なれば、どうするか。

「働くしかないんだよなあ」

「新人、ぼやいていないで手を動かせ」

「はあ、世の中って厳しいですね先輩……」

ひたすらに何がどうなつてこんな風になつたのかわからない“何か”をモップでこしこしとこすること二時間ほど。作業は一向に終わる気配がない。機関部独特の熱気で、冬だと言つのに汗をびっしよりと掻いているのが、またこの途方もない作業に対するやる気を削いでいく。

三日間の短期就労。それもきついことで知られる機関部清掃だ。臨時で募集がかかっていたあたり、どうやら正規の就労学生が冬期帯に入ったこともあり、何人か体調を崩したせいで出来たその穴埋めらしいのだが。安定しない給金の臨時出動員として都市警察に三日間赴いて、何も事が起きずに給金が支払われない場合と、三日間真面目に働いて給金が出る就労と比べ、ルシエは堅実に稼げる方を選んだ。

一般教養科の生徒だろうに屈強な筋肉をつけた先輩方は、並みの武芸者とも渡り合えそうだ。実に暑苦しい、なんて呟いた日には就労初日であろうと、頭からつま先まで真っ黒になるほどの酷い場所に送り込まれる。

もともと、初日からやらかしたのは他でもないルシエだったのだけれど。

「まあ普通に考えてこんなところで働きたいと思う女の人もいませんよね」

「ああ！？　なんか言っただか新人！」

何でもありません、と身振り手振り、モップを振り振り。別に怒っていて怒鳴ったわけではなく、機関部の音で聞こえづらかったのだろうか、ルシエの振ったモップからびちゃびちゃと飛び散った何かを見て先輩が青筋立てていらっしやる。

ああ、新人なんです。ついでに言うところこんな清掃作業生まれ初めてなんです。そんな言い訳をしながら頭にでかいこぶをこしらえて、罰の代わりにえっちらおっちらバケツの水を交換し、元の作業場に戻る。

すると、モップを壁に立てかけて同僚と何やら話している先輩方。表情からして唯の世間話と言った具合ではないようだ。

「先輩、何かあったんですか？」

「新人か、どうも電子精霊が逃げ出しちゃったらしい」

「電子精霊って、あの!？」

「電子精霊、自律型移動都市レギオスにおいて、必要不可欠な都市の意思。電子精霊がいなければ都市が動くことはないし、汚染獣から逃げ続けられることもできない。しかし、今のところは都市が動きを止めた様子もないのだが。」

「たまにあるんだよ。今日はもういいから、手分けして探してみてくれ」

「わかりました」

先輩は他の同僚にも声を掛けながら薄暗い通路のどこかに消えてしまった。何やら大声でアン・トークがなんちゃらかんちゃらとルシエの耳に届いたが、何の話だろうか。まさかこんなときにワイ談か、それともとにかく電子精霊に話しかけろって感じの暗喩だろうか。

「おーい、電子精霊でてこーい」

はつきり言っただけ棒読み。これで仕事しなくてよくなるなら、いつまでも適当に探し続けてやるうか、なんて最終日にもかかわらず思っていた。考えていたよりも苦痛ではないが、それでもひたすら三日間ここに籠りっぱなしでは息も詰まるというものだ。

そうやって探しながら歩きまわること十分ほど。いまだに入ったことのない一角に足を進めたのが運の尽きか。

「迷うよね、そりゃ」

少し戻ればまだなんとかかなりそうだが、そういうわけにもいかな

い理由もある。

声が聞こえるのだ。それは機関部のパイプやら部品やらを反響させて、ルシエの歩の向けた先から。

そういえば、シャーニッドから何やら機関部には出るぞ、なんて話を先日聞いたような聞かないような。

ぶるっ、と背筋に言い知れぬ悪寒が奔る。

聞こえてくるのは少女のような、そんな声だ。

「夏じゃないんだ、冬はそういう類もお休み中」

何もいない、何もいない。眩きながらも確認の為にまた一歩もう一歩と進んでいく。

少しだけ円形上に拓けた場所に出る。ルシエはその光景に目を見張った。

金髪の女生徒と、戯れるように蒼い電光を纏った幼女がいたのだ。そのあまりに幻想的とも取れる情景に、あっけに取られしばし呆然と目を奪われていたルシエだが、すぐにはっと意識を取り戻す。

自分が探していたものと、その明らかに“人でない幼女”を見てすぐに結びつく。

「電子精霊、こんなところにいたのか」

「ん？ おまえは」

女生徒はルシエに振り返り、その腕に電子精霊を抱きかかえている。くすぐったそうに身をよじる電子精霊。一瞬、新しく錬金科が作りだした愛玩用おもちゃか何かとも思ったがそれを頭の中で否定する。そこまでの技術はさすがの錬金科でもないだろうから。

「おれはここで短期就労をさせてもらってる一年生です。電子精霊がいなくなったらって機関部中で大騒ぎですよ？」

そう説明すると、目の前の女生徒は相槌を返して、電子精霊に優しく語りかける。すると電子精霊は一度だけこちらを振り返って笑いながらどこかへ飛んで行った。なんとも不思議な光景だった。

「すまない、ツエルニが手間をかけた」

「はあ、ってツエルニ？」

「そうだ、この都市の意思なのだから間違いではあるまい」

よくよく見ると、彼女は機関部清掃員に配られる作業服を着こんでいた。どうやら彼女も探していたようだ。

「……それにしても、あなたは電子精霊とコンタクトが取れるんですか？」

「詳しい内容なんかはさすがにわからんさ。なんとなくの感情なら伝わる、その程度だ」

そういつて笑う女生徒を見て、綺麗に笑う人だと一瞬だけ見惚れてしまう。出会ったのがこんな場所でなければ、良いところのお嬢さんだと思うのだろうが、そういうわけでもないのだろう。フェリの儂い感じとは違って、こちらは健康的な美しさがある。比べるのもどうかという問題ではあるが。

「それよりも、早く戻った方がいいぞ？」

「え、でも今日はもういいって言ってましたけど」

なんだ、知らないのか。と、顎に手を当てて意地の悪そうな笑みを浮かべている。

「ノルマが終わらなければ、ずっと残業だ。ここはそういう場所だ

よ

「そんなの詐欺だ……」

ルシエががっくりとうなだれるのを尻目に、肩を叩いて女生徒はその場所から出て行く。自分の担当場所に戻ったのだろう。

ルシエも自身の担当場所に戻ると、彼女の言った通りノルマを終えるまでは解放されなかった。

後に聞いた話によると、彼女の名前はニーナ・アントーク。電子精霊ツエルニに懐かれている、なんとも不思議な体質の持ち主らしかった。

第二話 働かざるもの、食つものがなし（後書き）

ルシエの過去が明かされるまでを一章とし、これから第二章を展開していきます

ライトな感じでお楽しみください。前話『第十四話』から『第一話』に変更しました。章ごとの区切りで話数を変えて行きます

第三話 自分の立つ場所

それは機関部清掃を体験してから一週間ほど経ったときだった。ラジオから聞こえてくる小隊対抗戦の様子が逐一耳に届く。

『おおっと、第十小隊の紅一点ダルシエナが前に出た！ 第十小隊の得意とする三人のフォーメーションに第十四小隊はどう対抗するのか！？』

どうやら戦っているのはシャーニッドの部隊と第十四小隊らしい。十四小隊には特に知り合いがいるわけでもないのに、自然と第十小隊の様子が気になってしまう。

と、動かす手を止めるとフォーメッドからの視線が投げかけられる。

「気になるのか？」

「ええ、まあ知り合いが出ているので」

「ほお、小隊員の知り合い、ね」

何か余計な話に発展する前に理由を話しておく。それでもフォーメッドはにやにやと嫌らしく笑っているのであまり効果はなかったのかもしれない。

『なんと、ここで第十四小隊のルーキー！ 二年生のニーナ・アントークがダルシエナの猛攻を果敢に受け止めた！！ 第十四小隊、これは致命的な采配ミスか！？』

ニーナ・アントーク、聞いたことのある名前だ。ルシエは一瞬思考を小隊戦から過去へ移す。

「ああ、機関部清掃の……」

「なんだ、アントークとも知り合いなのか？」

「いえ、知り合いと言うわけでは」

そう言い訳を紡ごうとしたときだった。ノックの音と共に、別の署員が入室し早足でフォーメッドの元へと向かう。

フォーメッドもゆったりと掛けていた椅子から身体を起こして報告を受けると、先ほどまで穏やかだった表情が変わり、その渋い顔がより一層凄味を増した。

「仕事だ」

「はい？」

フォーメッドの事務的な声とともに、一枚の書類がルシエのデスクの上に飛んでくる。現在、一年生の行き過ぎた訓練の結果、という名の喧嘩騒動が慌ただしく起こり、次々と作成される書類の整理に余念がない。この部署は基本的に大きな事件の類がない限りは治安警備やその雑用に駆り出されるとはいえ、この量に辟易としていたルシエとしてはありがたかった。

ぷつつとラジオの電源が署員の手によって消される。ルシエは少しだけ未練がましくラジオの方を見て、フォーメッドに向き直る。暇つぶしのつもりだったのだが、意外と執着していたらしい。

「それで、今回は何が起こったんですか？」

「偽装学生だ。どうやらツエル二の持つ研究情報を盗みに来たようだな、懲りない連中め」

そう言って眉間を揉みほぐすフォーメッドを見て、ルシエは苦笑する。毎度同じ連中が来ているわけでもあるまいに。

それにしても、都市外からの犯罪率が意外と高いと言っことに驚かされる。グレンダンの中でもそういった類の事件が起こることもあるが、成功したという話を聞いた試しがない。もともと、あそこでも有益なのは武芸者の持つ技術であろうし、汚染獣と戦い続けて豊かとは言い難い都市であることもそうであろうけど。

そうなってくると、やはり学園都市の名を冠するツエルニは汚染獣と遭遇しづらいという点で、他都市よりも豊かであるのだろう。

その分、武芸者の質はあまり潤沢でないと言うのが致命的と言えはそうなのだが。

「……すいません、全然関係ないのですけど、最後にツエルニが汚染獣に襲われたのはいつですかね？」

「雑談なら後にしろ、といたいところだが……。確か、ツエルニが最後に襲われたのは相当前の話だ。おそらく最上級の六年ですら、この都市で汚染獣と交戦した経験はないだろうよ。」

その事実にはルシエは目を丸くして、一瞬言葉が出なかった。

「他都市の場合は、どうなのかわかりますか？」

ルシエの疑問に答えたのはフォーメッドではなく、今報告していた署員だった。

「さあなあ、ずっと汚染獣と遭遇したことがないところもあれば、三、四年くらいの周期で遭遇するところもあるらしい。詳しくはわからないが、そもそも汚染獣なんてそう頻繁にくるものじゃないだろう？」

その言葉に、ルシエはまた苦笑する。今度のは少しだけ驚きと、そして本気でそう思っているのであろう署員に対する呆れが混じっ

ていた。

いつになるかはわからない。だが、この都市が汚染獣と遭遇するのはそう遠い話ではないとルシエは感じた。

しばらく後に、強行警備課の同僚たちに召集が掛けられ、偽装学生生の根城となっている空き家の位置が割り出される。

「今日は帰りが遅くなりそうだなあ」

誰かが小さく、そう呟いた。

十一

時刻は真夜中、事前に漏れていた作戦時刻に都市警察は動いた。

盗み出そうと動き出した偽装学生達は都市警察の包囲網に面食らいつながら作戦を強行しようと襲いかかってくる。

だが、それら力技を易々と制し、全員が錬金鋼を取り上げられた。一連の事態がひと段落ついてこの事件は何事もなく收拾された。

以前、ルシエが入学してきた当初よりは、皆場数を踏んでいるせいかそれなりに様になって動けるようになってきたとルシエは感じていた。それでもまだ緊張という緊さが取れていないものも多いのだが。

皆が皆、緊張感の取れた表情で劳いの言葉を掛けあっている。お互いの連携や劉技についての考察を言い合ったりしている者もいる。それを冷たい視線で眺め、純粹な実力者の存在を探す。

だが、この中で一際目立つような存在はいない。小隊員が武芸科のトップであると言われている反面、ルシエのように埋もれている存在も少なからずいるであろうが、それでも並み以上の実力であるだけだ。今の実戦からも力量を隠しているような大物はいない。

特徴としては一人一人の練度は脅威ではないが、数が揃えばある程度の武芸者なら今のようには制圧できるといことだろう。しかし、熟練者がいない卵と揶揄されてはいるが、その成長具合は成熟した武芸者よりも早いのもかもしれない。

そう考えても、自分を超えそうな者はいない、ルシエはそう結論付けた。

「お疲れさん」

「ええ、どうも」

反射的に返事をし、思考を一度中断したルシエが声の方を向くと、いつもと同じような軽い雰囲気をつらしたシャーニッドがいた。こんな時間に何をしていたのか、というのは彼から漂う酒の匂いで理解する。

祝勝会か、はたまた敗戦の自棄酒か。

その表情が締りのない顔をしていることから、祝勝会であったと予想する。

「こんなところでドンパチやって、相変わらず暗い青春を送ってんな」

「仕事なんですよ……それにしても、三年生って酒飲んでいいんでしたっけ？」

「おいおい、細かい事を気にしたらフェリちゃんにあっさりと捨てられるぜ？ あの子は引く手数多、選り取り見取り、誰でも彼でも選り放題ってことを忘れちゃおらんだろうな？」

「別に、おれとロスはそのような関係じゃありませんから」

「とか何とか言っつて、奥手なだけなんだろう、ええ？」

ぐわしと肩を回してくるシャーニツドにルシエはため息を零す。
復元していた鍊金鋼ダイヤを剣帯に納め、顔を両手で押しつけようとする。

「ぐぎぎ、ふぁにする！」

「酒臭いんですよ！」

はあ、とため息を零しながらルシエはようやくシャーニツドから解放されると、疑問の眼差しを向ける。

「で、なんか用ですか？ 一応、今ここは一般生徒立ち入り禁止なんですけどね」

シャーニツドはおどけながら肩をすくめて見せる。どすと、酒の影響で重たくなった身体を地面に横たえ、手のひらを振りながらどこか虚ろげな視線でルシエを見る。

「たーまたま派手にやっつてるのが見えてな、おまえさんがいるかもしれんと思っつてこっちに來たわけよ」

ああ、こいつは相当酔っている。そう判断し、踵を返して部隊をまとめていたフォーメッドに、野次馬が酔いつぶれていると報告して事後処理を任せ、シャーニツドの元へ。あとはルシエの様子をずっと観察しながら遠くで手を振り続けていた彼をどうするかなのだが。

「じゃ、帰りますよ、肩貸しますから」

厄介なことになった、そう考えながらも寝転んでいるシャーニツ

ドに手を伸ばす。

「わるいな」

「構いません。まったく、見張りの人らは何をやっていたんだか…」

そう愚痴をこぼしながら、立ち入り禁止と書かれた蛍光色のテープをシャーニッドと共にくぐりぬける。

しばらく大きな通りを目指して歩き、シャーニッドの家がどこにあるのかわからないことに気付いた。

「先輩、家はどちらですか？」

声を掛け、シャーニッドを見ると彼は貸していたルシエの肩から離れる。心なしが表情に暗いものが混じっていたが、薄暗い路地では確認できなかった。

「まあ、歩きながらちよつと話してもしよつや」

「え、はあ」

驚いたことに、シャーニッドの足取りは先ほどの酔いが嘘のようにしつかりとしていた。

少しだけ、先ほどと違った空気を纏ったシャーニッドに戸惑いを感じながら、ルシエは彼のあとを続いて行く。街並みを見て、そういえばこの辺りは飲み屋の類なんて全然見当たらないということに気がつく。

では、シャーニッドはどうして来たのだろうか、その疑問に行き着いた。

「今日の試合、見てたか？」

「いえ、途中まではラジオで聞いていましたけど……何かあったんですか？」

「いんや何も無い、いつも通りだ」

ルシエの向けた問いに、シャーニッドは少しだけ笑いながらこちらを見ずに答える。わずかに先を歩く背中が、一瞬だけ小さくなった気がした。

「いつも通りのシエーナの突撃に、それを支えるデインのフォロー、そしてオレの的確な射撃。いくらあの作戦が練られたものだったとして、ルーキーを防衛に当てられて負けるはずがない。オレ達はこの連携で他の小隊を脅かすくらいに実力を認められてるわけだしな。まあ、少しは手こずったってのが本音だが」

確かにその通りだ。ルシエはその言葉に相槌を打つ。

何度か見た小隊対抗戦でも、このフォーメーションが崩されたのを見たことがない。相手の小隊とてバカではないのだ。それなりの作戦を用意し、対策の為の時間を割いて試合に臨んでいる。

だというのに破れないこの連携は、小隊員達にとって相当な脅威だと言ったこともルシエには理解できた。

「だけでもねえ、世の中そうそううまく事が運ぶわけじゃねえんだわ、これが」

軽い調子ながら、その声は普段と比べたらやはりいくらか重い。口ぶりから負けたわけではなさそうであるが、ルシエにはシャーニッドが普段見せないような影がちらついて見えた気がした。

「どなたか負傷したんですか？ それとも、上級学生から圧力が、嫌がらせの類でも？」

後者に関してはよくある話だ。年齢が上だと言っただけで、下の者に劣ると言うことが許せない、醜い嫉妬だ。それが純粋な武者への嫉妬であるならば幾分かマシであろうが、それを報復として実行するのならば感心できない。

ルシエの真面目な考察に若干の心配を混ぜた言葉を投げると、シヤーンと肩を小刻みに揺らした。どうやら笑われているらしいことに気づいて、ルシエの眉が跳ねる。

「こちらが心配したらなんですかその態度は」

「くはは、いやぁ相変わらずの後輩の態度に安心したんだよ。ほんと、お前は考えることが堅過ぎていけねえ。どうせお前のことだ、フェリちゃんにも同じようなことやってんだろ？」

「だから、ロスとおれはそういう関係じゃありませんってば」

「はは、ああそうだった、そうだった。フェリちゃんとは何も関係がなかった、これでいいだろ？」

わざとらしい口調に少しだけ頭にきたが、それもおどけたように肩をすくめる様を後ろから眺めることで、いつものことかと思いな
おす。

「そういえば、先輩にはそういった特定の人はいないんですか？」

ふと思った疑問をルシエは口にする。

ルシエから見ても、癩であるがシヤーンと充分二枚目であるし、誰にでも接することができるおどけた明るい性格、更には小隊員であるというステータスすら持ち合わせているのだ。おそらく彼の方も選り取り見取り、そういう立場にいることであろう。だが、彼の口から特に色恋に関して聞いた話がない。付き合いの浅さから
そつという話しをすることもなかったというのもあるだろうが、なん

となくルシエは気になった。

それは散々からかわれた意趣返しも含んでいる。

「……そうだな、いることはいるのかもしれない」

あまり聞かせるような話ではなかったのか、シャーニツドの声は咳くような小ささで、夜の静寂の中でもはっきりとは聞き取ることができなかった。そしてそのことを聞き返そうと思うほどルシエも鈍いわけではない。

しばらく沈黙のまま二人は歩き続けた。こつこつと足音だけが辺りに響いている。

シャーニツドも意識がはっきりしていることだし、ルシエが家に送り届ける必要もない。そろそろ帰宅しようかと意識を向けたときだった。

「なあ」

「はい？」

掛けられた声に気の抜けた返事を返してしまう。いつものような軽い声で、シャーニツドはルシエに振り返った。

「うちの小隊に入らないか？」

だが、その表情はいつもと違う。

真剣だ、それだけは交錯した視線からはっきりと理解する。

普段通りに断ることはできるかもしれない。でも、自分がそうしてしまうことはなぜだかやってはいけないことだと考えている自分がいる。

シャーニツドが何を思って、再度ルシエを誘うのか。それほどに切羽詰まった事態になっているのか。

思考はぐるぐると空転し、答えは出ない。

「理由、聞いてもいいですか？」

わからないなら聞く。返す答えは自分の中で確定しているにも関わらず、だがその理由を聞かないままに結果を出してしまうのは駄目だ、そう結論付けた。

シャーニッドの方はその返事にやや驚きを含んでいた。明らかに断られるのを前提に言ったのだとわかったが、それを茶化すつもりはルシエにはない。

「……オレが、小隊には、第十小隊にはいられないからだ」

どこか苦しそうに、そう独白するシャーニッド。それに面食らって、一瞬だけ返す言葉を見失う。しかし沈黙を続けるわけにもいかず、脳内で出された事実を口にした。

「いられないって……。小隊員として相応の実力を見せているじゃないですか、先輩の代わりにおれをいれるってことですか？」

「……そういうことになるな。まあ何にしる、お前ならうまくやれるさ。実力だって保証するし、あそこなら変なやつかみを受けることもねえ。伸び伸びと自身の武芸に磨きをかけることだってできるし、シエーナは才能の塊だ、たぶんおまえさんだってマジでやりあっても苦戦するだろうさ。そういう環境が整ってるのが今の第十小隊だ。それにこんな感じにせこせこ稼がなくなっちゃって、小隊に入れば雑誌からのインタビューやらなんやらの臨時収入も」

「おれはそういう話を聞いてるわけじゃありません！」

一気にまくしたてるように話を持っていこうとするシャーニッドの声を遮る。一瞬だけ見せた表情を押し隠し、ぺらぺらとしゃべる

姿は普段と変わりないものだったが、その顔もルシエの怒声に硬直した。

「どうして先輩が隊を抜けようとするのか、その理由をずかずか聞こうとは思いませんよ。だけど、その問題におれを巻き込むのはやめてください。先輩が抱えている問題は、先輩でしか解決できない。そういう類のものなんだってことは漠然とわかっているつもりですから」

「わかっているつもり、ねえ？ 一体、お前のどこからオレの問題がわかるって言葉が出てくるんだ？ 笑わせんな」

怒声とも違う、冷静な迫力とともにルシエは胸倉を掴まれる。

「……都市を守るため、その目標の元にみんな戦ってる。オレだって最初は違ったかもしれない。けどな、それを違う形であってもやり遂げたいんだ。今のままじゃ、……今の関係じゃ駄目なんだよ」

何もかもいきなり過ぎる。実は見た目には出ないまでも随分と飲んだのかもしれない。そしてその影響で押し隠していた何か言葉となつて出てきているのか、そんな風に考えてしまう。

シャーニッドが何か問題を抱えているのは明らかだったが、それを追求するような真似はルシエにはできない。だれしもが踏み込みたい欲しくないプライベートな領域に、自分から進んで踏み込むような事をやる気にはなれなかった。

徐々に緩んでいく拘束の中、訴えかけるようにシャーニッドが言う。

「それだけの實力、どうしてツェルニを生かすために使おうとしない？」

どうして小隊に入らないのか。

わかっている。それがこの都市に住む武者から見たら異端であることも、苛立ちを含んだ目で見られることも。

それは自身の過去からくる自戒だ。

栄光を掴もうとすれば、また自分はどこかで踏み外してしまう、そんなどうしようもないほどに後ろ向きな考え方。昔の自分のように盲目的に栄誉を手に入れようとは考えないだろうが、学園都市の武者者にとっての憧れに自分が進んでなるということに違和感を覚えてしまうのだ。

「ですが、先輩は自分の為におれの力を利用しようとしているんでしょう？ 最低限の戦力の低下で済むようにおれを代替として入隊させようとして」

「……………」

ルシエとて、そのまま隊に居続ければいいだろうなんて野暮なことを言う思考は持ち合わせていない。まっすぐに、視線はシャーニッドから外さないままに答えを返す。

たぶんこれが一番自然な形で、あるべき結果だとルシエは思う。

シャーニッドの担う役割が、ルシエにできるはずがない。その逆も然りだ。

例えどんな事情がシャーニッドにあっても、ルシエの答えは決まっている。これはシャーニッドの問題でありながら、どこかルシエの問題にも近いことでもあった故に、その決断が鈍るようなことはあってはならない。

「おれは小隊には入りませんよ」

「……………だよな。今の話はもう忘れてくれ」

ぱっとルシエの服から手を放し、踵を返す。ちらりと見えた横顔

に、未練のようなものは感じられない。シャーニッドとて結果が分かっているながら、そうなければいいとある種希望のような形でこの交渉を持ちかけたにすぎないのだろう。

「一つだけ、年上からのアドヴァイスだ」

「なんででしょう?」

一度振り返ったシャーニッドの視線は、武芸者の持つ特有の鋭さを宿す。

「いつかはおまえも小隊に入らざるを得ない状況になるかもしれん。覚悟は決めておいた方がいいぜ?」

「それは……」

この忠告には頷かざるを得ない。今までは生徒会長の方から特に圧力を掛けられることもなく、こちらの交渉だけがまかり通ったままなのだ。いつかはその代償として小隊へ入隊させられることも可能性としては十二分にあるし、現状で断る手立てはないのだから。

言葉に詰まったルシエを見て、意地の悪い、ニツと笑ったシャーニッドの顔が鮮明に映る。いつも通りの表情だ。

「それにな、小隊に入ればモテモテだぜ?」

思わず掛けられた言葉にため息を零してしまう。気が抜けたように、身体から強張ったものが取れて行くのを感じた。

「先輩はそればかりですね」

「そうか? んじゃま、そろそろ行くわ」

軽く手を振りながら歩き去って行くのを数秒見送った後、ルシエも

家路へと足を向ける。

「小隊長、ね」

なんとなく呟いた声は、暗い夜に馴染んで消えた。

第四話 迷いの中の兆し

辺りに乾いた砂埃が舞い踊る。人工的に植えられた木の陰に身を隠しながら、武芸科の生徒達　ルシエの班員達は息をひそめている。

使われている殺戮はまだ稚拙なものであるが、お互いにどの位置で待ち構えているであろうかがわかっているようなこの状況ではあまり意味もないだろう。作戦上、この位置に陣取るのがもっとも優位に立てる地点なのだ。相手もそれは承知の上で戦いを仕掛けてくるはず。おおよその位置がばれているのを気にしても仕方がない。広い、武芸科用の野戦グラウンドの中央付近で目標がやってくるのを待ち続ける。

誰かが緊張からくる唾を嚙下する音が聞こえた。

『来ます』

端的に告げられた情報を頭で処理すると、それはほぼ同時に起こった。

大気を揺さぶり、三半規管を麻痺させるような轟音が鳴り響く。激しい爆発が周囲で巻き起こったのだ。

念威操者による念威爆雷、だが来ることがわかっていたが故にその奇襲の衝撃も少ない。

「はああああ！」

タイミングを合わせるように、風を切り裂き飛び込んでくる影に続いて三人の武芸者が姿を現す。

短い金髪を煌めかせ、その顔に似合わぬ鉄鞭を自在に振り回す。

ニーナ・アントーク、二年生でありながら第十四小隊の小隊員へ

と選抜された武者。

ルシエは飛び込んできた三人を視界に収めるや否や、身体に巡る剄を迸らせた。

十十十

時間は遡る。

一般教養の授業を終えて、糖分の足りなくなった頭の為に昼食を取りながら、ルシエは隣のベンチに座るフェリに尋ねた。

「二年生との合同集団演習だった？」

「午後からはその予定のはずですよ。あまり大食いしない方が身の為ですよ」

「まさかのご忠告、痛み入るね」

そういつて登校前に購入した大盛りの弁当を胃に流し込む。初めから残すつもりなど毛頭なかったのだが、心なしかフェリがジト目でルシエを見ている気がしてならなかった。

二人がいるのはちょうど中庭で、ここから次の演習場である野戦グラウンドへは通り道となっている。

空になった弁当箱から顔を上げ、遠巻きに早々と移動していく生徒を見る。恐らく今の話に出てきた合同授業の準備をしに行くのだろうと見当をつけてみて、言われてみれば、今日は午前から教室の雰囲気にもとは微妙に違う空気が流れていたかもしれないこと

に気がついた。

新入生が本格的に錬金鋼ダイトを持てるようになったのだ、武芸者として集団演習くらいするのは当たり前と言える。

移動していく一年生の中を、微妙な距離感を保ったまま二年生が通り抜けて行く。しかし、その歩みに淀みはなく、堂々とした態度で歩いて行く様は一年生から見たら委縮してしまつらしい。二年生の集団が抜けて行くのを、一年生は左右に波が割れるように避けて通って行く。

その中に、先日一度顔を合わせたニーナがいることに気付き、その姿を視界に収める。短めの煌めく金髪に、目鼻立ちの整った凛々しい顔をしたニーナが通ると、周りの生徒達も足を止めて彼女を見ていた。

遠目から見ていたルシエもその例に漏れない。

「……何を見ているんですか？」

「何をつて、二年生だな。ニーナ・アントークっていう人なんだが」
「変態」

「なんで!？」

フェリの理不尽な対応に情けない声を上げる。その声は、奇妙な沈黙が流れていた廊下にも届いたらしい。一瞬だけ、ニーナとルシエの視線が交錯した。

「あ、鼻で笑われましたね」

「……言われなくてもわかるよ」

ちらりとこつちを見たニーナに笑われたのをわざわざ報告される。そんなにみつともない姿だったろうか。もともと面識はあってないようなものだから仕方がないのだが、それはそれで少しだけ悲しい気がしたのは言うまでもない。

「……わざわざ高嶺の花に手をかける必要はないと思いますけどね」
「別にそういうつもりじゃないって。あの人が小隊員だから気になっただけだよ」

「本当にそうでしょうか？」
「嘘言っただって仕方ないだろう？」

最近、その手の話が多い気がする。そう思っただけでいいからシエが顔を上げると、心なしかフェリの表情が柔らかく映った。

「そうですね。ほら、わたしたちも行きましょう？」
「あ、ああ」

わずかな変化ではあるが、不機嫌だったり、機嫌が良くなったりと忙しいフェリの対処に追われながら、二人は次の演習場へと向かった。

授業が始まる前には、演習場前に既に学生達が揃っている。一年生、二年生のクラス同士が綺麗に並んでいるが、二年生側の落ち着きに対して一年生側には緊張した空気が流れていた。

一年という差は意外と大きい、それはルシエ自身が驚くほどに自覚していることだ。

いや、そもそもそれを言い出せば一日一日がとても貴重だと言う話になるだろう。何もかも積み重ねの上で今の自分が成り立っているのだから。

用意された壇上の上に、上級学生が立つ。スピーカーの類などは一切なく、素の声だけで説明を始める。室内とは違って声は通りにくいだろうに、そう思いながらルシエは視線を向けていた。

「今から始める演習は、一年と二年の各学年の対抗戦だ。こちら側で事前に七人の部隊を編成してあるので、班ごとに分かれ、指示通り演習をこなすように。一年にとっては、錬金鋼ダイトを使った初めての本格的な戦いだ。二年に軽く胸を借りるつもりで挑め。二年は慢心せず、己の実力を見せつけるつもりでかかれよ！ なお、演習と言つて気を抜けば痛い目にあう、各々心して取りかかるように！」

そう締めくくり、各班ごとに名前を読み上げていく。二年で聞いたことのある名前は二ーナだけで、どうやら彼女が班の隊長らしい事はわかった。

一年の班で隊長なのはガレルだ。彼は一応第五小隊の小隊員であるのだから、順当だろう。もっとも、一年同士でやり合うことはないので、余計ないざざが起ることもないだろう。

「一年坊なんかと演習なんて意味がないぜ」

「そこ、静かにしないか」

二年生の中の誰かがそうこぼしたのを、上級学生が聞き咎める。叱責を受けた二年生が小さく舌打ちしたのが聞こえ、その周りもそれに賛同しているような囁きが流れる。

侮られている。一年生の誰もがそう感じ、半分は仕方がないといった風か、言わせておけばいい、といった者。もう半分は、その侮りに対して怒りを覚えたものだ。なまじ武芸者と言う生き物はプライドが高いせいで、他クラスと混じるようなこういう演習の時はよく荒れることがある。

まさか、二年生との合同演習でこんな荒れ模様が展開されそうになるとはさすがのルシエも思わなかったが。

「あなたは怒らないんですか？」

「おれはどちらでもいい。言いたいやつには言わせておけばいいさ」
隣からかかったフェリの声にルシエは興味のない素振りを見せる。実際に、興味がないのだ。はなっから眼中にない、とまでは言わないが、火に油を注ぐような真似をすることは避けた方が無難であるということもある。

「やめないか！」

ざわめきが徐々に大きくなったところに、上級学生ではない者から声があがる。

張りあげられた声は、不満の重なる声の中を通り抜け、やがて静寂が戻る。

声を出したのはニーナだ。

「本番でも、今のように慢心して臨むつもりか？ 油断は敗北を招く、不満があるなら次からこの演習に意味がないと言わせるくらいに実力を見せつけてやればいい。それが出来ないというのならばここでいくらでも不満を垂れ流せばいいさ。ワタシはごめんだがな」

彼女の表情の真剣さから、その言葉に偽りがないことが伝わってくる。多少嫌味が利いていたとはいえ、まったくの正論に文句を零していた生徒も顔を引き締めなおした。瞬く間の内に流れていた嫌な空気が、『やる気』へと化学変化している。

ルシエの目に、ニーナの胸に光る第十四小隊のバッジが映った。それは今の彼女の在り方を主張しているように輝いている。

「まったく、重そうだな、あのバッジは」

「つける予定でもあるんですか？」

飛んできた皮肉に、思わず渋面を作ってしまった。

「いや、そういうわけじゃないけど」

「……だったら、そんなこと考えるだけ無駄です」

「そういうもん、かねえ」

俯いてぼそりと言うフェリに対し、頬を掻きながら返答する。やはりフェリにとっては小隊という存在はあまりいいものではないらしい。フェリもルシエと同じで、理由は違えど、小隊に入る気はないからであろう。

「ルシエルディア・ラグナイト！」

「は、はい！」

突如挙げられた名前に、少しだけ動揺して返事を返す。

「第三班の隊長だ、しっかりこなせよ」

どうやら、班の隊長に選ばれたらしい。ふと、こちらを見ている視線に気づいてそちらに目を向けると、ガレルがこちらを見ていた。だいぶ前だ、ルシエがゴルネオに自身の過去を話したのは。それからガレルからの接触もない。ゴルネオが言い含めてくれたのだろうか。

「いや、そこまでの義理はないか」

そもそも、ゴルネオ自身がどう思ったのかもわからないというのに、それは都合のいい考えだろう。

まあ、今考える話でもない。そう思考を切り離れたときだった。

「？ 何の話ですか？」
「何でもない」

短く答えたルシエにフェリは首をかしげた。

編成を終え、各班ごとに野戦グラウンドの地形を把握し、作戦を立てる。

演習内容は、小隊対抗戦のようにフラッグの破壊、または防衛だ。一年生側で各班が攻撃か、防衛かを選択できる。

一年生のほとんどの班が攻撃側を選択する中、ルシエの班は防衛を選択した。

「ラグナイト、本当にそれで大丈夫なのか？」

同じ班となった生徒がルシエにそう尋ねる。どうやら他の班と攻め方が違うことが不安らしい。率先して攻撃側を選んだガレルに触発されていることもあるだろう。

「問題ない。攻撃側の方がむしろやりにくいくらいさ」

攻撃側の勝利条件は、部隊員全員を戦闘不能にするか、フラッグを破壊すること。おそらく、ほとんどの班が二年生よりも武芸で劣っているだろうことを把握し、奇襲によるフラッグの破壊を考えるだろう。

だが、それでは負ける。

一年生側よりも、自分達の力量をよくわかっている二年生側は、正攻法で負けるはずがないと思っている。一年生はついこの間、自前の錬金鋼ダイトを授業で使えるようになったのだ、ツエルニに来る以前

はわからないが、それでもその実力の差は明らかだろう。

ならば、負ける条件として可能性が最も高いのは奇襲だ。一年が考えそうな作戦を二年生が思いつかない道理はない。例えばシエが学生が思いつかないような奇襲に対して有効な策を持っていたとしても、事前に警戒されていた上での奇襲では効果は薄い。何より作戦に実力が伴わなければ成功率はぐんと落ちる。

以上から、警戒はより厳重に行うとみていいだろう。

だが、防衛側ならばどうだろう。

防衛側の勝利条件は、フラッグを時間まで防衛する、または攻撃側のリーダーを戦闘不能にすること。

二年生側はフラッグを奪いにくるだろうか。

「二年側は、この演習事態に不満も持っている。更に、アントーク先輩の熱弁で気がはやっているはずだ。さっきのあの空気を感じたんだったら、わかるだろう?」

「そりゃ、まああんな正論言われねばねえ」

「ニーナ先輩、さすがの小隊長って感じだったし」

どうやらクラスメートも同じような空気を感じたらしい。嬉しい誤算としては、先ほどの二年の挑発に怒りらしい感情を持った生徒がないことだ。それらはほとんど攻撃側の班に入れられている。似たようなタイプ同士で編成したのだとしたら、この上級学生はかなり優秀だ。

「だったら、向こうが狙って来るのは一つだ」

一年生側全員の戦闘不能。

もっともシンプルに実力の差を披露できる方法だ。フラッグの破壊を華麗に行うことも重要かもしれないが、これは小隊対抗戦ではない。フラッグの破壊はあくまで演習上のルールではないのだ。

最悪、ルシエだけが生き残ればいい。しかし、そういう展開になればフラッグを取りにくだろう。と、なればこちらがやれるのは隊長を討ち取ることだ。この方が攻撃側となつてフラッグを破壊するよりも遥かに難易度は低い。

ガレルはそれを承知で挑んだのだろうか。いや、なんとなく彼は“勝つこと”よりも“勝ち方”を選びそうなタイプだ。それで攻撃側を選択したと言われた方が納得しやすい。

脱線してしまった思考を引き戻す。
皆が、地図の上で頭を捻っていた。

「だけど、もし向こうがフラッグを狙ってきたら？」

「その前に、念威操者からの情報があれば対処できる。そうだと、ロス」

作戦図から顔を上げて、フェリに向き直る。ルシエとフェリは偶然にも同じ班だ。彼女ほどの実力を持っているならば、隊長に選ばれそうなものであるが、フェリはいつも手を抜いて武芸の試験を受けているらしいので実力はそれほど知れていないのだ。

「さあ、どうでしょう」

「ま、適度に頼むよ」

案の定ではあるが、どうやら今回も本気を出すつもりはないらしい。まあこれだけ長い間、一度も心変わりをしたことがないのだから、いい加減ルシエもわかっている。向こうと変わりがなくらいのレベルで働いてもらえばちょうどいい。

「彼女は……可愛いけど性格に難ありだな」

「天の邪鬼なんだよ、基本的にね」

「だけどそこがたまないと一部でファンがだなあ」

「おいおい、なんでそんなことに……」

「知らないの？ ラグナイト君って結構疎いんだね」

疎いと言われても、と女生徒に苦笑しながら返す。他にも男子生徒があれやこれやと話題を振って来る。時間はあまりないというのに、話が盛り上がる。

そうして、班員と普通に会話している自分に驚く。それがフェリをだしにしたことであるのに少しだけ抵抗はあるものの、初めて話したはずなのに特に問題はない。

それが不思議でしかたなかった。

気にし過ぎていたのだろうか、周りの目というものを。

粗方の作戦が決まったところで、班員達が待機所へと移動していく。他の班員の試合を見る為だ。

そこでフェリに顔を向ける。なんとも言えない微妙な表情だ。終始会話に参加するようなことはなかったが、それでも輪の中から外れるようなことはなく、黙っているけど存在感を主張する、なんとも不思議な立ち位置にいた。話題の中心が彼女だったのだから、仕方がないと言えば仕方がないのだが。

「人をだしにするとは、なかなか外道ですね」

「外道って……まあほとんど初対面の人に性格悪いって言われたやつと良い勝負だね。クラスメートだけど」

「違います、性格に難あります。決して悪いと言う意味ではありません。訂正を要求します」

「はいはい、わかったわかった」

そんな風に適当なやりとりをかわしていると、不意に訪れた沈黙に、フェリが足を止めた。

「……あなたは、どうするつもりなんですか？」

「え？」

「小隊員にはなりたくないと言いながら勝つ気満々じゃないですか」

「ああ、いや、だってなあ」

しどろもどろになりながら、フェリに説明しようとするが、尚もフェリは引き下がらない。

「この演習で勝てばまたあなたの注目度は上がってしまうんですよ？ それだけの実力を持ちながら、どうして小隊員にならないのか、みながみなそういうに決まっています。そのとき、今までみたいのらりくらりと断ることはもうできないかもしれないんですよ？」

「……確かに、そうかもしれないな」

「だったら、あなたは負けるべきです」

断言される。負けるべきだと。そうすることが、恐らく今後生活していく中で一番いいんだろうとルシエにもわかっている。自分に価値がないことを周りに知らしめるべきであり、小隊に入れるべきでないと判断させるべきなのだ。

だが、譲れないものがある。

「それはできない」

「どうして!？」

一瞬の迷いもなく、ルシエは即答した。

「おれは武芸者だ。自分の武芸を貶めるようなことは もうしたくないんだ」

「っ!」

卑怯かもしれない。踏み込ませない過去を引きあいに出しているのが、フェリにも伝わっているだろう。

自分の中で、答えは出始めている。だが、それをどう形にすればいいのか、それが正解かもわからない。

少しずつ、自分の中で何かが変わり始めていたことを自覚している。

時間がそうさせたのか、それとも周りがそうさせたのか。

「とにかく、今はなるようにしかならない。そうなったときに考えればいいさ」

「……あなたにも楽天的な考えがあるんですね、意外です」

「失礼な、ロスが想像するような堅物が、今まで友達としていられたと思う？」

「かといって、シャーニッド先輩のように軽薄じゃない、器用貧乏なだけなんですけどね」

「なんでそういうこと言うかねえ。ま、一応褒め言葉として受け取っておく」

そう言いあいながら、フェリと待機所に向かう。

案外、人の目を気にしなくなったのは彼女のおかげかもしれない、そう思った。

有力株と思われていたガレルの班は敗北した。

作戦を支える隊長であるガレルを集中狙いし、班が一気に崩されたのだ。奇襲はやはりリスクが高い。これから戦う別の班たちは恐らく躍起になって攻めるか、同じように敗北するだろうとルシエに予想させた。

「君が第三班の隊長か？」

ニーナ・アントークだ。てっきり第一班で、ガレルと当たるものだと思っていたが、特にその班番号に実力的な区別はないらしい。口ぶりから、彼女が第三班、つまりルシエ達と当たる相手だ。

「はい、ルシエルディア・ラグナイトです。よろしくお願いします」

「ああ、ワタシはニーナ・アントークだ。こちらこそ、よろしく頼む」

ニーナから手が差し出される。

一瞬、その意味がわからなくてじっと、その手を見つめてしまう。

「ん、どうかしたか？」

「ああ、いえ。先輩は礼儀正しいんですね」

なんともおかしな言い回しになったことに発言してから気付く。思い切り上から目線の発言だ。しかし、ニーナは特に不快になつたわけではなく、微笑を零しながら答えた。一瞬だけ、その笑顔に見惚れてしまうが、背中に向けられている冷たい視線を感じとって表情を引き締め直した。

「はは、すべての二年が先ほどのように思っているわけではないさ。言っただろう？ 油断は敗北を招く。対等にやるならば、相手を敬

うことを忘れてはいけないと思うからな」

「へえ、さすがですね。ですがこちらは一年ですよ？ ある程度は手心を加えていただけるとありがたいのですが」

思考を巡ったのは、ニーナが挑発に乗るか、どうか。おそらく色々ふっかければ乗って来るだろうが、それをするとこちらが一方的な悪者になるような展開しか望めないだろう。

「負ける気はないし、手を抜く気もないさ。ワタシはそうというのは嫌いな夕子でな」

「……そうですか、お互い頑張りましょう」

「そうだな、良い勝負にしよう」

さわやかに背を向けて、ニーナは班員達のところへと戻って行った。

どうやら、良い方向に話が転がりそうだ。そうルシエは思った。

サイレンが鳴り響き、戦いの始まりを告げる。

あの短い間で作戦を変更させるには、少々無理があった。

「アントーク先輩が乗って来るか、否か」

ルシエは、班員二人を連れて中央に布陣し、敵を待つ。

試合前に話した感じでは、彼女は正攻法を好む性格だ。もしもそうでないというのならば、よほどのためきと言わざるを得ないだろう。それとも、ルシエに女性を見る目があまりないというのも説としては有力である。

しかしこの場合、正攻法といっても正面から来てくれる、そっ

う確率が高いと思っただけで、奇襲やフラッグ破壊の為に二ーナがそちらに向かう可能性も決してゼロではないのだが。

「レストレーション」

アイアンタイト
鋼鉄錬金鋼に剉を通し、復元。

とにかく作戦がどうなるかなどわからない。自分は常に全力を出すことに集中すればいいのだ。作戦変更はフェリの情報に左右されるだけなのだから。

ルシエの右手に、片刃の片手剣が握られている。

形状、質量、グリップとすべて設定は過去のものと同じはずなのに、この錬金鋼タイトはどこか、ほんの少しだけ違和感を感じさせる。当初は、黒鋼錬金鋼クロムタイトに慣れ過ぎたのだろうかと懸念していたが、そういうわけではないらしい。

ブラチナタイト
白金錬金鋼を握り、自分の剉を思う存分振るえたときとの感覚のずれがそうさせているのだ。鋼鉄錬金鋼アイアンタイトにしたのは今の剉の量で扱うには丁度いいという理由があったから。

それだけだ。そう言い聞かせる。

「来ます」

そう告げられて念威爆雷を受けたとき、その考えが的中したことを確信する。

現れたのは二ーナとそれを護衛するように付いている二人。

奇しくも三対三の図が出来上がる。他の隊員は狙撃か、はたまたフラッグを取りにいったか。

どちらにせよ、ここで二ーナを討ち取ればいいだけの話。

「外力系衝剉、閃断」

自身の剄を剣に収束させ、加速させた斬線を牽制として放つ。放たれた剄は土を巻き上げ、木々を薙ぎ倒す。不意を打ち、連続して放たれた閃断によってニーナと護衛を引き離すことに成功する。

「外力系衝剄だと!？」

ルシエの放った剄にニーナは一瞬呆けたようだが、構えは解かずにルシエと相對する。

「一年は内力系活剄しか使えないとでも？」

「まさか。予想以上の実力に驚いただけさ!」

事前に打ち合わせた作戦では、ニーナとやり合うのはルシエだ。今まで同じクラスで遠巻きにでもルシエの実力を見ていた班員達はすぐに納得してくれた。周りの彼らは適当に戦力をばらけさせることが目的だ。衝剄のどさくさを利用して、うまい具合に二人ずつが左右に散って行く。

剣の切っ先をニーナに向け、少々芝居がかった風に声を掛ける。

「お膳立ては整いました。おれを倒さなければフラッグへは辿りつけませんよ?」

あくまで冷静に、しかし相手の心をその気にさせる言葉を選んだ。さあ、食いついて来い。

「いいだろう、一対一の勝負受けて立つ!」

ルシエの言葉で、彼女の表情は武者のそれに変わった。戦いの中で高揚を感じる、剄と自身が一体化するようなあの感覚だ。

普通に考えれば、この状況は畏だ。彼女が倒されれば負けは確定するのだから。

だが、こちらには隠している手札はない。強いて言うのならルシエの実力、それだけだ。

向こうは、彼女の実力を信頼してのことか、はたまた狙撃による支援があるのか。周りに変わった動きはない。

それらを頭の片隅に置いて、ルシエはニーナと相対する。

「はああ！」

ニーナが雄たけびを上げながら、二振りの鉄鞭をルシエに振るう。綺麗な型だ。弛まぬ研鑽の元にこの動きは形作られていることが容易にわかる。

しかし、だからこそ読みやすい。

ニーナの踏み込みは申し分なく、まともに喰らえば肋骨を砕くであろう一撃。だが、ぎりぎりまで引きつける。引きつけ、巧みな足捌きによって身体をずらす。

「っ、かわした!？」

駒のように遠心力を利用して再度の一撃がニーナの鉄鞭から放たれる。しかし、先ほどの一撃とは比べ物にならないほどずさんな攻撃だ。

ただの学生だったならば、この力任せの一撃にねじ伏せられていたかもしれない。ルシエがただの学生だったならば、という話だが、動きが流れに乗っていないのだ。

遠心力を利用していると言っても、本来の型の動きから逸脱したものだ。二振りを同時に当ててきてはいるが、剽の流れも、身体の動きも連動していない、だから脅威など微塵も感じない。

それでも、互いの錬金鋼ダイトは音を奏でた。

ギーン　鈍い、重質量の金属がこすれあう音が響く。

近接戦闘だ。このまま数合の打ち合いが続く。

互いに衝剄を混ぜあい、一合打ち合うごとに剄を散らす。

ほとんどがニーナによる一方的な攻め。目まぐるしく立ち位置を変え、鉄鞭を受け流していく。

決して距離を空けるようなことはしない。すれば、いるかもしれない狙撃によつて不意を打たれることになる。ルシエならそれに応じて見せるだろうが、致命的な隙になってしまふことに変わりはない。ならば、安全策を取る動きの方がリスクが低い。

強引に攻めるよりも、守備に徹した動きだ。限られた時間の中で、焦りを感じるのは防衛側よりも攻撃側のはず。

実際、当たらず、かといって受けられても流されてしまふルシエの動きに、ニーナは焦りを感じていた。

「口の割に逃げ腰だな！」

「先輩が攻め切れていないだけでしょう？」

「この、言わせておけばっ！」

ニーナの内力剄活剄がより大きく高まったのを感じとる。小出しにしてきた一撃とは違う、剄によつて補正された速度、威力、それに加えて大振りな一撃がルシエを襲う。

「ぐっ！」

ルシエはぎりぎりまで威力を殺すようにその一撃を受ける。

互いにキスできるくらいの距離にまで近づく鏢迫り合いを演じる。

ニーナは不敵に笑って見せた。

力に、剄に自信がある。だからこそできることだ。ここから先の力比で生まれた隙を突くつもりだろう。

ルシエには鏢迫り合いをするような余分な時間はない。動きが止

まることは狙撃の格好の的だからだ。

「罅迫り合いだ、こちらが有利に立ったな！」

二振りの鉄鞭に対し、ルシエの片手剣では質量的にも、頑丈さでも罅迫り合いでは荷が重い。

だが、その程度ひっくり返せないわけではない。

「それはどうですかねっ！」

声が顔にぶつかり合う。

ルシエが言い放った瞬間、ニーナの視点が横に流れた。

ニーナの体勢が崩れる。決して力比べではない。ルシエの活剋は先ほどと同じで、適度に維持されたまま変動はない。

身体を引いたのだ。そしてわずかに崩れたバランスを突かれた。蹴りだ。ルシエの強烈な回し蹴りがニーナのわき腹に突き刺さる。まったく予想していなかったその一撃に、ニーナの身体は為すすべなく地面を転がった。

「ば、かな。片足だけの踏ん張りでワタシの鉄鞭を抑えたというのか!?!」

不意打ちに近い一撃に、身体が言うことを聞かないのか倒れたままにニーナが驚きを口にした。

転がるニーナを追いかけ、その背中を踏みつけて身体を押さえる。

「できるんですよ。剋とはそういうものです」

より正確に言うならば、体術と剋の練度の高さがそれを為すのに必要だ。入学当初よりも遥かに剋の通りが良くなってきた今だから

こそ出来たとも言える。体術面ではすでにほとんど技術を取り戻しつつあることもそうだ。あとは剋と身体の連動がスムーズにいけば、昔ほどとはいえないまでも、納得できる領域までいけるだろう。

もつとも、入学時でも負ける気はしなかっただろうが。

首筋に剣を当てると、ニーナが降参の意思を示し、両手を挙げた。

「まさか、こんなにあっさりと……」

俯いて、そう呟くニーナにルシエは掛ける言葉が見当たらなかった。

終わりを告げるサイレンが鳴り響く。勝利はルシエの手によってもたらされた。

その勝利がどういう結果をもたらすのか、ルシエ自身わかっていながら。

第四話

迷いの中の兆し（後書き）

長いですね。もっと小出しにすればよかったです。キリが悪いのでそのまま……。その分時間かかりましたが（汗）
こっからが本番ですので、頑張ります。

当作品をお気に入りに登録してくれた方、評価をくださった方、またお読みになってくれた読者の皆様に感謝を。これからもよろしく
お願いします。

第五話 二一ナの小隊

集団演習で勝利を収めた。

その事実が、ルシエの現状を大きく変えてしまう出来事だったのは言うまでもないことだろう。

しかし、現実にはルシエが予想した展開とは大きく違っていた。学園都市ツエルニの中で、今もっともホットなニュースによって、ルシエの勝利という噂はほんの小さな出来事で終わったからだ。

それは第十小隊所属、シャーニッド・エリプトンの除隊による影響だった。

その展開がどう転がって行くのか、まだわからないままだった。

「いやあ、まいったまいった。まさかこんな大事になるとは予想してなかったぜ。思ってたよりも世間様は注目してくれちゃってたみたいだな」

「笑い事じゃないんですけどね……。そりゃ、こんな閉鎖された都市の中の娯楽なんてスキャンダルとかくらいしかないからなんでしょうけど。ほら、ここ見てください。週刊ルツクンに見事パパラッチされて見開きに大々的に載ってます」

「ほんとだ、そりゃこんときはオレも向こうもそれどころじゃなかったしなあ。撮られても気付かないって」

そんな呑気な会話を繰り広げるのはシャーニッドとルシエだ。二人とも声のトーンはすこぶる軽いのに周りの雰囲気はとてつもなく悪い。ちなみに、ルシエの言っている現場はシャーニッドが派手に

第十小隊の隊員に殴られている様子だ。

「ごほん。ラグナイト、勤務中だぞ。それにエリプトン君、用がないなら出て行ったらどうだい？ 仮にもここは」

「ああ、都市警察なんだろう？ わかってるわかってる。ちよいこの堅物を借りてくだけだつて」

そういつてルシエを指差して、署員に軽口を叩く。ああ、この人はルックン信者だから余計な噂を流さなければいいのだけど、なんて半ば本気で思いながらルシエはフォーメッドをちらりと窺う。

「すぐに戻ります」

「別に急な仕事はない。今日はもうあがっていいぞ」

そういつてウインクを飛ばすお茶目な上司を見て苦笑する。

『できることならうまく引き込め』、そういう意思がはつきりとわかってしまった自分に嫌気が差しながら、シャーニッドとともに退室する。

都市警察を出ると、空はまだまだ青く吹き抜ける風は以前よりも冷たさを増していた。二人はどこへともなく歩き出した。シャーニッドに進行方向を任せているので、どこへ向かっているのかはわからない。

シャーニッドが部隊を抜けたのは、演習から二日経つか経たないかという短い間だった。

それから一週間経った今でも、その話題が鎮まることはなく、一体何が原因だったのかということが延々騒がれている。

それだけシャーニッドの言うとおり注目度が高い話題だったのだろう。三年にして第十小隊の中で主戦力となっていた三人のうちの一人が抜けたという事実は。

「それで？ 未だに目の上が青くなっていますが、それは化粧か何かですか？ いまどきそんなセンスの人は中年を過ぎたおばさま方ですら敬遠していますよ」

「こんな重傷者を見てまずそれとは恐れ入るね。フェリちゃんに染められたか？」

「あなたはすぐにそれですね。わざわざそんなことを言う為に来たわけじゃないでしょうに」

「おまえさんの冗談を拾ってやったつてのに散々な言われようだな、おい」

はあといつもの調子で肩をすくめるシャーニッド。その態度にはいつもと同じ軽い雰囲気を感じとる。

この一週間ほどの間で、気持ち切り替えたのだろうか。

同所属の隊員、デイン・ディーに決闘を申し込まれ、何も反撃せず一方的に殴られ続けたということだ。先ほどの写真からその凄惨さが伝わってくる。

あと一歩審判が止めるのが遅ければ武芸を続けられない身体、剽脈を壊していてもおかしくはなかったという。その話を聞いて思うところがないわけではないが、第三者のルシエが何かをシャーニッドに伝えられるわけがない。彼は彼なりに問題の解決を測って、やるべくしてやったことなのだから。

しかしそんな怪我を負っていたとしても、武芸者の活剽があれば三日で表面上の傷くらいは治癒できるはずだし、一週間あれば通院と合わせて完治まで持っていけるだろうに、彼にはそうした様子がない。

「自戒のつもりですか？」

「そんな高尚なもんじゃないさ。ちよつとした気分だよ」

気分。そういつてはいるが、その表情に一瞬だけ影が差したのを

ルシエは見逃さなかった。

「まあ何にしても、こちらは先輩にお礼を言っておこうと思います。ありがとうございます」

「はあ、何の話だそりゃ」

ルシエが演習の内容を話すと、シャーニッドはげんなりとした風
に顔をゆがめた。

「なるほどな。うまくオレの存在が隠れ蓑になったと」

「ええ。そうなりますね」

「は、しかしそれでおまえさんに考える時間を与えてやれたってな話だったら、この件をこの時期に起こしたのは正解だったかもな。

いや、むしろそれがあつたからそうい話を持ち上がったのか？」

「一体、何の話をしているんですか？」

一人、顎に手を当てて考え始めてしまったシャーニッドにそう訊き返す。何やら、ルシエの知らないところで不穏な動きがあるように感じてしまうのも、今のシャーニッドを見れば仕方のないことだろう。

「そのうちわかるさ。オレからわざわざ切り出す話題でもなかったようだしな」

「気になりますね。少しくらい教えてくれないでしょう。仕事
中に乗り込んできたんですから、かなり重要な用事だったんじゃない
いですか？」

「そう食いつくなつて。しつこい男は嫌われるんだぜ？」

「あれだけ言い寄ってきてよくまあそんなことが言えますね」

「……言い寄ってきたとは穏やかじゃありませんね」

え、とルシエが顔を向けるとそこに立っていたのはフェリだ。なぜと思う隙もなければ、どうして彼女が自分の両腕で肩を抱くようにしているのかもわからない。小刻みに震えているのは冬の風に当たりすぎたからだと思いたいのだが。

「あなた達がそういう関係だったとは……。道理で女性に興味を抱かないわけです」

その言葉にルシエが絶句したのは言うまでもない。

「違う、断じて違うぞロス。妙な勘違いはやめておけ、おれはそっちのけはない！」

周囲に人がいるにも関わらず、絶叫にも近い声を挙げながらフェリに誤解を解くべく説明する。何がどうしてこうなったやらとか思わないでもない。フェリの無表情の中に、小さな笑いが起こっていたが、動転していたルシエは気付かない。

「まじか、道理でフェリちゃんの話題を出すたびに慌てて関係を否定していたのか。すまない、オレは男とそういう関係になるわけにはっ！」

「はは、怪我人だからって容赦はしませんよ？」

後ろから更に火種を投下しようとしてきたシャーニッドに爽やかな笑顔で拳を鳴らす。『しゃらーっぶ』という心の声が伝わったのか、さすがのシャーニッドもごくりと唾を飲み込んで黙りこんだ。理解が早くて助かります、とは言わない。

「連れてきてくれたか、シャーニッド先輩」

唐突に掛けられた言葉に反応してそちらを見た。

「あ、ああ。かなり手間がかかったけどな」

声を掛けてきたのは間違いない。先日、ルシエと戦った二年生、第十四小隊の隊員だ。

「アントーク先輩？ どうして、ここに……」

最後は尻すぼみとなる。いるのは当たり前なのだ。フェリに弁解するのに夢中になってはいたが、シャーニッドと共に歩いてきた先は練武館前だ。それに加えて夕方この時間、小隊員が武芸に励んでいるのも頷ける。

「一週間ぶりかな、ラグナイト」

「え、ええ。そうなりますね」

内心、どういふ顔をすればいいのかわからずに、曖昧な答えを返す。フェリはルシエのうるたえた様子に思うところがあったのか、そんなルシエのつま先を思い切り踏みつけてきた。

「　　っう！！」

「それで、わたしとこの人呼び出して、一体どんな企みですか？」

「は、おれとロスを？」

混乱したのはほんの一瞬のことで、思考はすぐにシャーニッドと二ーナの会話に戻る。シャーニッドがルシエを呼び出し、二ーナがフェリを呼び出したのだらう。

そういふことか、と脳内で納得して二ーナの引き締められた顔を見る。用件の方も、どうやらルシエの予想通りなのだらう。

少しの間だけ視線が交錯すると、沈黙が生まれる。一向に進まない話に、シャーニッドが空気を読んだのか用件を切り出そうとした。

「実は、オレ達はな」

「いい、ワタシが説明させてもらいます」

それをニーナに片手で制されて、シャーニッドが黙る。声にならないため息を吐きだして肩をすくめる様は、もう染みついた癖なだろう。彼は意外と苦勞人気質なのかもしれない。

切り出される内容は分かり切っている。どうしてシャーニッドが関わってきたのはわからないが、十中八九小隊入りへの勧誘だろう。

今から、どんな手を使ってルシエとフェリを小隊に入隊させようとするのか。考えられそうな交渉材料を引き合いに出して思考を進める。

ニーナが口を開いたのはルシエが脳を回転させ始めた時だ。

「単刀直入に言う。二人とも、ワタシの小隊に入ってくれないか？」

「って、直球過ぎませんか!？」

ルシエの狼狽した声に、ニーナの後ろで笑いをこらえているシャーニッドを睨みつけると、「そういうやつなんだよ」と口ばくで伝えてきた。彼女ほど誠意という言葉が似合う人もいないだろうと考えたところで、先ほどのシャーニッドへの感謝の言葉を自分の中で静かに取り消す。

「拒否します」

しかし、フェリの方は予想がついていたのか、うるたえるルシエを尻目にはつきりと拒絶の言葉を出した。だが、ニーナの方もそれ

だけで簡単に引き下がるようなことはしない。

「どうして？」

「わたしには小隊員になるほどの実力はありませんから」

そう淡々と口にして、フェリは踵を返す。ルシエは、有無を言わずに交渉を決裂させる様をある意味でその信念が固いものであると感じた。

ロスがそう決めているのだ、それ以上とやかく言っても交渉は進まないだろう。この場でのこれ以上の会話は無駄だと踏んだ。

早々に切り上げるのが吉か。フェリが断った手前、自分の話もしづらい。だが、なぜニーナはフェリを誘ったのだろうか。

第十四小隊に彼女を誘うメリットは皆無だろうに。

「本当にそうかな？ フェリ・ロス、君には実力があるはずだ。自分でそうは思わなくとも、これから伸びる才能だってある。ワタシはそう思う」

別れを口にしようとしたルシエを押しとどめたのはニーナの言葉だった。そしてフェリの足も止まった。一瞬だけ肩が震えた。珍しい、彼女が動揺している。

ニーナが言っていることがあながち間違いでないということもある。きっとフェリの頭をよぎったのは会長からの密告か何かだろうとルシエは予想をつけた。

「なぜ、そう思うんですか？」

「集団演習の記録だ。的確な情報を基にした念威爆雷の支援、それに咄嗟の奇襲に対応させる情報収集能力。これだけあれば十分だ、うちの二年でもそうそう実力的に追いつけないものを持っているだろう」

ニーナの指摘に目を見開いたのはルシエの方だ。人に適当にやることを進めて、かつ自分も手を抜くようなことを言っていたというのに。

実は向こうよりも少し上のレベルでやっていた、そういうことだろうか。

それに対する驚きもあるし、それをあの一戦だけの情報から見抜いてしまったニーナのことも見直してしまう。

「さあ、火事場の馬鹿力という奴でしょう。まぐれです」

「……本当にやる気はないのか？」

一瞬だけ震えたフェリの声に被せるように、本当に残念そうにニーナは顔をゆがめた。ルシエは会話が止まった瞬間に自分の疑問をはさみこむ。

「ちょっと待ってください。同じ小隊に念威操者は二人もいららんじゃないですか？ それとも、どっかの誰かさんみたいに急に念威操者が脱退したとかで困ってるんですかね？」

「彼の言うとおりです。彼を誘うのならまだしも、ワタシまでセツトでついて行く必要はないでしょう、うっとうしい」

「う、うっとうしいって、そこまで言う必要はないだろうが」

どうにもこの会話に食い違いを覚えてしまう。フェリもルシエの援護が入ったことで、勢いを取り戻したようだ。

しかし、そのことに気付いたニーナの反応は違った。

「先輩、何も話していないんですか？」

「ん、ああ。そもそも、そんなことこいつらに話したらついてこないだろう」

シャーニツドのさも当然と言わんばかりの回答に、今度はニーナが呆れた顔をする番だった。はつきり言って何がしたいのかわからない。段取り悪すぎでしょう、とか思ったが口には出さない。

「ワタシは第十四小隊ではない」

シャーニツドはとっておきを隠していたと言わんばかりに口元を緩め、フェリはその言葉に眉を跳ねあげる。

心臓が一度だけ大きな胎動を身体に伝える。

どこか、その先を期待している自分がいることをルシエは自覚した。

「第十七小隊、それがワタシの小隊だ」

第五話 二一十の小隊（後書き）

明日も投稿予定です。

第六話　もう一つの始め方（前書き）

時間は少しだけ遡ります。

第六話　もう一つの始め方

自分が何をしてしまったのか、よくわかっている。
失敗したわけではない、間違っただけではない。

ではどうして？

そんな疑問が頭から離れない。

フェリはごろんと横になったベッドで寝がえりをうつ。ベッドの軋みがやけに耳に響いた。ファンシーな人形達が見守る部屋の中で、演習が終わってからこの一週間、フェリは一人悶々とし続けている。もちろん、授業には出席しているが、上の空でこのところ知識が溜まった様子はない。

「まったく、ムカつきます」

それもこれもすべてあの男が原因なのだと自分の中で結論付ける。自分の過去を話そうとしない癖に、それ以上の問いかけを拒絶している彼の言葉が胸に突き刺さってどうしようもないのだ。

その言葉に、表情に、譲れない何かがあるのだと感じてしまった。だから、負けられないと思ってしまった。その瞬間から、手を抜いてはいけないと本能で思ってしまった。

思ったらもう駄目だ。加減しようとしてセーブしようとはしたが、意識の片隅では負けてはならないという強迫観念じみた想いが邪魔をしてしまう。

要は力の采配を間違えた、そういう話なのだけれど、だけどフェリは自分の中でその過程を認められそうにないのだ。

「わからないから、ムカつくんです」

ぼすんと枕に拳をぶつけてみて、返ってきた柔らかかな感触に、のらりくらりとかわす誰かを重ね、また苛立ちを募らせた。

十十十

倒した相手に言葉が見つけれないのは当然だ。

違った結果の中には自分が負けた姿が映る。そのとき、どんな言葉をかけられたところで、それは勝者の偽善でしかない。問いかけられれば何かを答えるだろう。何かを求められればそれに出る限り応えるだろう。

けどそれも偽善だ。勝ってしまったことに後ろめたさはないというのに、ときおりそんな感情が頭をよぎるときがある。

ルシエは悩んでいた。悩んでいたというのも少し違う。

これから先の身の振り方を考えていたのだ。

「会長は何も言ってこないな……」

あの演習があつてから翌日は騒がしかった。小隊所属員でない隊長が二年の班を打ち負かした。ただその事実だけならばそうは騒がれなかったのかもしれない、偶然の産物として杞憂で終わったのかもしれない。

だが、相手はニーナ・アントークだった。ただの二年ではなくそれ以上のお釣りがくる相手だ。

それに、今までの実績もある。

都市警察として活動し、武芸者絡みの犯罪検挙率はトップ、ルシエが参加した者は否応なく逮捕されている。更に、武芸の試験科目に置いては奨学金を取る為に常に結果を出し続けている。はつきり言つて一年に一度の奨学金ランクの更新というものがなければ途中から手を抜けばいいのだが、そういう理由があるために手を抜けないのだ。

実力は小隊員に既に匹敵していると言われる。

実際、並みの学生武芸者ならば錬金鋼ダイトの存在は不要だろう。自身の身体もうまく扱えていないのだ、武器を持ったところで脅威になるはずもない。

ルシエが小隊に入らないのは一重に、自身の過去が絡んでいる。人としても、武芸者としても許されない間違いだ。それをなかつたことになぞ出来はしない。

求められても困る。そう思っていた。自分はその期待に応えることができない、小隊員のように“振る舞う”ことはできても、本当の意味で“小隊員になる”ことはできない。

そればかりが頭の中から離れなかつた。
だが、それも周りによつて変わった気がする。

今では小隊員の身であるガレルは、ゴルネオにルシエの過去を話した。

嫉妬から来るやつかみかもしれない、それともルシエのような行動をしたものが自分よりも実力があることが許せなかつたのかも知れない。

だが、その行動は小隊員らしいのだろうか。

それを一概にルシエが弾圧することなどではしない。納得もできる、理解もできる。しかし“小隊員”というのが言い訳も、嫉妬も、すべてを押し殺してまっすぐである必要があるのか、その件が少しだけ考えるきっかけとなつたのは間違いではない。

シャーニツドとの初めての出会いは最悪だった。

喧嘩を売ってきたと思えば、小隊員になれという。ほとんど入学当初の新人生にそんな態度を取る小隊員がいるだろうか。普通はもっと厳格で生真面目な態度を取るところを、彼は悉く裏切る行動ばかり取っている。

一番最初に、『小隊員』というある意味格別的な地位を持った存在のイメージをぶち壊したのは彼だ。もともと、大口を叩くだけの技量は持っていたということは認めよう。先ほど、学生武芸者が錬^ダ金鋼^{イト}を持ったところと言ったが、彼は例外だ。

まだ本調子とはほど遠いとはいえ、ルシエは彼相手に錬^ダ金鋼^{イト}を使う必要があったのだ。小隊員に強さが求められているのは間違いないと確信した。

ニーナ・アントークは実に真っ直ぐな人物だった。

機関部清掃であったときは、ただの不思議な人だと思っていた。

あれほど柔らかく笑う女性が、小隊員などと夢にも思わない。しかし、それは彼女の一部でしかなかった。

生徒達の前では、まさにこうであれという小隊員というイメージにびたりと当てはまった。彼女以上に武芸者らしい武芸者はそうはいない。いても、それはどこからか借りてきたイメージで作られた張りぼての仮面を持つ者だ。学生武芸者の中で、本当の意味で彼女のように真っ直ぐな人間の果たして何人いることが。

そんな人が、都市を守るために戦っているということを知った。実力はこれからもまだ伸び続けるだろう。彼女の武芸は努力の果てにあるものだと錬^ダ金鋼^{イト}を、剄を交えて感じたのだ。その原動力は小隊員であることなのか、都市を守るためなのか、それとも何か別のものなのかはわからない。

そして、かつての故郷で天劍授受者とあがめられる存在を兄に持

つ男はこう言っていた。

『生きて、お前が殺した武芸者の分まで贖え』

それにルシエは何と言ったか。

同じ轍は踏まないで生きる。そう言ったのだ。

二度と地位を掴むようなことをしない、そういう意味だったはずだ。

だが、何かが違う可能性を考えるように訴えかけていた。

実力を飼い殺し、都市に対して礼を損じているこの行動は果たして正しいのか、どうか。

いや、そんな高尚な考えじゃないのかもしれない。

求められるのなら、誰かの役に立てるのなら、そう思う自分がいるのだ。

都市警察で仕事をするうちに気付いたことでもある。誰かに褒められるというのはくすぐったく、誰かに感謝されるということは代えがたい喜びであることを。

故郷でそんな経験はほとんどなかった。

褒められるのは兄からで、感謝をされたのは数えるほどしかなかっただろう。

もしも、誰かの力になれるなら。それが都市の為であれ、見知らぬ誰かの為であれ。

それはたぶん、良い事なんだと思い始めていた。

第十七小隊。

カリアン会長から新設を許された小隊。どのように小隊の新設を要求したのかはわからないが、交渉を交えたときの雰囲気から彼は相当なやり手だったとルシエは認識している。新造部隊を設立する予定があつたのか、それとも必要性を要請されたのか。

ニーナの表情を見て、恐らく後者なのだろうと判断する。まっすぐに前だけを見るその瞳に宿るのは強い意志だ。何がきっかけだったのかはわからないが、このタイミングで小隊を設立しようなどとカリアンもニーナもよく考えたものだ。

「それで、その新設部隊の隊員は今何人なんですか？」

ルシエはそう尋ねる。それなりの人数を入れる予定があつたのか、新設というからには候補者も大勢いるだろうと踏む。

しかし、ルシエのその問いにニーナは頬を引きつらせ、苦い顔をして見せた。

「ぐ、人数は、三人だ」

「そりゃ正確な数字じゃねえな。一人はダイト錬金メカニック技術師だろう」

シャーニッドは横からニーナの肩に手を置いて、親しげに口を挟むが、それが更にニーナの動揺を加速させた。

「シャーニッド！ 余計なことを言うんじゃない！」

「あーら、先輩に対して口が悪い。どうせ入隊したならばれるんだから隠してもしょうがないだろうに」

「いや、それはそうだが……三人には変わりないだろうが」

何とも子供っぽいやりとりが交わされ、二人の間の力関係を垣間見た気がした。

ダイト メカニック

錬金鋼技術師の人物はわからないが、少なくともニーナとシャーニッドには信頼が置ける、そう思う。

フェリを見る。なんとも微妙な表情だ。ルシエの方を見もしないということは、恐らくどう対処しようか困っている、そう感じているのだろう。

一度断ると言って足を止めた手前ではあるが故の戸惑いか、それともルシエの態度に何かいつもと違うものを感じたせいかな。

「シャーニッド先輩は、どうしてまた？」

その問いかけに、シャーニッドは言葉を詰まらせることはなかった。どちらかというど勿体ぶっている節さえある。

「さあな。強いて言うなら、気分だ」

「相変わらず意味わかんない人ですね」

話せないのならばそれもいいだろう。きっと、今でも綺麗に彼の問題が片付いたわけではないということに気づいてしまったから、これ以上聞くわけにはいかないと思ったのだ。

とりあえず、自分達の問題を片付けるとしよう。

「考える時間をください」

「いいのか!？」

「ほお」

ニーナの嬉しそうな笑顔と、シャーニッドの素っ気ない顔が妙に印象に残る。

「良い結果になるかはわかりませんがね」

「ちよつと勝手に！ わたしは！」

「まあまあ」

文句を言いたげなフェリを黙らせて、彼女の背を押しながら練武館から離れていく。

脛を蹴られたのは言うまでもない。

十一

終始、フェリは黙ったままだった。

無理もないだろう、結果を先延ばしにしたのはルシエだけであつて、フェリは拒否の姿勢を表していたのに、あれではフェリまで答えを保留したようなものなのだから。

随分と歩き回って、そろそろ夕陽が沈みかけている。

誰にも聞かれない話をしようと考えていたのは、お互い様だったのか、向かった先は外縁部。幸い、というか常にだが人影は見当たらなかった。

「それで、どういう風の吹きまわしなんですか？」

「……風向きが変わったのかもね」

「寝言は寝てから言えと、親から言われませんでした？」

「生憎、親はあまりおれに興味がなかったらしいからね」

「それは……」

失言だったかと口を押さえるフェリ。それで怒りが収まったこと

を確認して、自分のずる賢さに少しだけ罪悪感を感じながら、話を続ける。

「そんなことよりも、だ。ちょっとだけ将来の話」

ルシエは鉄柵に両腕を乗せて、沈んでいく太陽を眺める。柵の向こうには有機プレートと汚染獣がやってきたときに対処するための荒れ地が広がっている。さらにその向こうはエアフィルターを超えた荒廃した大地。死の世界だ。

そのとき、ほんの少しだけ頭をよぎったのはこの都市で生きられなくなったときのこと。

「おれ、この都市以外に帰る場所ないんだよね」

「え？」

ルシエの一步後ろで呆けたように声を発するフェリにはどういう意味だかわかってはいないのだろう。

振り返ってその顔を見て、思わず笑みがこぼれた。

「な、からかっているんですか？」

「違うよ。それはホントなんだ」

過去を話すようなことはまだできない。だが、その言葉にフェリは押し黙る。

「だから、この都市にはまだまだ、もつともつと世話になることになる。この学生生活の中で、おれが生きて行くのに必要なことを探さなきゃならないんだ。あ、ちなみに、今一番の候補は都市警察かな」

そんな風に軽口をまじえてみるが、聞いているのかいないのか。フェリは相変わらず黙ったままだ。だが、彼女も身体を鉄柵に預ける。ルシエは夕陽を、フェリは都市の中央を見るように。

「わたしは……まだ何になるかなんて想像もつきません。だから、進む道が見え始めたあなたが、少しだけ、うらやましいです。わたしは兄に縛られているだけで、自分の道を探すことなんてできていませんから」

小さく、内心を吐露するようにフェリは言う。ルシエから顔は見えていないが、きつと伏せていてその表情を見せてはくれないのだろう。

「おれはある意味で自由で、でも別の意味で不自由だからね」

「どういう意味ですか？」

「帰る家がないから自由。だけど家がないからお金もないし、将来どの都市に定住するかなんてのも決まってるから不自由」

指を立てて得意げにそう語ってみる。大した意味はないのだけど、フェリはその様子にほんのわずか、いつもの調子を取り戻した気がする。

「あなたにはまだまだ貧乏学生が似合ってます」

「相変わらず酷い人だな。そんなことばっかり言ってるとうつか見捨てられるよ？」

「じゃあ、あなたはこんなわたしを見捨てるんですか？」

交錯する視線が真実を問う。夕陽に当てられた頬が、フェリの頬を赤く彩る。シルクのような純白の肌が熱を帯びたかのように色っぽく映った。

「見捨てない。友達ってそういうもんでしょ？」

幼いころから、同年代の友達なんていなかった。いるのは、いたのは そんなことは今考えなくていい。

目の前にいる親友に、偽りのない言葉を投げかけた。

「……そう返しますか。あなたらしいといえらしいのですけどね」

フェリは小さく何かを呟いてため息を零し、そして一瞬だけ、はつきりと笑って見せる。

今までのほんの少し口角が歪んだような不器用な笑いとは違う、本当の笑みを。

思わず息を呑んだ。人の笑顔が、これほど感動を与えるのかと動揺すら与えられた。次に紡ぐべきはずだった言葉を思わず見失い、頭蓋に剄をぶつけられたかのような衝撃が奔った。

「う、やばい。かわいいとかそういう問題じゃ」

「え？」

「いや、なんでもない。気にしない、気にしない」

やや慌てて夕陽に向き直る姿はさぞ滑稽であっただろうが、そこで冷静な対応をできるほどルシエは慣れていないことを経験している自覚があった。

二、三度、フェリに気付かれないように深呼吸する。そうして、ようやく呼吸を落ちつけた頃、先に口を開いたのはフェリだった。

「都市を、守るためですか？」

「はは、おれ一人に何ができるかなんてわかんないけどね」

「現実的ですね」

「夢を見て、足元をすくわれるのはごめんだから」

そういつて軽く笑って見せる。一瞬だけ過去が頭をよぎってしまった。悲壮感が出なければ良いのだが、そう思うがフェリに気にした様子は見られなかった。

フェリが一つ、息をついた。

「小隊、入るんですよね？」

「ああ、そうするつもり」

「そうですか」

「うん」

それ以上の言葉はいらなかった。たぶん、フェリはその経緯を問うようなことはしないのだろう。聞かれても、ルシエは細部までそれに答えられる自信はない。

だがそれでも、これだけのやりとりで分かりあえたことが不思議なくらいに、ルシエの考えたことが伝わったような気がした。

説得でもなければ、強引に言いくるめたわけでもない。

納得してくれたし、理解も示してくれた。

それがルシエの背を後押ししてくれた。

「ロスは、どうする？」

緊張も何もなかった。ただ言葉が自然と口から零れ出していた。

翌日の早朝。

冷たい空気の中、振るう鉄鞭の音が練武館に反響する。

新設された部隊の手続きは未だに済んだわけではなく、部隊として組める最低限の人数である四人を集め、カリアンの方で承諾許可を出すための議会で話し合う機会を設けなければならない。

つまり、現状の第十七小隊とはあくまで仮だ。

それでも練習場所として練武館が割り当てられているのは、気が早いカリアンの手際によさか、それとも人数が集まると確信しているからなのか。

一通りの型を終わらせ、一息つくとしャーニツドが声を掛ける。

「やっぱり無理があつたのかねえ、おとなしく他のやつをスカウトするか、来年の新入生に期待した方がいいんじゃないの？」

「あいつでなければ駄目だ」

「こだわるねえ。もしかして惚れた？」

ひゅん、としャーニツドの目の前で鉄鞭が振り下ろされる。危うく鼻をかすめるところをだ。

「断じて、違う」

からかいのつもりで口にしたのだが、ニーナの神経を逆撫でたらしい。まだ正式な小隊として認めてもらってはいないのだ、不安だということもしャーニツドはわかっているつもりではある。

「はあ、いらいらすんなよ。二人しかいない第十七小隊、早くも瓦解ってか？」

そう言ったときだった。

扉の動く気配を感じ、二人は振り返る。

「すみません、遅れました。訓練ってもう始まってますかね？」

シャーニッドは口笛でルシエを迎え、ニーナは満面の笑みでこたえる。

「バカモノ、少し遅刻だ！」

ニーナが浮かれているのはルシエでもわかった。意外と感情が出やすいのか、よく言えば素直なのだろうと思う。

ルシエが訓練室に入ると、喜んでいた顔から一転して少々表情を暗くした。予想されたもう一人の姿がないのが原因だ。

「あー、ロスは、その……」

「……フェリちゃんの方は、言わずもがなってやつか」

「そうだな、彼女くらいは念威操者を探すとかなりの手間だが。念威操者は新入生の中から探す方がいいかもしれない」

シャーニッド、ニーナがそう口にする。ルシエも気まずげに視線を外した。

「遅くなりました」

その言葉に、ルシエ以外の二人は啞然として、信じられないものを見るようにフェリを見た。

「フェリちゃんもなかなか役者だねえ」

「一緒に入るのが気に食わないとか何とか……。だからって脛を蹴ってまで後から入って来るなんてありえないと思いませんか？」

ぼそぼそとシャーニッドとルシエが話していたのが聞こえたのか、フェリはキツとルシエを睨みつけて、不機嫌そうに言った。

「念威操者はこの小隊には必要ありませんでしたか？」

「そんなことはない！ 歓迎するぞ、二人とも！」

ニーナの希望に満ちた顔を見て、どれだけルシエ達に期待しているのが端々から伝わってくる。シャーニッドはそんなニーナに呆れながらも、温かい眼差しを向けている。

「フェリ・ロスです。ほどほどにお願いします」

「ルシエルディア・ラグナイトです。本日より第十七小隊に入隊許可願います」

「許可する。各々、自身の武芸に恥じぬよう励め。以上だ」

十七の数字が入った銀色のバッジが手渡される。手のひらに収まってしまうその小ささとは裏腹に、ずしりとした重い何かを受け取ったような気さえた。

ここから、もう一度始める。

自分が武芸者として、人として生きて行く為に。

第六話　　もう一つの始め方（後書き）

読んでくださってありがとうございます！

小隊入隊。異論は色々あるかもしれませんが、この為の物語たちでした。まあノリとか会長にはめられて入るとかだと、絶対やる気って出ないでしょうって作者が思ったわけで、長々と書いてようやく原作前の話が終わったというかなんというか。

文字数にして十万字近く。一般のライトノベルが4000字で1P換算だとすると実に二百五十Pくらいですね、たぶん。

次話から時間を飛ばすか、それとも数話十七小隊の話を挟んでから進むかは未定です。

こんな作品ですが、これからもよろしく願いします。

第七話 訓練って

高く、都市を睥睨できる場所に生徒会室はある。

枠のない大きな窓ガラス一面にその部屋主であるカリアンが薄く映った。

「あの約束 奨学金の件はこちらの方で手続きを済ませておこう
「はあ、ありがとうございます」

その部屋の中、会長専用の豪華な執務机を挟んでルシエはカリアンと対峙している。呼ばれた件は一昨日、第十七小隊に入隊した件のこともあった。

呼ばれたことに少しだけ戸惑いながらも、ルシエは曖昧に礼を返す。

「もっとも、君の今までの試験結果もろもろを鑑みても、奨学金ランクの変動に変なやつかみがつくこともないだろう。その辺は安心してくれたまえ」

「別に、自分は来年度からの更新でも構わないのですけど……」

実際、小隊に入る気がなかった今まで、奨学金のために成績を落とすようなことはしていなかったのだ。収入の方も今のところは何とかやっていけている。早急に改善されなくてもなんとかなったというのが本音だった。

「約束は約束だからね。政治家が嘘をつくわけにもいくまい」

そう言うのにやりと笑って見せる様は、いいとこ悪代官といったところだろう。心なしか、窓から差し込む光の加減で眼鏡がきらり

と光った気もする。

カリアンはゆっくりとした動作で、上質そうなふかふかの椅子に腰を落ち着けた。

「そうそう、君を呼び出したのは他にも理由があるのだけど」

「何でしょうか？」

自分には心当たりがない、そう思って訝しげにカリアンを見る。あまり彼の前で隙を見せるようなことはしたくない。例えフェリの兄だとしても、彼女から聞く話から、あまり信用し過ぎてはいけないという直感が働いているからだ。

「突然の小隊への入隊、これはもちろんこちらからすれば歓迎すべき件ではある。が、君にどのような心変わりがあったのか聞かせてもらってもいいかな？」

レンズを通して、武者であるルシエを委縮させる眼力を感じ取る。そこには決して驕りも、からかいもない。ただ、ルシエという個人を見極めようとする鋭さがあった。

伸ばしていた背筋に、更に少しだけ力が加わったのを自覚する。

「やれることをやろう、そういう気持ちになった。それだけでは不満ですか？」

何もかもを話す必要などない。端的に、カリアンが為政者として納得できると思う言葉だけを発する。

それを聞いて、カリアンは上品に口を押さえながらくもった笑いを漏らした。

「なるほどね。よくわかった。もちろん、君がツエルニに不利益を

もたらずような真似はしないであるうことに私は確信を持ってもらえる」

「確信……、どうしてですか？」

それはルシエが積み上げた都市警察での実績からか、それともカリアンから見たルシエの人物像はそう映っていたのか。

「フェリが君といつも行動を共にしている。あの気難しい妹が、ただそれだけで私にとっては信用に値するのだよ」

そう悪戯っぽく言うともう一言付け加えてきた。

「私の見識にも間違いはないだろうとも、思っているよ」

「ありがとうございます」

少しだけ頭を下げて礼を述べる。ややひっかかりを覚える言葉である気もするが、それは気のしすぎだろうと頭の片隅に追いやった。用件はこれですべてだろうか。カリアンは優雅に細い指先をテーブルカップにかけると紅茶を飲み始めた。暗に退室を促されたのだろうか。

そう思った時だった。紅茶を一口含み、喉を潤すようにゆっくりと飲みこんだカリアンから、思わぬ言葉が発せられる。

「それで？ フェリとは、どういう関係なんだい？」

「ぶっ！？」

思わず気の抜けた声を発して、部屋の空気ががらりと変わったことを自覚する。

「おや、何か私に隠し事でもあるのかい？」

「ありません！ ロスとはただの学友です！」
「ほっほー、なるほどね」

何がほっほーか、とルシエは心の中でカリアンを罵った。
たったの一言で、先ほどまで隙を見せまいとしていた態度が崩れてしまったことに動揺を感じ、思わずムキになって返答してしまう。これが致命的な弱点になることなどありはしないだろうけど。

(やりづらいつたらありゃしない……)

辟易とした顔を微塵も見せずにそう思って、カリアンを見る。少々きつい視線で彼を見ているが、ルシエはそれに気付いていない。カリアンはそんな視線を飄々と受け流し、両手を顔の前で組む。そんな仕草がいちいち政治家である兄と被るのは彼と年齢が近いからか、それともその役職のせいか。

「はは、冗談だよ、冗談。それほどムキになることでもないだろう？」

「そうですね、あまりに話が突飛過ぎて面食らってしまいました。申し訳ありません」

義務的な謝罪をかわす。カリアンがその様子をどう見ていたかはわからない。

「今日呼んだのはこれらの件についてだけだ。ようやく君が本気を出してくれるようで、こちらとしてもありがたいよ。これから都市の為に励んでくれたまえ」

「自分にできることなど限られています。少しでもこの都市に貢献できるのならば、それに励みましょう。失礼します」

小さく腰を曲げて礼をし、ぎゅっぎゅと踏みしめるたびに音がする絨毯を歩いて行く。

この部屋にはなんとなく、いつまでもいたくはない気がした。いかにも威厳を持った高級な家具がそうさせるのか、頭の片隅によぎる記憶の片鱗を呼び起こそうとしてくるからか。あるいはその両方か。

「ああ、言い忘れていたよ」
「？」

ルシエが疑問顔で振り向いたとき、逆光で見えないカリアンの表情は確かに薄く不気味に笑っていたように思う。

「フェリに手を出すようなことがあれば、わかってるね？」
「同じことを二度言うことはありません」

底冷えするような声に反射的に答えると、ルシエは早足で部屋を出た。

十一

小隊結成から五日ほど経った。

正式な手続きやら何やら、その他諸々の雑事の為に本格的な小隊招集に時間がかかり、初の隊長からのお達しは待機状態だった。つ

いこの間まで使えていた練武館も、隊長のニーナが多忙であることもあり、集まるものもおらずそのままの状態だった。

そのことに関して、別に不満を感じてはいない。

むしろルシエはその先のこと、小隊での訓練というものに期待していた。

今まですべて自主的なトレーニングのみで自分の武芸を高めてきたルシエにとって、それは新鮮なものであるかと考えていたから。それとも、ただ周りと共に高め合うということに自分が何かしらの希望を持っているからか。

そして今日、第十七小隊が練武館に召集された。

ぎらつく視線から言わずもがな、怒髪天を突くほどに怒りをあらわにしているのは隊長のニーナ。その後ろにいるのは帽子を逆かぶりし、機械油が何かで汚れたツナギを着用した童顔の少年。

「あれ、うちの小隊って僕を含めて五人じゃなかった？ 今いるのは彼だけだから」

「ハーレイ、そんなことは言われなくてもわかっている」

そんな二人のやりとりに苦笑するのはルシエだ。

期待していた小隊の招集が意外にルーズであったことにもそうだが、少しだけ肩透かしを食らった気分になる。もちろん、ニーナの様子を見ればそんなことはないのだろうが。

「とにかく、時間も過ぎちゃったし先に自己紹介しておくよ。僕はハーレイ・サットン、錬金科の二年生でニーナとは幼馴染なんだ。よろしく、ルシエルディア君。ニーナから話は聞いてるよ」

“ルシエルディア君”、聞き慣れない単語を耳にして、それが自分の名前であると認識する

そもそも、この学園にきてラグナイト以外で自分の名前を呼ぶも

のなどいないに等しく、あってもフルネームで声を掛けてくるときくらいだ。

そのせいか、自分のことをそう呼んだハーレイに少しだけ親近感が湧いた。

「こちらこそ、よろしくお願いします。おれのこととは呼びにくいでしょうからルシエでいいですよ。えーっとサットン先輩、でいいんですか？」

「ハーレイでいいよ。サットンなんて呼ばれることもあんまりないし。同じ小隊の仲間なんだから、ファーストネーム以外で呼び合うのは他人行儀すぎる気もするし。改めてよろしく、ルシエ」

穏やかに笑ってそういう彼は、見た目の通り気のいい人のようだ。あまり人付き合いが得意な方ではないルシエにとってはありがたい。それに、これから自分のダイト錬金鋼の調子を見てもらうことにもなる。信頼関係はきちんと築いておきたいところだ。

と、入口に今この場にはいない二人の隊員の姿を発見する。

「遅くなりました」

「わりいわりい、ちよいとそこで女の子に声掛けられちまってよ」

フェリはいつもの無表情のままに。シャーニッドは悪びれた様子も特になく、堂々と入室する。

「遅いぞ、二人とも！ 初日だから見逃すと思ったら大間違いだぞ。後輩を見習ったらどうだ」

「まあまあ、そんなにカツカするほどのことじゃないだろう？ そんなんじゃ小隊をまとめ上げる前にぶったおれちまうぜ」

遅れて入ってきた二人を見て、ニーナは声を荒らげたが、シャー

ニツドがそれをなんともなく宥めている。

遅刻したのによくやる、実際それほどの大遅刻と言うわけでもない。さしてルシエは気にしなかった。

ただ、フェリが遅れてきたのが少々ひっかかった。いつも時間には気を遣っている方だと思っていたのだが。

「はあ……。とりあえずは不問としよう。以後、気をつけるように」
「さすが、うちの隊長は話がわかるぜ」

考えているうちに、二人のやりとりはシャーニツドが言いくるめることで終わったようだ。簡単に全員が自己紹介を済ませると、ニーナが今後の方針について話し始める。

「今日集まってもらったのは、第一にこの小隊のフォーメーションや各々の役割を把握してもらったためだ」

「たった四人しかいないんだから割り振りなんて、あってないようなもんじゃね？」

「そうかもしれない。が、これは大事なことだとワタシは思う」

シャーニツドの茶々を真面目にニーナが返した。他の小隊が戦闘に参加してくるのは七人というのに対し、こちらは四人だ。その作戦の幅は他小隊に比べれば狭いことは否定できない。

「人数が少ない現状、打てる手は限られているだろうが、そこは練度でカバーするしかないだろう。その為に役割をきちんと意識し、それに徹することで作戦の成功率を底上げする」

その辺はきちんと考えていたのか、ニーナがさらりと返答した。

「前衛はワタシとルシエルディアの二人、シャーニツドは後方支援、

フェリは念威での情報サポートだ。言われるまでもないだろうがな」
「ごもつとも。それで？　　うちは小隊対抗戦、いつから参加になるんだ？」

「……まだ話の途中だというのに。対抗戦は一か月後だ。十七小隊が設立されたことによつて生じたスケジュールの調整に手間取つてな。大まかに決められていた試合の予定が大きくずれてしまったらしいのだ」

シャーニツドの逸る気持ちを抑えるように、ニーナが全員にそう告げる。

一か月。長いようで短い。

それだけの日数があれば、それなりに隊全体の連携をこなせるようになるとは考えるが。

フェリは無関心そうな顔をしながらも、ニーナに質問した。

「どこの小隊とやるのかは、もうわかるのですか？」

念威操者らしい質問。事前に相手がわかつているのならば、対抗策は練り易い。こちらの手札は未だにすべて伏せられたままなのだ。初戦くらいは楽ができそうである、安易な考えだがルシエはそう思った。

しかし、ニーナから出た言葉にその考えは否定される。

「いや、相手は決まっていけない。何分、この小隊事態がイレギュラーなものだな。いろいろと支障をきたしている。相手は七人の小隊を想定しておけばそうそう問題は起こらないとは思うが、やはり自分たちの実力を上げるしかない」

二人のやりとりを聞いて、シャーニツドだけは苦い顔をした。

「一か月で、たった四人で試合ってか？ そりゃ少々荷が重いところの話じゃないぜ。へたすりゃ相手のいいようにやられて笑いもんにされるのが目に見えてる」

「ですけど、これ以上人員の補充ができないということは揺るがない事実です」

フェリに事実を突き付けられてシャーニッドはため息を零しながら言う。

「わかっていたこととはいえ、厳しいもんだねえ」

シャーニッドのその一言により、部隊内に嫌な雰囲気の流れる。

例え付け焼刃で人員を補充したところで、足手まといが増えるのであればそれは戦力の増強とは言えない。その点はこの場にいる誰もが理解している。

では、どうするかという話に戻ると、それはやはりニーナの言うとおり小隊全体の練度の底上げが重要になってくるのだ。もとより、少ない人員である前提は覆らない。シャーニッドもそれは承知だったのだろうが、やはり気持ちは沈んでしまうのだろう。

「なに、焦ることはない。まだ決まっていけないだけで、決まっただけから相手の分析をすることはできるだろう。それまでは自分たちの武芸を磨くことを優先すればいい」

少しだけ暗くなった雰囲気を払拭しようと、ニーナが明るく声をかける。空気を読むのが得意なわけではないが、これには賛同した方がいいだろうと判断する。

「そうですね、何もまるつきりできないことがないわけじゃないし、いずれにしても実力は必要です。ならば初戦を意識しすぎるよりは

武芸に集中していた方が色々マシですよ」

ルシエの発言の後、ほんの一瞬だけ誰も反応しない空白の時間が生まれた。

おかしい、確かに自分はニーナの発言に対してすぐに返したはずなのだが。そう思考し、周りを見ると啞然とした表情でルシエを見つめるフェリとシャーニツドの視線。ハーレイはうんうんと頷いて明るく笑い、ニーナはどこか複雑そうな顔でルシエを見ていた。

「おまえさん前向きすぎないか？」

「キアラじゃない気がします」

「先輩もロスもちよっと言い過ぎじゃないですかね……？」

少しだけめげそうになった。

「まあ、こんだけ後輩に言われたらやる気を出さないわけにはいかねえな。なあ、隊長さん？」

「ん？ ああ、そうだな」

一転して、という割にはさほど大した変化もないが、シャーニツドがいつもの調子でふざけてみせる。しかし、ニーナの反応はあまり喜んでる様子ではなかった。

やはり、少数精鋭ということが厳しいという認識が強いのだろうか。そんな疑問を払拭することもできずにニーナは話を続けた。

「とにかく、自分たちでやれることはいろいろとある。明日から対抗戦に備えた訓練を開始しよう。各々、今日は個人訓練をしておくように」

明日から。

その言葉にルシエは反射的に問い返した。

「今日からじゃないんですか？」

「すまない、最近の忙しさにまだ訓練メニューを詰め切れていないんだ」

少しだけ、ルシエから目を逸らしながらそう話すニーナ。それは本当にすまなそうで、ルシエは無神経であつた自分を恥じた。

「あ、いえ、すいません、おれの方こそ」

「いや、気にしなくていい。それじゃ、ワタシはやらねばならないことがあるから、先に失礼する」

少しだけ足早にニーナが出て行くのを見送る。

おつかれさん、そんな労いの言葉をシャーニッドが掛けて出て行くのと同時に、第十七小隊の顔合わせは終わった。

剽によつて生まれた熱が身体を巡る。

土ぼこりの混じつた野戦グラウンドの空気。思い起こすのは二年生と行った集団演習のときだ。

あるときよりも緊張感は薄い。いや、戦闘の最中に緊張するといふことはあまり良いことではないし、常に戦場に身を置くのならば

その緊張を飼い慣らし、適度に保たなければならぬ。

しかし、今はあの独特の感覚とも違う。緊張してはいないわけではないが、だからといってまったく気を抜いているわけでもない。

これが訓練だとわかっていても奇妙な感覚がある。

ニーナから指示があるまで木の陰で隠れるように言いつけられ、自分から動くことができないという事態に違和感を感じてしまう。

ニーナも同様に気配を殺して隠れている。フェリが敵を見つけないまで動かない、敵が迂闊に攻めてこようものなら叩き潰す。そういう指示だ。

「動反応二つ感知。正面から来ます」

いつもよりも機械的なフェリの声。それとほとんど同時に二体の自動機械が迫り、木の陰に隠れていたルシエに襲いかかる。

「おれが引きつけます！」

近くに隠れていたニーナに聞こえるだろう声で、念威端子越しに話しかける。例え機械であっても人間の時と同じように接しなければ訓練にならないだろう、そう思ったからの行動。

フェリの声以前に、その気配に気づいていたルシエが二体の対応に回る。

ニーナがやられれば敗北という条件。それに加え、通常の小隊戦同様に狙撃用の遠距離攻撃型機械が伏せていることもある。ここはルシエが二体を相手にした方がリスクも小さい。そう判断し、派手に敵を引きつけるように動いた。

樽型の自動機械が染料付きの木刀を派手に振り回し、辺りを赤く塗りつぶす。それを回避しながら、剣を纏わせた一撃を見舞った。

「っ、意外と頑丈だな！」

が、腕に返ってきた鈍い衝撃と、自動機械が動きを止めていないことに気づく。もう一撃を見舞おうとするも、横合いからの木製の斧の一撃を回避するために細かくステップを踏んだ。

フェリは狙撃手を見つけただろうか。ルシエの感覚では機械の気配を読み取るのは少々辛いものがある。近くに居ればわかるが、遠くの“物”の気配など読みづらくわかりにくい。

未だに報告がないということはこちらでなんとかするしかない、そういうことなのだろう。小隊に入隊したはいいが、フェリがどこまで本気で小隊員としてやっていくことにしたのか、そういうことは昨日の今日で一切聞いていない。

ただ、入隊したのがルシエのせいだとしたらどうだろう。

少しだけやり方が強引だったかもしれない。理由を聞いていなかっただけに、武芸に対してまだ本気で取り組むと決めたというわけでもないだろうし。

ふとした考えを頭で整理しながら、ルシエと二体は二ーナから離れ、木々のない開けた場所で打ち合うこととした。

シャーニッドがこの様子を見ていれば二体の内、うまくすればどちらかは狙撃するだろうし、もしくは向こうが絶好の的となったルシエを狙って来るかもしれない。どのみち敵は倒せるし、射線から敵を割り出すことができる。

そうすればフェリが発見の報告をする“理由”にもなる。

自動機械からの単調な攻撃をいなし、受け、回避し、相手が“狙撃するであろう隙”をつくる。

相手の斧が頬をかすめる。追撃する木刀の横なぎを回避するため、自然な動作で大きく後方に跳躍することで時間をおいた。

“来る”

感覚的にそう捉える。こちらに向かって放たれた一撃。殺気もな

にも感じない無機質なものが戦場の空気を切り裂いて向かう。

ある意味決定的な隙だ。互いに膠着した相手を前に、周りからの警戒を一切と気にしていないような状態。

木刀を構えていた自動機械が背後からの射撃によって、胴部を打ち抜かれたことで動きを止める。シャーニツドの狙撃が決まった。その一瞬だった。

「後ろだ！」

鋭い叱責の声に振り向きざまに片手剣を振るう。

隙を作ることに集中しすぎたか、気配を読み取れずに不意に現れた三体目。棍棒を構えた自動機械を剽の力で強引に叩き潰す。手加減無用で振るったそれが自動機械を吹き飛ばすが、加減が利かなくなつた為に分の動きも止まってしまふ。

完全な隙だ。意図して作つたわけではないもの。

狙撃が来る。意識の片隅でそう思った。

だが、それを認識した時、ルシエの目の前、相手の背後に当たる位置から視界に煌めく金色が躍り出るのを確認する。

「はあああ！！！」

ルシエと相対していた斧持ちの自動機械を、ニーナが二つの鉄鞭で押さえつけ動きを封じていた。

だが、それもルシエに向かおうとした敵の動きを止めたもの、ニーナの動きも止まっている。

このとき、警戒すべきはなんだ。

開けた場所、止まった動き、未だにわからぬ敵の位置。

聞こえないはずの銃声が耳に届いた思った瞬間と同時、敗北のブザーがあたりに木霊した。

野戦グラウンドの傍にあるロッカールームで、シャーニッドは疲れたように腰掛けに寝転び、フェリは豊かな銀色の髪を櫛で梳いている。ルシエはといえば、所在なさに自身のロッカーに身を預け立ちつくしていた。

ニーナは、彼女だけは苛立たしげに特に何を言うでもなくずっと隊員達を見まわしたままだ。

重い空気の原因はわかりきっているし、わかりきっているが故に誰もそれを口にしようとはしない。それは決して、今日もフェリとシャーニッドが遅刻してきたという話ではない。もしかしたら、それもニーナが苛立つ原因の一つだったかもしれない可能性も含んではいるが、その大本の原因をフェリは逐一念威端子で状況を把握していただろうし、シャーニッドも後方でスコープ越しに見ていたはず。そしてルシエはそれを目の前で見ていた。

やはり、一言かけるべきは年長者で、なおかつ小隊員歴の長いシャーニッドが言うべきであろうと視線を向けてみるが、ちらりとこちらを一瞥しただけで「おまえが言っただけ」とアイコンタクトを取っているようにしか思えないくらい何も言う気はなさそうだ。

仕方ない、そういうのも微妙な表現だが、ルシエが重い口を開いた。

「先ほどの結果は、隊長のせいではありませんよ」

思ってもみないところから言葉が出たからか、沈黙が室内を支配する。いやにルシエの声が響いたことも、この雰囲気ですこぶる悪いことを表しているようだ。

「……そうかもしれんな」

ニーナは一度だけため息を零すと、気落ちした疲れ切った声でそう言った。

「ワタシにも落ち度があった、あそこはもっと慎重に動くべきだったと思っっている。だが、他の者にも見直す点があるというのは事実だ」

無理に取りなしているのはルシエでもわかったが、別にニーナを責める気は微塵もなかったためにそのまま聞きの体勢に入る。

「シャーニッド、あのタイミングで狙撃が可能だったのだから、もう一体の不意をついた方を狙撃することはできなかったのか？」

「厳しいことをおっしゃるね。あのタイミングで狙撃できたのはそういうお膳立てが整っていたからであって、突然横合いから現れたやつに照準つけるなんて芸当、オレにはまだまだ無理な話だ」

別段、怒った風でもなく、シャーニッドはただ的確に事実を述べた。それはルシエの考えた動きと合致してもいる。

「それに、戦闘でこいつと組むのは初めてだ。どう動くかわかんないような状況で不意打ってきた相手を狙撃なんてしたら、同士撃ちだつてあり得る。そんな真似怖くてできないね」

そういうシャーニッドにただ相槌のように返して、ニーナは話を続ける。

「フェリ、位置の割り出しが遅い。もっと早く出来ないのか？ この間はもう少しマシだったはずだが」

「言ったでしょう、火事場の馬鹿力というやつだったと。今日のこ

れが本当の実力です」

ということは今日のフェリはやはり手を抜いていたということか。突き放すようなフェリの物言いに何かを返すでもなく、ニーナは視線をルシエに定めた。

「……ルシエルディア、どうしてワタシの指示を待たずに二体を引きつけた。二人で一体ずつ当たった方が効率も良かったはずだ」
「隊長がやられたら負けです。狙撃手がどこにいるのかもわからない状態のまま戦うよりも、おれが困で不利を演じた方が楽に位置が特定できると考えました。とっさのことでしたがあまくやれると思いましたが」

そう述べてみて、この考え方があまり良いものではないことに気づく。自分では最適であると判断し、今でもその考えは揺るがないのだが。

結果が結果だっただけに、最後の言葉は余計だったと言わざるを得ない。

「なるほど、確かに効率的な作戦だ」

そう言って、ニーナは言葉を切る。

シャーニッドは小さくため息を零し、フェリですら梳いている櫛の動きをびたりと止めた。

「だが、それは傲慢だ。ワタシを侮辱しているのか？」

「いや、そんなつもりは！」

慌てて弁解しようにも、言葉は出てこない。それが自分の中で事実だと認識しながらも、ニーナを侮るような考えでそう思ったわけ

ではない。

確かに、実力面ではニーナよりも上だという認識はある。だが、下に見て侮って取った行動のつもりは微塵もなかった。だが、それが他人を不快にさせるかもしれない、そういう配慮がなかったことは否定できない。

「やめとけ、ニーナ。こいつにそんな悪気があったと思うか？」

事態を重く見たシャーニッドが間に入ることで、ニーナもそれ以上は何も言わなかった。だが、明らかにはじめよりも空気が重くなったことは確かだ。

「……小さなことにこだわるつもりはないが、これだけは言っておく。隊長はワタシだ、その判断はワタシがする。指示を無視して勝手に動くのならば、隊としての連携なんて成り立つはずがない」

怒りとも失望とも取れるその言葉に、ルシエは動揺を隠せないまま、「すみませんでした」と謝罪を口にするこしかできなかった。

「今日はもう解散しよう、御苦労だった」

着替えもせず、ニーナはそのまま荷物の入ったバッグを片手に部屋を退室していく。残された三人のうち、シャーニッドとフェリが立ちつくすルシエに声を掛ける。

「もうちょっと、気を使えるようになる。それがおまえの課題だな」「浅はかです」

その声を聞いて、返す気力もないままにルシエものろのろと着替えを始めた。

初めての訓練はなんとも気の重いものとなってしまった。

第七話 訓練って（後書き）

大分遅くなりました。お久しぶりです。

待っていた読者の皆様には申し訳ないです。いろいろと行き詰った
りして、筆が進まずに長い休みを取ってしまいました。
更新ペース落ちないようにまた頑張りたいとは思いますが、何分、
のろのろ亀さんペースになってしまふ恐れがあります。
つてめっちゃ言い訳くさいですけど、頑張ります。
再び読んでくださってありがとうございます！

第八話 小さな綻び

「ごちゃごちゃした部屋、それが第一印象だ。」

食べかけて乾燥しきったパンやら、何の用途で使われたらここま
で汚れるのかが不思議な布切れ、散乱して明らかに不要そうな紙束
の群れ。

極めつけはこの部屋に漂うなんとも言えない異臭だ。入ってすぐ
に換気を促していなかったら恐らく鼻の粘膜をやられることとなっ
ただろう。

「ごめんねー、こんなに散らかった部屋で。集中できるかい？」

「……大丈夫です」

その部屋主があの特徴しそうで真面目そうなハーレイの研究室なの
だ。人はみかけによらないとはよく言ったもので、これでよく重要
なデータを紛失しないな、と他人事ながらに心配になる。

現在、ルシエは自身の錬金鋼ダイトに剉を流し、そこに様々なコードを
繋ぎ機械で数値として分析している。

授業が終わった放課後からすぐにここに引つ張り込まれたのは、
やはりこれから度々面倒を見るであろう錬金鋼ダイトの様子を見る為であ
る。フェリはすぐに消えてしまったし、シャーニッドはすでにこの
作業を終えているらしい。

よって、この場にいるのはハーレイとルシエの二人だ。

「うん、これでデータの方はだいたいかな。いつもこんな感じの調
整でやってるの？」

「ええまあ。細かい数値もそれで合ってます。自分で調整したのは
これを新調したときくらいですが」

モニターから顔を上げたハーレイに律義に返す。最初に登録するときに、錬金鋼ダイトの情報を書類で提出しているの、ほとんど差異はない。それほど乱暴に扱っているというわけでもなく、消耗している様子もなく一安心だった。

「ふーん、そう。それなら問題ないかな。また何かあったらいつでも言ってくれば調整するからさ」

「わかりました、お世話になります」

礼を述べ、錬金鋼ダイトを元の棒状のものに戻す。ハーレイも取り出した機材を元の位置に戻し始めた。

「どうかな、小隊の感じは」

世間話のように軽く振られた問いに、一瞬だけ身体が硬直する。そんなルシエの様子に気づきもしないで、ハーレイはにこにこことを動かし続けている。それに対して、どう返答したものかとルシエは頭を捻った。

「いえ、特には……」

場を濁すようなルシエの言葉に、ハーレイの微笑は苦笑へと変わる。ルシエの語調から何かを感じとつたらしい。

「隠し事が下手だってよく言われない？」

「……人に気を遣うのが下手だというのは、先日言われました」

それは自分自身のコミュニケーション力の不足もあるし、相手の立場になって考えることができいなかったということもある。それは先日の件で身に染みたことだ。

「そっか。あの中で何かやっちゃうような相手って言うことやっぱり二ーナかな？」

それには答えずに黙って頷くことにする。ハーレイは確信を持って言っているようだし、口に出すのもなんだか億劫な気がしたせいもある。

「あれでも結構気を張ってるんだよ。他の小隊長は、二年の二ーナなんかよりも年上ばかりだし、隊での威厳が保てないなんて知れたら面目も何もないからね」

「それは……」

わかっていた、そう口に出すことはなんとなく憚られた。

漠然と、二ーナが隊長であることに不思議と違和感を感じていなかったのは、彼女がそう振る舞っていたこともそうだし、そう思わせるだけの魅力があったということだ。

そうする必要があるから、そう振る舞っていた。

当然のようではあるが、なかなか難しいことでもある。ルシエ自身が軽々しく頷くのは、あの無神経を發揮したあとでは虫が良すぎた。

ハーレイはルシエのバツの悪そうな顔を見て、それでも笑顔を崩すことはなかった。

「幼馴染だからこんなこと言ってるって思われるのもなんだけど、二ーナは真っ直ぐなんだ。今、自分がやれることに必死なだけで、もしも辛く当たるようなことがあったとしても、それは真剣さの裏返しなんだよね」

それはなんとなくだがわかる。別にルシエ自身、彼女の行動や発

言に不満を持っていたわけでもない。ただ、自分にある融通の利かない部分があったことを認めねばならない。

武芸において、真剣なのは自分も同じだから。

「だから、ニーナのこと嫌いにならないでいてくれたら嬉しいな」

少しだけ照れくさそうに鼻を掻くハーレイ。長い付き合いであるが故の親しみがそこにはある。

「大丈夫です。こんなことでつまずいていられませんから」

もらった励ましに、ルシエも笑顔で返した。

十十十

自己の未熟さを嘆いている暇はない。

まだ夜の明けきらない時間帯。朝靄に包まれた外縁部の一画で、

ニーナは自身の黒鋼クロムナイト錬金鋼を取りだす。

開始からつまづいたつもりも毛頭ないし、それが目の前に立ちはだかる壁だというのなら容易く超えてみせよう。

それくらいの気概が自分にあると自負している。それが都市を守るといふ、ツエルニを守るといふ決意だ。

「冷えるな……」

吐きだす息は白く、着こんでいるとはいえ冬期帯の朝はこれから更に寒さを増していくだろう。だが、何の遮蔽物もないこの場所は鍛錬に最適で、人の目がないというのは二重の意味で良いことだ。

準備運動もろくにせず、寝起きの身体に剉を通す。徐々に神経の隅々まで剉を感じとれるようになる、両手の錬金鋼ダイトを還元した。そして、ただひたすらに鉄鞭を振るうことに没頭する。

時間すら感じないほどにその動作に集中し、今感じているはずの自分の悩みも、思考すらも排除しようとする。

悩むな、ただ前に進め。

そう自分に言い聞かせる。

失態を恐れるなど自分らしくない。歩みを止めれば終わりだ。

何のために十四小隊を抜けてまで十七小隊を立ち上げたのか、その意味すら見失ってしまいそうな気がしてしまうから。

隊長として、自分は強くあらねばならないのだ、と。

集団訓練から一週間がたつ。二ーナからこれといった新しい指示もなく、訓練で顔を合わせても、すぐに個人での訓練となってしまう日々が続いていた。極力、十七小隊でまとまって訓練するということは少ない気がした。

そして、今も個人訓練としてスケジュールに組み込まれた時間。

練武館の床を踏みしめながら、さして変化はない自身の鋼鉄錬金鋼アイアンダイトに剉を通し、一連の型を繰り返す。

室内には不要なものはなく、かなりの高さの天井と広く間取りされた空間があるのみで、雑事に必要なものはロッカールームに置かれている。そんな訓練室では、存分とはいかないまでもある程度武

芸をするには不自由することはない。

自身の剽の流れを確かめ、頭で描いた軌道をなぞるように身体を躍らせる。

動きの収束点、そこで左手の紅玉錬金鋼ルビータイトに手を掛け、復元。

瞬時にその手元に現れた拳銃の姿は、錬金鋼タイトの特性故か赤く輝いており、隠密行動にはあまり向きはしなないと思わせた。

最近是一片手剣の方はばかりに修練の時間を充てていたこともあり、紅玉錬金鋼ルビータイトの方は剽を通すものの、それを放つようなことはしていなかった。だが、ときおり今のように不意に抜いては感覚だけは鈍らないように気をつけている。

どのくらいの時間が経つただろうか。少なくとも来た時にはまだ空は青かったはずだが、高い位置に据えられた窓からは赤い日差しが夕暮れを告げている。

時間の経過を確認した瞬間、唐突に身体を流れる汗を自覚する。未だに火照ったままの身体から熱が抜けて不快感を与える前に着替えておきたいところだ。

「はあ……」

不意に奥底に溜まった何かを吐きだしたい衝動に駆られ、ため息が零れる。

第十七小隊の内、今日は誰ひとりとしてここを訪れるものはいなかった。

フェリは、ニーナのことを考えていたこともあり、まだ小隊入隊に関するその真意を聞いていない。更に言うなら、今日来なかったことに対して、念威操者の訓練法を知っているわけでもない自分が、個人訓練を強要することもできない。

シャーニッドはどうだろう。彼の場合、狙撃というジャンルにおいて、やはり自分がアドヴァイスできることは少ないかもしれない。が、フェリよりも何かしら刺激を与えることも、こちらが受けるこ

とも出来る気がする。彼が来ないのには、一人での訓練の為か、それとも単なるさぼりか。あれだけの熱意を示しておきながら、さぼりということは無いのだろうか。

では、個人訓練を指示したニーナが練武館に来ないのはどうしてだろうか。

そこまで考えてみて、また知らないうちに息を吐いた。

謝る機会が欲しいと考え、なるべく練武館にいるように心がけているのだが未だにニーナと二人で会うような機会がない。

意図的に避けられているのか、それとも偶然会わないだけなのか。今日のことを考えると前者の方が強い気がしてしまう。

小隊として、まとまりが感じられない。いや、まとまると感じる以前の話だ。シャーニッドは初回に限らず、遅刻を繰り返していたし、フェリも真面目なのか、不真面目なのかよくわからない態度のままだ。

あれから全員がバラバラになるような、そんな途方もない感覚が常にルシエに付き纏っていた。

そんなことを考えている内に、冷めた汗が身体になんともいえない気持ち悪さを与え始める。訓練時に無心となっていたのが嘘のようにどんよりとした何かガルシエに押し掛かる感覚。これを切り替えるためにも、早いところ着替えをしようと訓練室の扉を開けようとしたときだった。

「まったく、十七小隊は何をやっているんだ」

二人の男子生徒のあまり聞き慣れない声。それが廊下から伝播して、扉の隙間から漏れ聞こえてくる。おそらく、小隊の訓練が終わったのだろう。

「あいつらのせいで対抗戦のスケジュールにずれが生じたつてのに、お気楽にも訓練なんて欠片もしている様子がないじゃないか」

苛立ちを含んだ声に、はつきりと嫌悪感が滲んでいる。

ルシエはそつと扉から離れようと思ったが、なぜだか動くようなことはしなかった。

「はっ、当たり前だろう。第十七小隊なんて寄せ集めの集団に何ができるという。隊を抜けたばかりの二年と三年。それに今まで小隊入りを頑なに断り続けた生意気な一年に、会長の妹だ。大方、どいつもこいつも小隊を甘く見て志願したに違いない」

「そうだな、現にこうやって訓練をしている様子がないこともそうだ。会長のごり押しで通つたらしいが、実力があるかは怪しいもんだぜ」

散々な言われようだ。そう思うが、開始された集団訓練も一度きりしかしていないことは事実だし、何より自分達の立場が危ういものであるであろうことも薄々気づいていた。

隊長のニーナ、それにシャーニッドは各小隊を抜けたばかりだ。今までの隊員を裏切つたその行動が他の小隊員にとって慢心に見えるのも仕方ないと言える。

ルシエに関しても、今まで断固として受け付けなかった小隊入りを覆したのだ。それが余計ないざこざを呼びこんでしまうことも承知しているつもりだった。

第十七小隊は悪い意味で目立ちすぎている。時期があまりに悪かつたというのもそうだし、自分たちの立場も含めて考えてもそうだ。

「二年が隊長などと、笑わせる。今までツエルニにそんなことはありえなかった」

「大方、期待の小隊員と持て囃されてその気になつちまつたんだろ？」

「違いねえ」

そうやって大声をあげて笑う二人の声を聞いて、ルシエの中で何かが沸々と湧きあがってくるのを感じた。

先ほどまで感じていたシャツに纏わりついた汗の感触などとうに消え去り、再び身体に火が入ったように熱を帯びてくる。

知らず知らずの内に、剽が体内を巡り始めていた。

本当にそうなのだろうか。

彼らの言つとおり、ニーナが小隊をたてたのはそんなちっぽけな自己顕示欲からだったのか。

そんなはずはない、そう言い切れるだけの確証をルシエは持っていない。例え、ハーレイからの言葉があるうとも、そこにニーナ自身の言葉はなかった。

ならば、彼らの言葉を否定する理由にはならない。

だというのに、どうしてこつも自分は腹を立てているのか、その理由に思い当ることがない。

いや、理由はあるのだ。

その感情が所謂そういう類のものなのかは判然としないし、この一週間程度の時間でそれほどの感情が湧くものなのかも怪しいところだ。

だけど、それ以外に自分の感情に決着をつけられそうにない。

仲間意識、そういうやつなのだろうか。

もしこの想いがそういうものだったとして、どう行動すべきだ。相手の言動を否定し、唾棄し、こちらの感情を思うがままに振るえばいいのか。

それは駄目だと、最適ではないと頭の中で即座に否定される。

例えここでルシエが出て行ったところでどうなるのか。互いに武

芸者である以上、怪我では済まなくなるかもしれない。例えうまくやっただとしても、隊に迷惑がかかるのは目に見えている。

こんなとき、どう対応すればいいのかわからない。

今まで自分に向けられてきた敵意には、自分で処理するだけで済んだ。そのあとのいざこざだって自分で片付ければ済んだ。

だが、この件だけは違う。自分じゃない、誰かにも要らぬ不幸を招くかもしれない。

そんなことを考えるのは久しくなかったような気がした。

思考に没頭していたせい、いつの間にか廊下に響いていた声は聞こえなくなっていた。

ルシエが感じていたのは怒りだったのか、動揺だったのか、それともただそんな風に囁かれていたことに呆れているのか。

「帰ろう」

その口に出すことでようやく止まっていた身体は動き出す。重たくなった腕で扉を躊躇いがちに開けた。開けると、目の前に金色が広がるのはほとんど同時だった。

少しだけ視界を下に向けると、すぐ扉の前にニーナがいるということに気づく。

「……隊長？」

「っ！ ルシエルディアか、まだ残っていたのか」

わずかに動揺したように反応して見せるニーナ。この時間に練武館を訪れるということは、やはり避けられていたのだろうかとも思う。フェリなら嫌味の一つでも言いそうなものだ。

ルシエの視線に居心地悪そうにニーナは視線を背けた。

「用がないならワタシは行くぞ」

「待つてください」

咄嗟に、踵を返そうとしたニーナの腕を取った。武者者でありながら少しだけ女性らしい柔らかな感触に、ほんの一瞬だけ誰の手を掴んだのかわからなくなった。

「なんだ？」

冷たい反応だ。しかし無理やり腕を振りほどくようなこともしないで、ニーナはルシエに背を向けたまま言葉を待っているようだ。た。

空気がじりじりと焦げ付いていくかのような沈黙の時間。

なんて言えばいいかなどとくにくわかっていて、だけどその言葉を言うつまでに色々と飾り付けた言葉を探している自分にまた嫌気がさす。

要はうまく謝る方法を探している。直接会って話したいと考えていて、その場面になってこんな無様を晒している自分が恥ずかしいとすら思ってしまう。

固まった空気を壊すように、ルシエの腕を軽く振りほどこうとニーナが動いた。

「すみませんでした！」

アホかと自分でも思った。頭を下げて、怒鳴っているんじゃないかってくらいの声量だ。眼前のニーナはその声に驚いてか、目を丸くしている。

もっと場を和ませてからとか、うまく話題をすり替えてからとか、そんなことばかり考えていたというに、ニーナが行ってしまうと考えた瞬間に、言葉が不意に出てきた。

ニーナからの反応はほとんどなかった。だけど、手を振りほどく

ことだけはやめていた。

ああ、そうだ、これではどうして謝っているのかも伝わっていないのかもしれない、ルシエはそう思っ言葉繋ぐ。

「この間の、訓練の時のことです」

一言でもあのとき謝罪して、ルシエがニーナに従っていればこんな風になることもなかったかもしれない。例え、そうしなくとも隊がバラバラにならなかつた保証なんてないが、その責任の一端は自分にあるのは確かだ。

現に隊長であるニーナは個人訓練を命じていたのだから。

不意に、ニーナからため息が漏れた。悩んでいるのでもなく、ただ肩の力を抜くようなそんな仕草だ。

「まだ、気にしていたのか？」

呆れたようにルシエを見る視線は、ほんの少しだけ柔らかいもの。初めてルシエがニーナに会った時、機関部でツエルニといたときに近い表情だ。

「それは、その」

「まあいい。気にするな、とは言わないがいつまでも気に掛けていても仕方がない。ワタシも初の訓練で少々神経質になりすぎていたようだしな」

拍子抜け、だろうか。意外とあっさりとしたその反応にルシエは面食らった。

「そう、ですか」

「ああ、そうだ。以後気をつけるようにすればいい、ではまたな」

ではどうして隊全体で訓練をしないのか、そう訊いて蒸し返すこと
とで再びニーナとの間に不和が生まれることを恐れた。

だから、そのまま訓練室を立ち去って行くニーナに声を掛けるこ
とも引きとめることもできなかつたのかも知れない。

第九話 曖昧な気持ち

日々を無駄に過ごすことはできない。

一日の怠りによる損失は、それから続いて行くはずだった成長の可能性を大きく潰してしまうことになる。

武者者である身ならば、きっとだれしもが本能で理解しているが、されどその身を粉にして修練に充てられるものはほんの一握りの者しかない。

学園都市で言うのならば、武者者全体の半数もないほどだろうか。そこから更に効率のいい鍛錬を行っているものがどれほどいるのか。

選ばれたエリート、小隊員。おそらく、それらの人員がルシエの考える武者者としての本質をよく理解しているもの達であろうと考える。その中で自分が良く知る人物の中に未だにどれほどの実力なのかを把握できていない者もいる。

フェリ・ロス。念威操者。常に本気の実力を出すことはなく、彼女が少々の実力を出したのがつい先日のことであったとしても、その実力がすべてであったとは考えにくい。

ではそんな彼女は鍛錬を怠らないのか、疑問ではあるが正確な答えは持ち得ない。少なくとも今は、目の前でベンチに座っているのんびりと本を読みふけているのだから。

風になびく髪が銀色を散らし、どこか神々しさすら感じさせるその様を通行人がうつとりと眺めながら歩いて行く。これを邪魔するには少々の空気の読めなさ、その後の報復を恐れないという蛮勇が必要なわけだが。

はて、どうしたものだろうか。そうルシエが思索した時だ。

「どうかしましたか？」

フェリは優雅な仕草で琴を挟み、読んでいたハードカバーから顔を上げた。いつも通りの淡々とした声で、特にこれと言った感情はないらしい。

声を掛けられた瞬間、いつもの緩やかな空気が流れた。

「こんな寒い中で本を読むなんて信じられないと思っていたところだ」

今日は日差しが暖かいとはいえ、それは決して外に長時間いても大丈夫ということとイコールにはならない。ただでさえ病には強くなさそうなのに、少しだけ心配にもなるというものだ。

「……別にあなたには関係ないことです」

「風邪ひくぞ？」

「健康には気をつけていますので」

そうは言うが、首元から覗く肌は透き通るような白さで、長い睫毛を憂いだ表情で揺らすその横顔はどこぞの囚われのお姫様か、病弱な貴族の娘のようにしか見えない。実際、フェリは武者という括りではあるが、身体能力は一般人と大差はないのだ。筋力という面でもその華奢な体は一般生徒の平均を下回るのではないだろうか。くしゅん、と小さなくしゃみが聞こえてくる。やはり強がりだったのだろうか、聞こえなかったふりをして彼女の自尊心を守ろうかとも思ったが、無視はできないだろう。

「ほら、言わんこつちやない」

「これは別に あっ」

言うてから、首に巻きつけていたマフラーをフェリに掛ける。フェリはわずかに拒絶を表していたが、有無を言わずに着けさせら

れたことに不平を漏らすことはなかった。柄にもないことをしているのは重々自覚しているが、これでフェリが病気にかかるのも寝覚めが悪いと思つた故だ。

一瞬だけすぐ目の前で視線が交錯する。フェリの瞳に映るのは髪の色と同じ銀色。

「なんですか、これは」

「防寒具、もしくははなけなしの金で購入したマフラー」

どこか拗ねたようなフェリの口ぶりに、淡々と返事をする。そんなルシエの様子が入らなかったのか、フェリはどことなく口を尖らせて見せた。

「過保護です」

「ならば返却を要求する」

ずっとフェリの身につけたマフラーに手を伸ばすと、それを両手で隠すように身をよじるフェリ。数回ほどそんなことを繰り返すと、ルシエはため息をついた。

「おれにどうしろと？」

「受け取ってあげないこともありません」

「相変わらずの天の邪鬼だな、たまには少し素直になったほうが可愛いんじゃないのか？」

「むっ……」

からかうように冗談半分で言ってみたのだが、フェリは意外にも言葉を詰まらせた。ほんの少しだけ間が空いて、その小さな唇から言葉が紡がれる。

「ありが、とう」

消え入るような細かい声に、温もりがなくなったはずの首筋が熱くなるのを感じた。思わず面食らった、そういうのが正しいのだろうか。今のルシエには冬期帯の気候は丁度いいくらいだ。

「そこで素直に礼を言ってくれてくれるってことは、ロスの捻くれ具合も少しはマシになったってことか」

「……それは一言余計です」

照れ隠しではない。そういうのもなんだかおかしいので黙っていることにする。

「なにか、話したいことがあるんじゃないですか？」

何が。そう思って、フェリの言葉を脳内で吟味した。

ああ、そうだった。目の前で思わず出来過ぎた遭遇をしてしまって、更にはいつもと違うシチュエーションにそのことを忘れかけてしまっていた。

聞くなら今しかない。

「訓練、どうして来ないんだ？」

知らず、ルシエの口調は素っ気なくなった。自分の不満が顔に出たのか、フェリの視線も先ほどまでの柔らかさを失い、自然ときついものに変わった。

「招集された際には顔を出しています」

「そういうことじゃない。個人訓練だって立派な招集だろう？」

「隊長は個人で訓練する為の時間としてそういうスケジュールを組

んだのだと思っただけでしたが。それに念威の訓練は毎日怠っていません」

「だから……いや、いいや」

言いかけてやめる。ここで無理に説得したところで、この親友は動こうとはしないのだろうと思っただけから。代わりに少し離れた別のベンチに腰掛けて、エアフィルター越しに空を仰ぎ見る。今日の空は少しだけ濁って見えた。

フェリも何かを言うわけではなく、閉じていた本を開き再び読み始めた。先ほどのような声の掛けづらさはない。互いに沈黙して、ほんの数分流れる空を見上げ続けた。

「訓練、行かないんですか？」

「……行くよ」

掛けられた言葉を皮切りにルシエは立ち上がった。そして、聞きたくても触れづらかったことを尋ねようとする。

「ロスは、どうして小隊に入ったんだ？」

ルシエが誘ったからか、それとも単なる気まぐれか。あれだけ兄である会長に反発していたのだ、並大抵の決意や心変わりがなければこうはならなかつただろう。だが、フェリは小隊員として積極的とは言えない程度のやる気しか見せていない。その矛盾した行動がルシエに疑問をぶつけさせざるきつかけとなった。

「それは、隊長に頼まれたんですか？」

「違う。おれが聞きたいだけ。本気でロスが小隊に入隊したかったのか、どうか」

銀色の瞳を射抜くように、真っ直ぐにフェリに問う。

「わたしは」

フェリは何かを言おうと口を開きかけて、やめた。

もしかしたら、ルシエが考える以上に複雑で、深い何かがあるのかもしれない。

「練武館はいつでも空いてるからさ、気が向いたら顔出してよ」

だから、いつもどおりに振る舞って、ルシエはその場を後にした。

十十

261

話したいことがあった。

小隊に入隊してから切り出すことができなかった話を、目の前のあなたと。

これまでの環境から一気に現実味がなかった小隊入りを果たしたことで、周りの見る目はがらりと変わった。今までは遠巻きな嫉妬や羨望だけだったものが一転し、尊敬や興味に変わってしまった。

それまではなんとなく、そうなのかもしれないと思っていたこと、目を背けていたようなことが現実に取り始めている。

例えば、彼の周りには目に見えて人が増えた。彼もあれほど人付き合いが苦手だと豪語していた割に、それらが無難に、あるいは飄

々と流す生活に慣れ始めていた。

元々それだけの素質や雰囲気を持っていたと言われればそんなのだろう。多少捻くれたところはあるが、彼は根っこの部分では善人なのだ。

また学内で行動を共にしている為に、ルシエと同じ時間を共有しているフェリの元にも人が交流を求めるときもあつた。それらに逐一付き合うようなことはせずに、今までどおりの対応をし続けているのだけれど、それでも以前とは比べ物にならないくらいに関係は変わりつつある。

ただ自分はそんな環境の変化に追い付いていないだけで、今のこの感じが異様に遠い別の場所で起こっているかのように、はつきりとした認識を行えていないのだ。

まるで一人だけ置いてけぼりをくらったみたい。彼だけが先に進んでいくような錯覚すら感じてしまう。

彼は大きな選択をした。

それだけは間違いない。そして、それに自分も影響されたことだけは確かだ。

空の色をそのまま映したかのような蒼い瞳。

いつも見ているモノとは少しだけ違う、真剣味を帯びながらもどこか悲しそうな曖昧さを持ったものだ。それは表情にも表れている。

『どうして小隊に入ったのか』

何と答えるべきか。

その答えは自分の中にはつきりと、明確にあるわけではない。だけれど、曖昧でありながら感情だけは確かに理解していたし、決して流されて入隊したわけでもない。

それがわかったところで、彼にそれを言うのはどことなく躊躇われるし、突然のことで自分が何を言っているのか、どこまで言えば

いいのか、普段の自分ならばしれっと出てくるような言葉が、今は頭のどこを探しても出てこない。

だから、彼に返す言葉が見つからない。

「わたしは」

どうすればいいのか、何と返事をすればいいのか。

結局、答えは出ないままだ。

十十十

ぐったり、というよりはだらりとした状態でだらしなく床に寝そべっているのはシャーニッド。どこから持ち込んだのか、クツションを敷いて何かの雑誌を流し読みしている。

練武館、それも第十七小隊に用意された訓練室。

その何の緊張もない姿を見てルシエは呆れてしまう。

「よくそんなにリラックスできますね」

「んあ？」

心の底からのため息とともにシャーニッドに話しかけると、彼は彼で思うことがあつたらしく片目をつむりながらそれに返答して見せる。いちいち気障な仕草であるが、それが嫌味に感じないのは慣れてしまったからか、そのルックスの為せる技か。

彼がこんな風にゆったりとしているのも、今が訓練中でないというところが一つ。隊長であるニーナが、緊急に隊員に招集をかけたためだ。

「そういうおまえさんは何をそんなにそわそわしてるんだよ」

「いや、別にそういうわけではありませんが」

「ニーナとのこと、まだ解決してないのかい？」

二人の声に乱入する少年のような声。何やら細かなデータにらめっこしていたはずのハーレイも、集中が切れたのか話に加わった。

「まあ、今までよりはニーナも幾分気合いの入った感じだったし、気になるのもわかるけどさ」

「そうそう、今まで気不味かったからってそんな態度を取られると、こっちまで気を遣うちまうぜ」

「だから違いますって!」

否定したところで、全く取り合ってくれないシャーニッドとハーレイに嫌気がさしてフェリの方を見る。床に両足を横たえて、黙々と本を読んでいる。いわゆる女の子座りというものだが、フェリがそれをやると等身大の精緻な人形があるかのように錯覚してしまうほどだ。

「どうかしましたか？」

「っ! 何でもない」

なんとなくフェリを注視していたのだが、彼女が顔を上げると同時に視線を逸らした。別にやましい気持などはない、はず。

先日の件について未だに明確な答えはもらっていないが、表面上特に何事もなく過ごしている為に改めてそのことを問い直すことが

できないでいた。そのせいか、どこかフェリに負い目のようなものと感じてしまっている。

そのことにフェリも気付いているのかどうかはわからないが。

「すまない、待たせたな」

と、狙ったかのようなタイミングでニーナが入室してくる。シャーニッドは身体を起こしながら伸びをし、フェリも本を読むのをやめた。

「初戦の相手が決まった。期間は今から二週間後だ」

先ほどまでの緩んでいた空気が緊張で高まるのをルシエは肌で感じ取る。シャーニッドの目は明らかに鋭くなり、ハーレイは息をのんだ。唯一、フェリだけは表情を感じさせないままにニーナを見つめている。

「相手はどこの小隊なんだ？」

シャーニッドの声のトーンがいつもより低い。

初戦だ、気になるのも無理はない。仮に、初戦が第一小隊や第五小隊だとしたら苦戦は必至だし、隊としても出鼻を挫かれることになる。

考えたくはない、隊の敗北など。

それだけは絶対に避けたい。いや、あつてはならない。

知らず、拳を固く握りしめている自分に気付いた。

「相手は……第八小隊だ」

第八小隊、胸の中でそう繰り返す。心配をしていたわけではない

が、あまり聞かない小隊だっただけに室内に安堵の空気が流れる。

「第一小隊や第五小隊と当たらなかつたことは運が良かったと考えよう。しかし、油断はできない。中堅クラスの小隊が相手であることには変わらないんだ、ワタシ達は所詮新参小隊であることに変わりないし、人数割れの状況でまともに小隊として機能できるかもわからない」

肝心なことをニーナが思い出させる。小隊対抗戦における四対七という人数的不利はどう頑張っても覆せない。

「だったらやはり第十七小隊がやることは一つしかないはずだ。」

敬遠されていた集団訓練。付け焼刃だろうが何だろうが、人数的不利を覆すのは練度と勝利の為に練られた策だ。いかに個人の資質が高かるうが、デスマッチの様な死闘ではない対抗戦において、隊員一人一人に求められる役割をきちんとなせざる小隊が勝つ。そういう風にルシエは考えている。

「続くニーナの言葉に、ルシエは考えることをやめた。」

「だが、ここ十日ほどの間に個人訓練は怠っていないはずだ。それを各々、この残りの期間でうまく試合の中で消化できるように全力を尽くしてくれ、話は以上だ。すぐに演習場に移動してくれ」

そう言って、一人だけ足早に訓練室を出て行くニーナ。それにならって各々が腰を上げた。

「「ごちゃごちゃ理屈で話されるよりもよっぽど分かりやすいね、うちの隊長さんは」

「あれは吹っ切れたのでしょうか？」

フェリによる突っ込み。彼女なりに思うところがあつたらしい。

「さあ、どうだろうな。とりあえず前よりは進んだと考えようぜ」

最後の言葉はルシエに向けられていたように思う。気楽に肩を叩いて出て行くシャーニッドに続きながら、ルシエはどこかで何かが引つかかるような違和感を拭えきれなかった。

十一

二週間というわずかな期間でチームワークといったものが芽生えるのか、否か。

それは最終的に試合の結果を見るまではわからないだろう。例えそれが張りぼてのような不確かなものでしかなくとも、連携が出来ていると思わなければ次の段階に進むことはできないのだ。

現状、第十七小隊に大きくのしかかった課題。それさえ乗り越えれば対抗戦はなんとかやり過ぎることができるかもしれない。そういう方針で、誰もがそう思っているのかはわからないがルシエは少なくとも活路ぐらいは見出せるはずだと考えていた。

試合も残り一週間に迫り、ある意味で順調で、何事もなく訓練は消化されていった。それがうまい方向に転がっているのか、それともただ無為に消化されているものなのか、今まで相手に信頼を寄せた戦うといった経験が不足しているルシエには分かりづらいものがあった。

周りは常に大人の武者で、誰も子供のルシエを頼るようなこと

はなかつたし、もちろんルシエも自分一人で解決するだけの器量を備えていたせいか、その辺の感覚が曖昧だ。より効率よく事を行う為のセオリーは頭にあったとしても、実際の感覚で連携などと一口に表してみたところで実感がわかないというのが本音だった。

「それで、隊をうまく統率する方法でも聞きたいのか？」

「別にそういうわけじゃないんですが……ちょっと聞いてみただけじゃないですか」

相変わらずの老け顔を携えているフォーメツドが、しかめ面でルシエに話しかける。実際、こういった人心掌握に長けた人物ならばその辺の微妙な人間関係にもそつがない意見をもらえると思ったからの行動だったが、彼からの反応は薄かった。

「そもそもおまえさんの意思がどうあれ、隊員の意思が一つにならなけりや連携も何も小隊という集団で致命的な欠陥を抱えていると思うがな」

その一言にぐつの音も出ない。実際のところ、勝利という目的はあるにしろ、それが全員のモチベーションを支えているのかと言われれば答えはわからない、だ。

互いが互いの目的の為に利用し利用されている、そんなドライな関係でないとは思いたい、どうにも今のルシエにとって十七小隊というのは居心地がいいか悪いか言われたらなんとも答え難いものなのだ。

相も変わらないニーナの対応に、シャーニツドのやる気があるのかないのかという微妙な態度、それに何よりフェリが本気で動かないという事。

「結成時よりも悪くなったようにしか思えない……」

そもそもニーナの対応が芳しくなくなったのはルシエの不徳の致すところだったわけだが、あれから一応許しも得たはずだというのになぜか訓練の間だけでなく纏う雰囲気は重たくピリピリとした緊張が表れている。

まさにどうしたらいいのかわからないという状況なのだ。

「ちわく、ルシエルディアいるか？」

シャーニツドのいきなりの訪問に、オフィスは彼に視線を集中させた。フォーメッドも洪面を浮かべたままあまり好意的でない視線を向ける。

「エリプトン、喫茶店じゃないんだ。もう少し静かに入って来るところをお勧めする」

「それは失礼した。ちょっとルシエルディアを拝借していきますよ、と」

ちらつとフォーメッドの顔を窺うと行って来いとるさげに手を振ったきり、どさりと椅子に背中を預け、机に置かれた書類を無造作に読み始める。この間シャーニツドに臨時出動員への勧誘を断られたのが響いているのか、興味が失せたようだった。

ルシエはシャーニツドに連れられるままに署を出ると、彼の隣に並んで学生で溢れかえる道を進んでいく。

「で、何の用だったんですか？」

「待て待て、せっかちな男は嫌われるぞ？」

「……先輩はそればかりですね」

頭には緊急の招集くらいしか浮かばなかったのだが、彼の口ぶり

から訓練絡みではないのだと悟る。だが、まさかこの人が女性抜きフェリで喫茶店に立ち寄るなどという可能性はとんでもなく低い。無論、いつぞやのように誰かさんの好意の代償に甘味をおごらされるのはまっぴらごめんではあるのだが。

そんな風に思考を巡らせてみて、最近フェリと行動する時間が減ってきたということに傍と気づいた。どうということはないのだけれど、それに何か物足りなさのようなものも同時に感じる。

「ほら、目的地が近付いてきた」

ルシエの疑問に答えるように、シャーニッドは見えてきた建物に對してにやりと笑みを浮かべた。まるで今から悪戯をする子供のような、そんな無邪気さすら感じさせる笑顔だ。

「敵情視察つてやつだ、もちろん第八小队のな」

着いた先は何てことはない、いつもの練武館だった。

第九話

曖昧な気持ち（後書き）

相変わらずの亀ペース…。更新速度を上げたいのですが、いかに
もしがたいリアルな事情により滞りがちです。待たせてしまってい
る読者皆様、こんな作品ですが、これからもよろしく願います。

誤字修正しました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8753p/>

この果てのない大地の上で

2011年6月2日18時04分発行